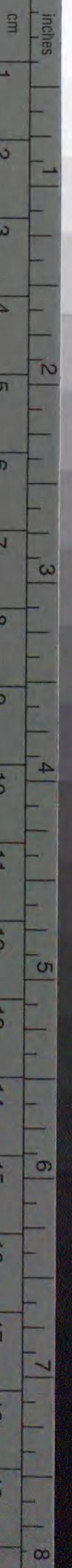


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
1	2	3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25	26	27

210.08  
Ko5483  
00712644

0 複写

210  
Ko



文學士 矢野太郎編

國史叢書

國史研究會藏版



東京 國史叢書 二





文學士 矢野太郎編

國史叢書

北肥戰誌 二

國史研究會藏版



210.08  
K05483



712644

例言

一、本編は、北肥戦誌卷之十七より卷之三十迄を採收す。  
二、反讀を讀下しに改め、語尾を補ふ等、其他總て既刊の諸書に同じ。

例言

一





目次

北肥戦誌

卷之十七

- 神代長良妻室の事……………一
- 神代長良筑前戸板へ浪人の事……………二
- 長良歸城 附納富治部大輔討たる事……………四
- 高橋鑑種大友に對し叛逆の事……………八
- 立花鑑載大友に對し叛逆 附自殺の事……………一〇
- 原田了榮同親種没落 附親種討たる事……………
- 事……………三
- 秋月休松軍 附立花城騒動の事……………三

目次

- 小田鎮光多久に移る 附少貳政興の事……………七
- 大友宗麟龍造寺以下征伐の爲め出馬の事……………一九
- 江上武種大友方となる事……………二四
- 豊後勢佐嘉に陣を寄す 附堤安武隆信へ諫詞の事……………二六

卷之十八

- 豊後勢龍造寺を攻むる事……………三〇
- 犬塚民部大輔同名長門守と討果の事……………三三
- 植木軍の事……………三六
- 大友龍造寺和平 附筑前立花軍の事……………三九

一



高橋鑑種以下大友へ降参の事……………四  
 龍造寺隆信重ねて籠城の事……………四六  
 巨勢軍の事……………四八  
 所々軍の事……………五〇

卷之十九

今山夜軍大友八郎親秀討たる事……………五五  
 多久城軍の事……………七〇  
 高峰口軍の事……………七七  
 巨勢若宮軍の事……………七九  
 大友龍造寺和平の事……………八〇

卷之二十

龍造寺隆信所々征伐の事……………八四

隆信後藤貴明と和平互に養子の事……………二六  
 後藤家由來の事……………二九  
 伊萬里圓通寺觀音由來の事……………三三

卷之廿一

龍造寺隆信須古城普請の事……………三六  
 横岳鎮貞龍造寺へ降参の事……………三六  
 安武家教重ねて龍造寺へ降参の事……………三八  
 隆信須古に移らる井横造落城の事……………三九  
 隆信下松浦出馬附大村高來軍の事……………四四  
 隆信重ねて高來發向の事……………四五

卷之廿二

龍造寺隆信筑前國出馬の事……………五九

小田鎮光切害の事……………八五  
 城原軍隆信江上武種と再び和平の事……………八九  
 光安刑部允化異に遇ふ事……………九三  
 隆信神代長良と重ねて和平の事……………九四  
 隆信東肥前へ出馬兩筑紫降参の事……………九五  
 神崎櫛田宮の由來附執行本告の事……………九六  
 隆信上松浦へ出馬草野落城の事……………一〇一

卷之廿一

隆信西肥前出馬の事……………一〇八  
 平井直秀兄に背く事……………一一〇  
 直秀經治の爲に討たる井須古落城の事……………一一三  
 後藤貴明父子軍の事……………一二三

大友と島津日州耳河合戰の事……………一六〇  
 隆信筑後國出馬の事……………一七〇  
 隆信重ねて筑後國出馬三池落城の事……………一七三

小代入道宗禪龍造寺へ降参の事……………一七六  
 隆信山下の蒲池鑑廣を攻めらるる事……………一八〇  
 肥後國和仁大膳允龍造寺へ和を乞ふ事……………一八一  
 同國永野紀伊守以下同じく和を乞ふ事……………一八三

卷之廿四



龍造寺隆信筑後在陣の事……………二八六  
 河崎出羽守落城の事……………二八七  
 黒木河崎星野由來 附侍宵侍従の事…二八八  
 筑前國脇山軍の事……………二九一  
 赤星統家龍造寺に和を乞ふ 附人質の  
 事……………二九七  
 山下攻矢原三溝軍の事……………二九八  
 蒲池鑑廣龍造寺へ降參の事……………三〇〇  
 隆信歸陣の事……………三〇〇  
 邊春親運龍造寺へ降參の事……………三〇二  
 神代長良養子の事……………三〇二

卷之廿五

龍造寺隆信中國へ通用の事……………三〇四  
 蒲池鎮竝龍造寺に對し籠城の事……………三〇五  
 龍造寺鎮賢肥後國へ出馬の事……………三〇一  
 赤星親隆落城の事……………三〇四  
 筑前國荒平城軍の事……………三〇七  
 戸次道雪龍造寺へ和平の事……………三〇三  
 蒲池鎮竝龍造寺と和平の事……………三〇五  
 龍造寺政家肥後出馬國分の事……………三〇八  
 田尻鑑種龍造寺へ降參の事……………三〇三  
 高來軍龍造寺隆信戰死の事……………三〇七  
 龍造寺政家鍋島信生歸城の事……………三〇九  
 安富下野守純泰佐嘉に赴く事……………三二〇  
 田雜父子軍忠龍造寺靜謐の事……………三二二  
 深堀中務大輔純賢有馬の使者を討つ  
 事……………三二五  
 龍造寺島津和平の事……………三二七

卷之廿六

事……………三二九

卷之廿七

龍造寺久家鍋島信生改名の事……………二五三  
 黒木父子再び龍造寺へ降參の事……………二五三  
 田尻鑑種籠城の事……………二五四  
 戸原籠城 附落去の事……………二六三  
 薩摩勢田尻鑑種へ加勢の事……………二六七  
 肥後の赤星筑後の祝部質人殺さるゝ  
 事……………二六八  
 蒲池益種落城討死の事……………二七二  
 高來深江城軍の事……………二七三  
 江浦攻薩摩衆鷹尾を引拂ふ事……………二七六  
 鍋島信生重ねて豊臣秀吉へ普通の

卷之廿九

龍造寺島津和平の事……………三二七



目次

大友勢筑後國亂入所々軍の事……………三二八  
 上使下向の事……………三三九  
 筑後國所々軍龍造寺島津大友和睦の  
 事……………三三九

天下御一統の事……………三六五

卷之三十

龍造寺政家關白秀吉へ音通の事……………三四二  
 筑紫廣門沒落の事……………三四四  
 岩屋の城沒落高橋紹運戰死の事……………三四八  
 高鳥井の城落去星野兄弟討死の事……………三五五  
 筑紫廣門本領へ歸入る事……………三五八  
 龍造寺島津に到り手切の事……………三五九  
 關自秀吉公島津北條御征伐の事……………三六二

目次終



北肥戰誌 卷之十七

神代長良妻室の事

長良の妻  
故郷鹿江  
に落つ

扱も長良の妻室は、土生島の城を忍出で、河窪藤付の先達の坊へ落著かれ、少時は  
 爰に居られしが、斯くてはいつまで暮すべきと、是より勘内をば差戻し、乳人一人  
 を供として、故郷鹿江を志し、賤の女の物請諧カする風情にて、人目忍ぶの編笠に、さも  
 荒々しき草鞋はき、夜半に紛れて出でらる。頃は卯月の末つ方、山郭公の一聲、雲  
 井に音をさえしかば、婦人斯くぞ思ひついでられける。

心せよなればかりかは時鳥物思ふ身に夜半の一聲  
 と打誦して、分けつゝ行けば小笹原、袖に玉散る篠木野や、爰はいづくぞ八溝の、水  
 の流の末懸けて、妻の行方を安穩に守らせ給へと、あたりなる白髪の御社へ、心計

神代長良妻室の事



りに奉幣あり。あそこや爰とたどり給ひし間、河窪より鹿江までは、僅の行程なりしかども、三日三夜にして、泣く／＼尋ね著しけり。母上を初め皆々驚き、様々にいたは勞り、後には龍造寺のきこえ聞を恐れて、大堂の社家を憑み隠し置かれけり。

### 神代長良筑前戸板へ浪人の事

龍造寺隆信は、神代長良を追落し、大に悦び、重ねて大軍を以て、長良の唯今ありける畑瀬の城を攻めむと議せられけり。此時、田代因幡守へ隆信よりの状にいはいはく、御札令披見候。如仰神代事、相違深重之仁候間、取掛打崩候。爲此等之儀、預御使書御目出度存候。猶期後喜候。恐々謹言。

五月六日

隆 信判

### 田代因幡守殿

斯くて隆信、彌畑瀬を攻めらるべく、小川武藏守・納富但馬守・廣橋一祐軒・副島民部大輔に軍兵を差副へて、山々の口々より向はる。此事、山内へ聞えて、長良、則ち

神代長良  
戸板へ浪  
人す

家人等を集め軍の評定ありしかども、はか／＼して行もあらざりけり。斯かりし間、長良、さらば先づ當城を去りて時節を待ち、重ねて素懷を達すべしと、男女の従者二百餘人、筑前の方へ打越え、飯場の城主曲淵河内守房助を頼まれけり。房助申しけるは、斯様に落人の身となられ、某を御頼ある上、難澁申すは武士の本意にあらず候へども、御存知の如く此所は無下に分内狭く、其上、某微力を以て、唯今上下二百人の人々を扶持し申さむ事、中々叶ひ難く候間、何方へも御開きまし／＼、さるべき大名をも憑まれ候へと、辭し申ければ、長良も尤もに思はれ、夫より同國怡土郡飯盛の城主小田部紹叱入道を頼まれけるに、是も曲淵が申すに同じき返答しければ、長良爲方なく、又同國那珂郡岩門鷲岳城主大鶴入道宗周をぞ頼まれける。宗周仔細なく頼まれて、急ぎ長良の上下二百餘人を迎へ取り、己が領知筑前國戸板といふ所にいたは勞り置き、能く介抱しけり。彼の大鶴山城入道は、元來豊後の士にて、音に聞く姨嶽大蛇の子孫なり。近年筑前國は、豊府よりの支配なる故、來りて鷲岳に在城しけり。當國に於ては大名にて福裕の者なり。また此頃大友家の老臣戸次



伯耆守鑑連も、長良の難儀を聞付け、士は互の事と主の宗麟へ披露し、時々情を加へけり。其後、大鶴入道、長良の夫婦別れくゝにありけるを痛はしく思ひしかば、長良の文に己が手の者五十餘人を添へ、肥前の大堂へ迎にぞ遣しける。妻室は此程の憂き思に身も頽れ、随つて風に奪れ、日に黒み、萩の葉のそよと計りの信も、其方様の便かと戀しう思はれしに、長良の文を見て、迎の使と聞かれしかば、限なく悦び、急ぎ戸板へぞ赴かれける。大鶴入道の心底こそ頼もしけれ。

### 長良歸城附納富治部大輔討たるゝ事

斯くて神代刑部大輔長良は、大鶴山城入道の情にて、妻子・家の子を初め従者二百餘人、四月下旬より八月の半ば迄、岩門の内戸板に時節を待ちて蟄居あり。然るに神代の家人共、藤原の寄合原に參會し、如何にもして、長良を近々歸城さすべしと談合し、一味の輩數百人一同に起りて、龍造寺の代官の三瀬の城にありしを俄に取懸け討殺す。扱此事、山々の味方共聞付けて、急ぎ村々より馳せ集り、勢を一つに

神代長良  
歸城

圓め、早速岩門に使を立て、長良の方へ早く御歸城あるべしとぞ申送りける。されども長良、餘りに無勢なりしかば、合瀬因幡守を高祖の城に遣し、原田越前入道了榮へ加勢の軍兵を乞はれ、又小田部・大鶴よりも加勢ありて、長良其勢三百餘騎になり、さらば歸入るべしとて、永祿八年八月二十日、岩門の戸板を打立ち、本領肥前の山内に歸參ありけり。長良、戸板に浪人の間百餘日とぞ聞えし。斯くて長良、本領へ歸入らる。頃日龍造寺の代官共が、山々へ來りてありけるを一々に追出し、三瀬の城に修理を加へて居城とし、隆信に對して必ず土生島の鬱憤を晴らすべしとぞ謀られける。

一、翌永祿九年丙寅、春より雨一滴も降らず、卯月より五月に至り、青苗さながら枯槁し、耕しても空地となる。爰に神代長良は、三瀬の城にありしが、去年四月、土生島の城にて納富但馬守に謀かられし事、返々も無念に思はれ、今年五月の初め、古川新四郎を召寄せ事の仔細を含めらる。新四郎急ぎ河窪へ赴き、彼の納富が領知上佐賀の内千布村・和泉村へ流れたる河窪よりの水道を悉く切埋め、水を



別筋へ流し懸けたり。納富、是を聞いて大に腹を立て、早速其水筋を切流せし。同月九日、弟治部大輔信純に人數を副へて差遣す。斯くて治部大輔、先づ下徳永に副ひて水筋を巡見しけり。早此事、河窪へ聞えしかば、神代の家人に白水讚岐守・山口周防守・古河新四郎・篠木薩摩守・竹下主水允以下相集り、白髭明神の社にて行を評定して、三百餘人の者共三手に分れ、三所に草伏し、扱足輕の兵を十四五人、土民に出立たせ農具を持たせて、河窪・八溝より徳永へ流るゝ水筋を堰ぎ留むる體にぞ見せたりける。是は納富が人數を誘引出し、右三所の伏兵を以て取籠め捕るべしとの行なり。治部大輔、是を謀とは知らずして、あの奴原一々切つて捨てよと馳寄す。十四五人の者共、元より相圖の事なりしかば、北を指して逃退く。治部大輔是を見て、遁さじと追駈け、南原の築地の内まで追込めたり。其時、彼の三所の草伏、一同に嘩と起り三方より押取籠む。治部大輔是を見て、すは忻られたるよと、持ちたる槍を馬の首に引側め、縦横十文字に突いて廻り、向ふ敵を追靡け、一段高き小土手の上に馳せ登る。斯かる處に、川窪勢の中より武

納富治部  
大輔討た  
る

者一人、古川新四郎と名乗つてつと馳せ合せ、長躬の槍にて突合ひしが、治部大輔誤りて、左の脇の下より右の肩先まで突貫かれけり。治部大輔も無雙の剛の者にて、疼ず新四郎が右の腕を縫ひざまに突透す。新四郎、突かれながら鐵を返しければ、治部大輔馬より逆に落つ。時に新四郎、走り懸りて首を取らむとしけれども、右の腕すくみて叶はざりしかば、弟藏人に治部が首をそ取らせける。此治部大輔、實は西村伊豫守家秀が弟、納富石見入道道周の養子なり。既に治部大輔討たれしかば、其與力小宮佐渡守も竹下主水允に渡り合ひ討死す。其外杉町右馬允も討たれにけり。斯かりし程に、納富が手の者、或は敵中へ駈入りて討死し、或は逃散りて一人も残らずなりにけり。斯くて軍の次第、三瀬に注進しければ、長良手を打つて、去夏土生島の鬱胸を今ぞ少し晴らしけるよと悦ばれけり。是より中佐嘉の内上巨勢の内、大半神代領知となりけり。

一、右八溝の迫合に、治部大輔討たれし事、龍造寺に聞え、兄但馬守急ぎ和泉村まで馳せ來りしかども、早軍散じて後なりし故、空しく佐嘉へ引返しけり。



或はいふ、此時納富但馬守、和泉村に於て川窪勢と相戦ひ、討負けて引退くとも。

一、同年十月廿四日、上松浦天河の城に、龍造寺より差籠置かれし加茂左衛門大夫一家、神代衆に攻められて皆討死す。

### 高橋鑑種大友に對し叛逆の事

去る弘治の頃、筑前國筑紫、秋月兩人、大友逆意の後に至り、其警衛の爲め同國岩屋の城へ、豊府よりの下知を以て、高橋三河守鑑種居住しけり。然るに鑑種、頃日重代の主君大友に背き、岩屋、寶滿の兩城に睨と籠城に及びけり。其謂を尋ぬるに、先づ一つには彼の高橋、實は豊後の一萬田彈正が弟にて、前三河守親種が家督なり。されば豊後の太守宗麟入道、近年其作法甚だ不行儀にして、一向女色ひたすらに溺れ、高橋が兄一萬田が妻女の美なるに迷ひて、わりなく所望ありしかども彈正之を許さず。仍りて宗麟、様々工夫を回し、彈正を易々やすくと毒飼にて殺し、則ち彼の女房を侵し取

高橋鑑種  
大友に叛

其理由

り、十二人の妾の第一と傳きて、深閨に藏し置かれけり。此事、高橋傳へ聞き、大に疎み憤りぬ。又二には、過ぎし永祿四年に、大友より豊前國を手に入るべしと軍兵を差向け、先づ香春岳の城を攻めしかども、高山に依りて容易に事成らず。然る處に筑前國山鹿の麻生鎮貞が調達にて、原田遠江守、同備前守頼て下城し、夫より豊後衆、宮古郡へ陣替、扱三尾原へ陣を寄せ所々へ分遣し、文司城へ取懸けるに、城主仁保右衛門大夫、堅固に城を持ちける故、度々攻め戦ふと雖も勝利を得ず。然る處に、文司城へ關口より船を以て加勢の衆之あり。又中國よりも加勢として、毛利家の人數、關口に著陣しければ、豊後衆合戦叶ひ難く、竟に霜月五日亥の刻、夜中悉く敗軍して立つ足もなかりけり。是より大友家の弓矢、散々手弱く見え、世上の沙汰も宜しからず。斯様の事、彼是に付いて鑑種、心中には大に豊府を疎み、しかも先づ一兩年は色にも出さず差泳へけり、然る處に、其後豊後衆、松山の城長陣の後、鑑種彌、大友家を背き、早逆意の色を差顯はし、中國毛利元就に屬して、既に岩屋、寶滿の兩城に取籠りけり。斯くて此事府内へ聞え、宗麟入道大に立腹あり。さ



らば其鑑種を早速誅伐すべき由、筑前に於て秋月長門守種實・筑紫右馬頭惟門に下知せられぬ。又府内よりも檢使として、生善寺・田尻三河守を差向けらる。此兩使則ち筑前に打赴き、秋月・筑紫に參會し軍の評定を極めて、寶滿表へ相働きしかども、寶滿城嶮難の高山にて、攻め戰ふ事中々事成ならず。之に依りて府内より重ねて齋藤鑑賢・夏足宗譽入道罷向ふと雖も、是れ亦同前にて日を累ね、其外の檢使二三箇年の間、打替り々々來陣して、種々の行を廻しけれども、終に高橋退治事成らずして、空しく月日を送り數箇年に及びけり。斯かりし間、高橋一味の輩次第に出來り、肥前には龍造寺、筑前には原田・立花、筑後には草野・星野・黒木・間注所、各居城に楯籠りけり。

### 立花鑑載大友に對し叛逆附自殺の事

筑前國糟屋郡立花勢樓山城主立花民部大輔鑑載も、永祿八年の春の頃より高橋と同意し、毛利元就に屬して大友に對し逆心を挟みけり。此立花は、元來大友の一家

立花鑑載  
大友に叛

にして、則ち西大友と稱し、先祖右近將監貞載以來、數代筑前の立花に在城す。然るに鑑載、身に取りてさしたる恨はあらざりしかども、頃日豊府の政務を鑑みるに、日に増し月に累ね暴惡なり。其上太守宗麟、南蠻の邪宗を崇敬し、女色に耽り、或は一萬田が妻女を侵取り、或は伯父菊池右兵衛重治道闇入が妻をも奪取り、彼是人法に背きし故、大友家の滅亡近きにありと、未前に其凶を知りて、此度叛逆を企てけり。斯くて此事、府内へ聞え、同年の夏、鑑載誅伐として、戸次伯耆守・臼杵中守志賀安房守・朽網三河守以下大軍を以て、筑前へ發向し立花山に取懸け、五月十七日、辰の一點に矢合あり。七月に及ぶまで攻め戰ふ。城主鑑載、身命の限は防ぎしかども、終に怵へず自害して失せけり。斯かりし間、城は則ち落去し、寄手勝関を揚げ、當城の番には奴留湯主水允を入れ置きけり。

鑑載自害

或る記にいふ、此時大友宗麟出馬ありしとなり。舊記に記さず。

又いふ此時、高橋三河守より立花加勢として、家人衛藤尾張守を差遣すの處に、持口に於て衛藤討死すとなり。非なり。此衛藤が事、永祿十一年に見ゆ。

立花鑑載大友に對し叛逆附自殺の事



原田了榮  
父子没落

原田了榮同親種没落附親種討たる事

此時、高祖城主原田越前入道了榮、同子息上總介親種も大友を背くに依り、豊後勢取懸けて是を攻めけるに、原田父子防戦叶はずして、了榮は行方を知らず、上總介は高良山へ落行き、衆徒を頼みて居たり。然るに親種、ある朝手水を遣ひし處を、最愛の童形、心變こころがばりして敢なくも斬殺しけり。

秋月休松軍附立花城騒動の事

高橋三河守鑑種、近年大友へ逆心し、岩屋・寶滿の兩城に楯籠るに依りて、豊後より檢使打替り、參陣して攻め戦ふと雖も、無雙の要害にて、更に事ともせず。然る間永祿十年丁卯、又々豊後より戸次伯耆守鑑連・白杵越中守鑑速・吉弘左近大夫鑑理に肥後衆加はりて大勢出張し、筑後よりも蒲池・田尻・三池・溝口各、參陣せしめ、寶滿の麓堂尾觀世音寺表に著陣す。然る處に秋月種實よりも、名代を以て出勢し、色

休松合戦

大友勢の  
歴々討死

色計略を廻し、高橋を攻めしか共、寶滿・岩屋猶堅固にして差したる行てさてに及ばず。斯かりし間、寄手人數を二つに分け、白杵鑑速は多田越といふ所に陣を移して野陣しけり。爰に於て秋月種實事、敵高橋に一味する由、陣中に風聞する故、則ち彼の名代を、鑑連陣中に於て討果し、さらば先づ高橋をば差置き、秋月を攻むべしと、同八月十五日、夜中に秋月表へ取懸け、同十六日の午の刻、休松に著陣す。時に種實、居館を差迦はたし古所山の本城へ取登りけり。然る間、各評定を極め、白杵鑑速と吉弘鑑理は、肥後衆を手に屬け八町といふ所に陣替せしめ、戸次鑑連は南部衆・筑後上下の衆を相從へ、其儘本の休松に睨と在陣す。されども秋月勢、時分を見合せけるにや。更に軍を出さず。斯かりし程に、戸次鑑連、徒軍と共に彌永表へ陣を移し向城を取付くべしと議定して、同九月三日、休松の陣を引取りけるに、秋月勢打出で急引足カに取懸け、休松の山中にて火を出し防戦す。時に豊後方散々打負け、足々引足カになりて敗軍し、諸手の歴々討死する者數を知らず、中にも鑑連の舍弟戸次中務大輔・同名兵部少輔・同刑部少輔、扱又筑後衆には、溝口鎮生・三池鑑連舍弟親冬・蒲池近江入道。

原田了榮同親種没落附親種討たる事 秋月休松軍附立花城騒動の事 二三



同九郎兵衛、右何れも討死す。其引足の中にも、筑後國田尻中務大輔鑑種は、場所を退かず、戸次鑑連の側にありて自身手を碎き打戦ひ、其手に敵の首十五を討取る。田尻勢にも討死、手負多く有之あり。其人数には先づ鑑種が弟田尻式部少輔・同名刑部少輔・同大和守・同常陸介・同左京允・同三郎左衛門・同三郎四郎・同右衛門尉・兼行佐渡守・鳥町對馬守以下侍廿人、其外又者三十五人、疵を蒙る者廿九人なり。此外にも諸家の輩悉く討死して、豊後勢難儀に見えたりしに、大將戸次伯耆守鑑連は、少しも屈せず頗る勇を振ひ、敵の近所三桑木一本原に於て、其夜切据り、諸勢は皆足を溜めず筑後川邊まで引退く。此時豊後衆には、朽網入道宗歴・清田入道紹喜・一萬田入道宗慶、竟に足場を退かず、又筑後衆には三池河内守鎮實・田尻中務大輔鑑種、是も其場を去らずして、戸次と一所に怵へたり。然る間、戸次鑑連大に是を感じ、先づ三池鎮實は、父鑑連今度忠節を盡して討死致せし褒賞に、具足一領引出物にしぬ。田尻鑑種は、粉骨を抽んで自身太刀打し首を得たる軍勞とて、祕藏の太刀一腰を與へ、兩人ともに少し休息あるべしと、明くる四日に先づ在所へ歸られけり。斯

大友勢退却

くて翌くれば九月四日、豊後衆山隈原に俄に一城を取付け、戸次鑑連を初め南部衆皆取籠りぬ。然るに八町に在陣したる臼杵越中守鑑連并に肥後衆、早古所山を攻むるに克たず、又引取ること叶はずして、先づ様體を見合せしに、折節大雨降りしかば、其風雨の紛れに漸く八町の陣を退いて、是も山隈へ繰入り、則ち山隈に在番しけり。斯くて次第に冬深くなりける儘に、豊府の三將、山隈の城を去りて皆上筑後へ打入り、戸次は富本村に、臼杵は八町島に、吉弘は吹上村に在陣し、永祿十年の暮は、各、爰にて年を越しけり。扱も大友の軍士、今年休松の軍に大なるおくれを取りけるとぞ聞えし。

一、翌くれば永祿十一年戊辰、豊後の三老、上筑後へ引取りし後、山隈の城へは筑後の三池鎮實と田尻鑑種を在番せしめし處に、秋月衆、當城へ取懸るの由其聞あり。されども實、不實未だ決定なかりしに、近邊の三原左馬大輔が一族に、同名右馬助といふ者、秋月に一味して俄に逆意を企て在所を焼拂ふ。茲に因りて三原親種、居館に怵へず、忽ち在所を立退きしかば、三池も田尻も山隈に怵へ難く城



を明けて、石崎村へ引退きけり。斯くて三原の騒動過ぎて、戸次鑑連此事を開き、三池と田尻が山隈を明退きし事、甚だ不覺の至なりと、彼の兩人を猶敵口近く馬渡村へ押出し在番申付けけり。兩人是非なく思ひしかども爲すべき様なく、數日馬渡村に差固めて居たり。斯かる處に、筑前国立花の城番奴留湯主水允へ、高橋三河守が引廻まはしにて、藝州より毛利衆少々取懸る由〔注進〕到來す。斯かりし間、折節豊後・筑後の軍士等、上筑後に在陣せしを幸に、奴留湯を見次がむ爲め、早速立花表へ駈付けしに、早彼の表には臼杵新助鎮富先駈を以て、藝州〔勢脱〕を打散らし、其上高橋三河守が加勢衛藤尾張守・米藏兵部少輔以下數多討取りて、戸次・臼杵・吉弘の三老へ其死證を見す。死證は首なり。斯くて立花表異儀なく平均しければ、當城の番人奴留湯以下の代として、田北民部少輔・田北刑部少輔・鶴原兵部少輔、此三人を立花城へ入置く。扱豊府の三老を初め諸勢は、皆岩門の如く引入れけり。時に筑後の諸將も、追々岩門の陣へ來り加はる。此時、戸次伯耆守鑑連より田尻鑑種への狀に云く、

御懇書委細令拜見候。如仰去年於休松、向後不易仕候様無別儀可申承候段、況以一通申談候。駿河殿可有變化候哉。斯不及申候。就中於一木御心底之趣顯然仕條御頼敷存候。雖非指物候一腰令進入候。于今無御失念結句爲御禮黄金五兩被掛御意候御丁寧之儀畏存候。併御懇懃之御扱御隔心之様存計候。定而近日は可爲御著陣之條每事以面上可申承候條、不能委筆候。恐々謹言。

六月七日

戸伯鑑連判

鑑種 まゐる御返可被下候

斯くて秋月種實も、其後は打出です。然る間、豊後の諸軍、是よりは肥前へ亂入して、龍造寺隆信の佐嘉の城を攻めむと議す。

### 小田鎮光多久に移る附少貳政興の事

此頃、肥前國蓮池の城主小田彈正少弼鎮光は、隆信と和平あり、壻になりて居たり

小田鎮光多久に移る附少貳政興の事



隆信小田  
鎮光を蓮  
池より多  
久に移す

しが、少貳家衰微せし事を、くれぐれ痛ましく思ひしかば、時々隆信に據りて、少貳政興の當時浪人の體にて居られしを、何とぞ宥免有りたき由歎き申しけり。然れども彼の政興は、龍造寺に對し累年の讎といひ、其上豊府に通じて大友と一味なりしかば、隆信更に許容あらず、結句鎮光に異心ありと忽ち狐疑を挾まれけり。斯かりし程に鎮光、是を謝すべき爲め、隆信の三男鶴仁王丸を養子に申請け、聊か異心なき由をぞ申開きける。然る間、隆信も疑を晴され、鶴仁王丸を鎮光の養子にせられけり。されども猶用心にや。鎮光元祖代々の地蓮池を所替にして、多久の城へ鎮光を遣し、蓮池の城には、舍弟和泉守長信を多久より移して入替へられけり。然るに鎮光は、先祖小田常陸守直光が時、應永年中に關東より肥前へ下向し、蓮池城に居る事已に入代、領する〔地脱カ〕凡そ六千餘町なり。斯かる處に、今度隆信の支配にて、思寄らず多久の山中に移され、大に心服せず是非なき事に思ひけるが、果して年を経ず、翌年の冬より龍造寺に對し害心を挾み、大友方とぞ成りにける。

一、少貳政興は、此時東肥前綾部城に住居せらる。然るに大友宗麟より森越前入道

少貳政興  
筑後に移  
る

宗智を以て、筑後國へ山を越さるべき由申遣されしかば、政興同意あつて、今年永祿十一年六月五日、朝日近江入道宗資宗筑後守を召具し、筑後へぞ赴かれける。此子孫ありけるや知らず。少貳數代の嫡流爰に於て絶えけるこそ淺猿しけれ。

### 大友宗麟龍造寺以下征伐の爲め出馬の事

大友宗麟  
龍造寺以  
下征伐の  
爲め出陣

永祿十二年己巳正月十一日、大友入道三非齋宗麟、筑後肥前の敵高橋・秋月・星野以下、別しては龍造寺隆信征伐の爲め、府内の居城を出馬せらる。首途の祝は去る十二月初旬なり。先陣は例の三老戸次伯耆守鑑連・臼杵越中守鑑速・吉弘左近大夫鑑理にて、已に二月十六日、宗麟筑後國へ著陣あり。高良山の吉見岳へ俄に要害を取構へ本陣と定め、爰にて著到を記すに、分國の士卒凡そ六萬餘兵なり。時に宗麟、田原六郎親永を招き、生葉の星野筑後守親忠が近年大友を背き、島津に従ひしを攻むべしとて差向く。茲に因りて田原六郎、三月中旬より高良山を引分かれ、上筑後に發向し、生葉の妙見城に取懸けたり。されども彼の星野が妙見の城といふは、高



原田親永  
星野親忠  
の姉見城  
を攻む

き事雲を分け、嶮しき事屏風の如く、中々攻め近づく便もなし。其上、筑後守の當國に於て既に三郡を知行し、財寶多く多勢の者なりしかば、田原六郎やたけ矢長に思ひしかども、さし差たる行に及ばず、兎角の計略に滞りて徒に數日を送りぬ。

一、已に豊後衆、高良山へ著陣し、先づ龍造寺を攻むべしと聞えしかば、佐嘉の城中へ打寄りて評定ありけるは、今度豊後の大軍を當城へ引請け、始終の合戦叶ひ難かるべし。先づ偽りて一旦和を乞ふに若くべからずとて、隆信より吉弘左近大夫鑑理まで、様々に申されしかども、鑑理更に肯はず。然る間、隆信、筑後の田尻中務大輔鑑種を頼み、重ねて一札を送られける其狀に云く、

隆信書を  
田尻鑑種  
に送る

任風便聽一書候。然者於此方豊州衆可被取掛之由候條、種々到鑑理訖言雖申入候、無甲斐候而失外聞候。至于今者名字之盡之覺悟迄候。然處内内所存候者被對我等、御屋形さのみ上意あしくは候はん由承付候條、扱者鑑連兼而御頼母敷人にて御座候由承及候條、鑑連以御取合上意を伺申度候。近頃物笑之申事にて候得共、鑑連以御懇被無力置候。何様當末迄鑑連脇槍之儀

者無凌仕候而、可立御用物をと存事にて候。此等之趣可然様御申候而可給候。恐々謹言。

三ノ十一

龍山信判

鑑種まいる申給へ

返々鑑連承及候條、得御指南度候。鑑理の様やふにたのみがひなき人はいやく。

右、隆信より三月十一日の書札、田尻が陣へ到來しければ、鑑種是を差置き難くして、早速戸次鑑連に見す。然れども鑑連、更に眞實の事とも思はざりしにや、兎角の會釋に及ばず、彌、近日龍造寺を攻むべしとぞ聞えける。

一、斯くて大友宗麟、二月中頃より高良山に在陣し、既に卯月にも及べども、敵征伐の事を急がれず、唯、酒宴亂舞に心を模して日を送らる。爰に豊府の三老の内、戸次伯耆守鑑連は、才智ともに世に秀でたる者なりしかば、大に眉を擡め、宗麟を諫めて申しけるは、夫れ舞能猿樂と申すは、治世遊民の時に當りて、平日温席の和

戸次鑑連  
大友宗麟  
を諫む

大友宗麟龍造寺以下征伐の爲め出馬の事



樂にて候なり。然るに公、此度逆徒御退治の爲め、民の費國家の損亡をも顧み給はず、七箇國の士卒を召され、遙々と他國に御馬を出され、已に百日に及び此所に御在陣あり。更々武備を御忘ありて、何ぞやうかくと遊興に日を累ね給ふ。然るに彼の龍造寺隆信と申すは、元邊鄙の孤に候へども、其天性勝れて發明に武邊權變の勇士にて候。然れば其者御退治の爲め御發向あり。斯様に空しく御在陣ましまさば諸軍疎み困窮し、却つて龍造寺より當陣を謀られ候べし。其上程なく梅雨の時節に向ふ。是れ亦軍旅の煩にて候間、曲げて御遊興を思召止められ、急度軍議を御決定ありて、逆徒の中にも先づ龍造寺を取詰められ、御征伐あるべしと理を盡して諫言しけり。宗麟、實にもと思はれしかば、臆て軍の評定決し、筑前國の敵誅伐には、早先立ちて下筑後の鞞田尻以下馳せ向ひしかば、其檢使には眞光寺壽元法印并に浦上左京入道宗鑑を差遣し、生葉の星野へは西原六郎元の如く、肥前の龍造寺には戸次伯耆守鑑連・臼杵越中守鑑速・吉弘左近大夫鑑理に士卒三萬を屬けて差向けらる。然るに此先勢は、既に千栗へ著陣し、諸勢は畠

山へ陣を寄せ、夫より神崎勢福寺の城へ取懸けて、江上武種を味方に引付けむとす。扱又宗麟入道は、豊後一國の士卒を以て警衛と定め、高良山を彌、本陣とせらる。

一、肥前の龍造寺には、豊後衆彌、攻め來る由聞えしかば、隆信を始め親類家人、城中に相集まり色々評議を加へしかども、何れ此事、豊後の大勢を防がむ事叶ひ難かるべし。先づ何れもの妻子等を心安からむ方へ立忍ばせ、其上にて十死一生の決定をも極むべしと談合ありけるに、小城郡蘆刈の鴨打陸奥守胤忠と、徳島治部大輔長房一同に申しけるは、我々知行所蘆刈は片田舎と申し、殊に船便能く候程に、隆信公の御妻子其外鍋島信生公の御足弱をも、皆々預り申すべしと申す。さらば其儀然るべしとて、龍造寺・鍋島の女童又は足手も立たぬ老人は、悉く蘆刈へ退かれけり。

或はいふ、此時隆信の子息長法師丸<sup>後政家と號す。</sup>兄弟は、上松浦の鶴田越前守預り申して、己が獅子城へ招き入れけるとも。



江上武種大友方となる事

江上武種  
豊後大友  
に一味す

其理由

既に豊後衆、神崎郡へ討ち入り城原勢福寺の城へ取懸けて、城主江上左馬大輔武種に使を立て、急ぎ龍造寺へ案内すべき由を申送る。元來此江上は、少貳家輔阿の臣にて、大友へは内々同心の者なりしかども、今迄は龍造寺へ一味しける仔細ありけり。其事を聞くに、彼の武種、先年隆信と合戦の後、互に心を和げ、隆信の三男を養子に契約す。斯かりし故に、去る頃より宗麟、高良山へ在陣にも事を通せず。まして近日豊後衆、肥前へ亂〔入脱カ〕しけるにも出合はず。扱武種、先頃龍造寺へ申遣しけるは、今度大友の軍兵、大勢を以て佐嘉へ取懸け申すの由、然るに某が居城は、東の口一番に候の條、定めて先づ最初に攻め來り候はむか。然らむ時は、城原一手を以て彼の大勢を相支へむ事、中々難儀に候べし。其期に及び候は、南の日の隈山に狼煙を揚げ申すべし。其節に於ては延引なく早速援兵を給はるべしとぞ申送りける。然るに今度豊後の軍兵、案の如く城原へ先づ取懸けしに依りて、武種、龍造寺

へ約束の如く早速南の山へ相圖の火を揚げ、援の兵を待ちしかども、隆信、如何思はれけむ。其援兵一騎も來らず。爰に於て武種大に腹を立て、事の急なるに臨んで約を變ずる法やある。よし／＼今に於ては大友方に一味すべしと、忽ち龍造寺を棄て豊後の三老へ參禮し、長臣執行越前守種兼が嫡男新助武直後種直と牧吉長門守種次が二男大藏大輔後名清兵衛を、宗麟の本陣高良山に於て質人とし、終に大友方となりけり。時に舍弟石見守定種、兄武種に向つて申しけるは、凡そ人、武門に生を受け時に至りて命を惜み、事に臨んで身を捨てざれば、忽ち先祖の名を貶し子孫の面を恥ぢしむ。されば貴公、先年一紙の起請文を以て龍造寺と和平し、今又豊後に従ひ給ふ事、侍の本意に候はず。急ぎ元の如く大友と手切てぎれありて、隆信と死を一所に致さるべしと、面を赤らめ諫言しけり。されども武種承引せず。仍りて定種、腹を居る兼ね、いでさらば、此定種に於ては不義の輩に與くみして、憂世に恥は曝すまじ。所詮腹切つて屍を清くすべしと、腰の刀をすばと抜き、左の脇に突き立つ。兄武種を初め執行越前守、其座にあり大に驚いて、急ぎ定種に取付き刀を奪ひ奪りけ

江上武種大友方となる事



り。定種力及ばず自害を半ばに仕たりしが、定業や來らざりけむ。其疵癒えて程なく本復しけり。此事龍造寺に聞え、鍋島左衛門大夫、彼の定種が心底を感賞あり。年歴て後、其子孫を家人に列し、食祿の地を給はりぬ。今の川瀬是なり。

右本文に載する所は、江上の家の記なり。又ある舊配にいふ、江上武種、去年以來田尻親種が故實に依りて、内心は大友へ相従ふ。隆信、是を知りて今度武種を援はれざるか。然るに弟定種、兄を疎みて自害しけるとなり。此定種が嫡子は、江上左近大夫澄種と號す。天正十二年、江上家種に屬して島原へ乘陣せしめ討死す。子孫なし。其弟、名字を變へて川瀬と號す。

豊後勢佐嘉に陣を寄す事附堤安武隆信へ諫詞の事

斯くて豊後の三將、神崎勢福寺の城を攻めけるに、城主江上武種頓て降參す。其外、神代刑部大輔長良・八戸下野守宗陽・馬場肥前守鑑周・横岳中務大輔鎮貞・筑紫次郎鎮恒・高木肥前守胤秀・犬塚民部大輔尙重・同名彈正忠鎮家・小田彈正少弼鎮光・本

告左馬允頼景・姉川彈正忠惟安以下、悉く大友方となりて段々參陣しけり。同三月二十二日、豊後衆、爰にて三萬餘騎を二手に分けたり。先づ一手は戸次伯耆守鑑連、龍造寺の城より北へ廻り、行程二里を隔て、春日塚原に陣を取る。一手は吉弘左近大夫鑑理、是も戸次と同じく北の方水上山に陣を取る。今一手は臼杵越中守鑑速、城の東の大手龍造寺より僅か一里を隔て、姉村へ押詰めたり。扱又、右三將の方より神代長良へ先達いひ送りしかば、長良も急ぎ三瀬の城を出で、河窪へ出張して竹下といふ所に在陣し、陣代兵庫頭を大將にて、古川佐渡入道を軍奉行とし、松頼關屋・一番ヶ瀬・栗並・杉山・藤ノ瀬以下一千餘騎を差出し、豊後勢の案内者とす。扱大友方の軍兵共、爰彼所に打群がりて所々に放火し、村里民屋に充滿す。前代未聞の壯觀なり。

一、爰に此時、筑後國三潯郡下田城主を、堤筑前守貞元といふ。妻は龍造寺和泉守家門の女にて、隆信とは相壻なり。此者兼ねて大友に相従ふ。然るに豊後の三將、貞元を以て隆信の許へ遣しけるは、今度宗麟公、高良山御在陣の事、一つには



堤貞元隆  
信に大友  
へ降参を  
勸む

龍造寺一家を御征伐の爲なり。早速軍門に下り、高良山の御本陣へ罷出で、御禮を述べられ然るべしとぞ申送りける。されども隆信、默然として返答なし。貞元重ねて申しけるは、某兼ねて、大友の旗下たりと雖も、貴方と縁ありて兄弟に異ならず。然る間心底を残らす申す。聞き給へ。先づ今度の弓矢、大友方の大軍と龍造寺の一勢を物に比べなば、誠に九牛が一毛と申すべし。然るに軍を相挑まれ、如何なれば勝利の候ふべき。唯、三將より申送られし如く、早々降参ありて、高良山に出頭せられ、宗麟公へ御禮を申されよ。尤も其儀に於ては、一には國家の治平、二には龍造寺家の相續、三には諸軍の安泰なりと、頻に教訓しけり。されども隆信、猶應諾の色なくして、貞元に向つて申されけるは、御邊の口能尤の至なり。然れども最前我等より吉弘・戸次の兩老へ、色々申したる仔細も候ひつれども、其節は其甲斐なく、既に近日佐嘉へ取懸け、當城を圍みし上にて、如是の<sup>あつかひ</sup>愀更々隆信が氣に應せざる處なり。早此上に於ては、名字の盡くるまでに、豊後の大勢を速に此城へ引受け、討死するより外餘儀候はずと返答申されしかば、貞元

安武鎮教  
隆信に大  
友へ降参  
を勸む

重ねて詞なく、座席をぞ立ちにける。夫より又、同國貝津の城主安武山城守鎮教が方よりも、龜山一竿入道を使にて、堤に同じく申送りしかども、隆信彌、承引なし。是は宗麟の内意を含み、兩人が申しける處なり。斯くて大友の軍兵共、彌、龍造寺を攻むべきにぞ相決しける。隆信、最前吉弘・戸次兩人が方まで、和平を願はれしかども其甲斐なく、今に於ては、又あなたより堤安武等に含めて、和平の愀を入れしかども、隆信承引なし。其<sup>いはれい</sup>謂奈となれば、筑前の秋月・高橋が方より、中國へ大友勢亂入の事を注進せしに依りて、毛利衆段々渡海し、當三月下旬より筑前に所々軍始まり、其上近日又々、毛利勢雲霞の如く龍造寺以下の加勢として、關口并に立花衆へ押渡る由相聞えしに依りて、豊後衆今に於ては和興を求めず。されども隆信は、又中國の加勢を預けられし故、今度堤安武が申す旨に承引あらぬとなり。

### 北肥戰誌 卷之十七 終

豊後勢佐嘉に陣を寄す事附堤安武隆信へ諫詞の事



# 北肥戰誌 卷之十八

## 豊後勢龍造寺を攻むる事

斯くて北山に陣したる豊後の軍士、永祿十二年四月六日、龍造寺を攻むべしと評定を決し、戸次伯耆守鑑連・吉弘左近大夫鑑理を兩大將にて、水上春日の陣を發し、神代勢を案内者とし、其道々を放火せしめ、長瀬御領蠣久へ相働く。神代の手の者は、既に龍造寺の城近く、神野・三溝・大財村まで討ち入り、所々に火を懸け焼拂ふ。時に城兵に副島式部少輔・百武志摩守・田中上總介・秀島源兵衛并に秀島が與力に合満民部以下出向ひ、大財村にて神代勢と相戦ひ、數多討取りて追拂ふ。斯かる處に、豊後の兩將も續いて來り、構口に於て散々打戦ふ。城兵も此所を破られては叶はじと、討ち出で、合戦す。されども豊後衆、鐵炮を以て稠しく打ちすくめしかば、

大友勢龍造寺を攻む

城兵終に叶はずして城中へ引籠る。されば此時豊後衆、付入に續いて攻入りなば、由々しき大事なるべきに、龍造寺の幸運にや。豊後の一將吉弘左近大夫、俄に煩出し進退心に任せずして、先づ攻口を引退き、軍兵を配り其口々を差固めけり。此時、寄手の輩に手負歴々多し。斯くて豊後の兩將、今日は素より陣替の爲なりしかば、戸次伯耆守は龍造寺の城より一里を隔て、北の方高木村八幡の社内に陣を取り、吉弘左近大夫は漸く病を扶けて長瀬村に陣を固む。

一、此時、筑後國築河の城主蒲池武藏入道宗雪も、大友の催促に應じ、去る四月四日より下筑後の軍士を引いて、榎木津を打渡し肥前に討ち入り蒲田江に陣を取る。時に吉弘左近大夫より宗雪入道への狀に云く、

御札令拜見候。然者今日陣易候處、長良衆敵取合及、鍵候由候條、鑑連・鑑理も罷出候。敵取出候者數度追込、於構口以手火矢悉仕付候。忤手にも手負歴々候。明日者惡日候條、以衆評口々可相定候。扱又犬塚彈種々口能とも候哉、更存分無實所事多候。殊に神崎郡之儀、筑紫鎮恆江被遣候條、犬彈存分



之儘に者不可有之候。必以面上可申達候。恐々謹言。

卯月六日

吉左鑑 理判

宗 雪

參御返し

追而明日は以衆評從是可申入候。御内略不可有御油斷候。已上。

此時、犬塚彈正忠より宗雪を頼み、領知を望みしにや。右鑑理の紙面斯くの如し。

### 犬塚民部大輔同名長門守と討果の事

犬塚民部  
大輔同名  
長門守と討  
果す

豊後衆參陣の半ば、去る三月下旬、神崎郡蒲田江の城主犬塚民部大輔尙重と、同じく崎村の城主犬塚長門守鎮直と害心を挟みて切死しけり。此兩人、先祖は下筑後の住人にて、蒲池・大木の一族、當時東肥前の内にして頗る大身の者なり。さればその刺違へし意趣を聞くに、尙重は龍造寺の婿なれども、今度大友に一味し、鎮直は差たる縁はなけれども、龍造寺に一味す。斯かりし故に、兩人從弟ながら敵味方と

其原因

分れて、已に討ち果さむとぞ思立ちけり。されども離れぬ一族なりしかば、先づ兎角して色にも出さず押送りぬ。斯かりし處に、蒲田江の民部大輔尙重より、彌、鎮直を討取るべしと思立ち、兼ねて家人等に申含め、三月廿七日使を崎村へ遣して、長門守に申送りけるは、今度豊後衆參陣に付いて相談申すべき事候間、道手まで出合ひ給へ。面談を致すべしとぞいひ遣しける。道手といふ所は、蒲田江崎村の間なり。長門守、仔細に及ばず、則ち參るべき由返答す。爰に長門守の家人に、上瀧石見守といふ者あり。其姉女は民部大輔所へ召仕へけり。此女、前の夜、彼の工を聞付けて、本主なれば此事を長門守へ急ぎ告知らせむと思ひ、其夜半に城の堀を遊ぎ越し、崎村へ赴き彼の企をぞ告げける。長門守是を聞き、元より思儲けしなり。何條事のあるべきや。彌、道手に出合ふべしと、同名左兵衛尉家虎・同伊豆守・同左京允・同彦太郎・向井幸圓入道・上瀧石見守・栗原左馬允・野口藏人・江島左近允、其外荒木恒武以下究竟の者共四十餘人引勝つて、約束の如く道手へぞ出向ひける。斯くて民部大輔も、中野宗明を初め宗徒の家人を選び召具して、道手に出合ひ長門守に面談し、扱此度大友出馬の



事などいひ出しける其半ば、兼ねて相圖やありけむ。民部大輔が側にありし中野宗明、長門守に居寄りて、唯一太刀にと礮と斬る。長門守斬れながら、中野には目を懸けず、民部大輔を引寄せ中を刺通す。尙重中を透とほされても、獅子王といひける重代の太刀、ずばと抜きしかども、痛手なれば叶はずして忽ち事切れけり。中野は栗原野口に討たれたり。斯くて雙方の家人等入亂れ散々切合ひて、鎮直が家人上瀧石見守も討死す。されども崎村の者共、あたりの敵を切拂ひ、主の手を曳いて崎村の方へ引返す。蒲田江の者共、栗山出雲守・鵜池原・手塚以下遁すまじきと追駆くる。時に長門守は、深手にてありしかば、歩行心に任せずして、崎村の居館まで叶ふまじと思ひけむ。家人共が防ぎし隙に、今村用作の龍雲寺に入りて腹搔切り臥しにけり。斯くて鎮直の家人等、傍輩残らず相催し、早速蒲田江に押寄せ、尙重の城を討破り、城に火を懸け相戦ふ。城中防ぐ事を得ず、尙重の妻子は蓮池へ落行き、龍造寺長信をぞ頼みける。彼の妻女は長信には姉、隆信には妹なり。此後、横岳下野守頼續に嫁す。然るに犬塚民部大輔尙重に、男子二人あり。嫡子は前腹にて三郎といひ、二男

は後の龍造寺腹にて太郎と號す。家重と太郎は、眼前隆信の甥なりしかば、野心の者の子なれども、母と共に佐嘉へ迎へられ、成長して後、龍造寺の名字を受けて與三左衛門信尙といひしが、又本名犬塚になり、茂續とぞ改めける。扱前腹の三郎は、助け置くべきにあらずと、鍋島左衛門大夫信生、手づから切害ありけり。或はいふ、右兩犬塚切死せし事は、尙重が蒲田江の城へ、鎮直を饗應に招き寄せての事なりとも、又いふ、尙重は犬塚左京允切害しけりとも。斯くて隆信、今度、犬塚長門守鎮直が忠死を憐み、同四月二日、彼の一子百十九へ父が知行の内、肥前國黒津野三百町を宛行はれ、又同八月廿五日に、内曾我部ヶ里を加恩ありけり。其狀に云く、

倉戸郷の内

一、内曾我部ヶ里

一所

一、黒津野

御知行肝要に候。

犬塚民部大輔同名長門守と討果の事



永祿十二年八月廿五日 山城守判

犬塚百十九殿

### 植木軍の事

龍造寺の城中には、鍋島父子を初め龍造寺の一族、其外小河・納富・福地・江副・安住・百武・西村・副島・馬渡・土肥・成松・内田・小林・嶋打・徳島・野田・高岸・石井一族以下譜代相傳の家人等相集まり、必死になりて楯籠る。其勢僅か三千餘騎なり。爰に杵島郡佐留志の城主前田伊豫守家定は、龍造寺には新參なり。然るに今度豊後の大軍、佐嘉へ取懸け、龍造寺の滅亡既に近きにありと聞付けしかば、此期に及び兼ねての約を變じ見放すべきにあらず。一所に取籠りて兎も角もなるべしと、一家の男女都合百五十人、佐留志の居城を棄て、龍造寺の城へぞ入りにける。然るに隆信、衆を集めて申されけるは、情、事を案するに、唯今當城に籠る所の軍兵僅に三千を以て、大軍の敵を防がむ事、千に一つも勝利あるべからず。さりながら先づは中國毛利

の援兵を憑む計りなり。若し其援兵も延引せば、十死一生に決して、城中を突出で一人も残らず討死すべし。又左もなくば、一向城に火を懸け腹を切るべし。此二つの外はあるべからずとぞ申されける。一座の面々申しけるは、仰の如く城中無勢にして、頼なく相見え候。然れども中國の援兵を待たずして十死一生に決し、切出でむも如何なり。されば先づ此度は、大友に御降參あるべきか。又先年の如く筑後の方へ御開き候はむかと、衆議區々なりけり。其時鍋島左衛門大夫申されけるは、唯今大友へ降參の事、先頃提・安武が方より和平を愀ひし時は御承引なくて、今更此方より阿容々々と降參とは、中々申し難き事なるべし。又筑後へ立退れむは然るべからず。夫を如何と申すに、先年には事變り、今度は彼の國人悉く敵に一味す。然るに其敵地へ落行かむ事は、偏に飢ゑたる虎に近づくが如くなるべし。先づ某、つくぐと思案を廻し候に、當城へ唯今籠る處の輩は、或は骨肉を分けたる親族、或は譜代恩顧の家人なり。然れば其中よりよも反忠の者は候まじ。城中に野心の者すら出來らざば、當城無勢なりとも、急には落城申すまじ。其中必



定、中國よりの援兵来るべし。然れども先づ此儀を待たるべきか。よし／＼中國よりの加勢来らずば、其時の評定なるべし。各、如何にと申されしかば、隆信を初め一座の面々、皆尤も同意ありけり。斯くて豊後の軍兵、臼杵新助鎮富を大將にて、多布施口へ取懸るの由注進あり。さらば是れ追拂へと、鍋島左衛門大夫信生、龍造寺下總守信種・小川武藏守信友・鍋島將監信定・同名彈正左衛門賢秀・成松刑部大輔信勝・安住石見守信能・倉町近江守信光・納富越中守信安・秀島孫五郎賢同・百武志摩守賢兼・圓城寺美濃守・於保賢守・石井・合満・野田・高岸以下三百餘騎、多布施口へ馳せ向ふ。中にも鍋島左衛門大夫一陣に進んで、弓鐵炮を打違へ散々に相戦ふ。時に豊後衆打負けて、北をさして引退く。城兵是を追駆くるに、植木村にて豊後衆取つて返し烈しく相戦ふ。此時、城兵に北島河内守・副島式部少輔・高岸主水・同木工兵衛・同新左衛門進み戦ひ各、分捕す。軍半ばと見えし時、城兵の中より百武志摩守、陣頭に馬を乗出し大音聲にて名乗りけるは、唯今爰に進み出でたる兵は、龍造寺の家士頭百武志摩守にて候。尋常に槍を參らうとぞ呼ばはりける。時に豊後勢の中よ

## 植木合戦

り武者一騎馳せ出し、誰とは知らず志摩守に突いて懸る。二騎の間に少計りの水道あり。勝負更に付かざりしに、志摩守が槍先、少し上ると見えたりしが、豊後衆如何したりけむ。馬より逆にぞ落ちたりける。此者何様然るべき者にてやありけむ。後に控へし豊後の士卒、一度に踵と駆け寄りて、落ちたる者を昇乗せ、味方の内へ引いて入る。後に誰ぞと尋ね聞くに、今日の軍の大將臼杵新介なりけり。斯くて豊後の軍兵長瀬村へ引退く。城兵勝に乗り續いて是を慕はむとせしかども、戸次伯耆守が軍兵、三溝口へ攻来り、鍋島以下の後を取切り、既に龍造寺の城戸口へ攻め詰むる由聞えし間、先づ其敵を拂はむと皆々取つて返し、三溝口に群りたる戸次勢を追散らして、鍋島左衛門大夫を初め三百餘騎の者共、城中へぞ引入りける。

## 大友龍造寺和平附筑前立花軍の事

斯くて豊後の三老戸次伯耆守・吉弘左近大夫は、長瀬蠣久に陣を張り、臼杵越中守



大友龍造  
寺和平

阿禰村に在陣し、其近邊の村々を放火して、狼煙天を焦し城中を侵し苦しむ。加之神社・佛閣を焼失ひ、或は佛像・神體の玉眼を拔取り、或は寺院の經卷を奪取り、亂妨する事いふばかりなし。是れ豊後勢は、士卒ともに耶蘇宗門の故となり。斯かる處に、四月十七日肥後國城越前守親冬、雙方に入りて和平を談合せしに、隆信、仔細に及ばず納得ありしかば、戸次も吉弘も和興に決定して軍を止め、長瀬蠣久の陣を引いて本の如く春日原河上表へ差<sup>くつろ</sup>甘げけり。斯かりし程に、追付隆信より納富越中守信安を、戸次伯耆守が陣所へ使として有馬一足を相送らる。則ち大友家へ隨はるゝ所の印なり。其上、質人に納富但馬守弟秀島河内守が家督秀島四郎左衛門家<sup>此時は未だ孫五郎賢周と號す。</sup>を、府内へ差送らるべきにぞ極まりける。其禮答の往返に、豊後の三老暫く肥前に在陣す。然るに、筑後國大鶴山城入道宗周が許より飛脚を以て、立花表へ中國の軍兵夥しく著陣し、其人數、稻麻竹葦に異ならず、己に事穩便ならざる由急を告ぐ、此注進を聞いて城越前守親冬は、吉弘左近大夫が手に屬し、河上に陣してありけるがよしなしやと思ひけむ。帷幕を捨て、本國肥後に歸りぬ。然

るに又、立花の城番として豊府より入置きたる田北・鶴原が方よりも、藝州の敵兵雲霞の如く渡海し、既に當城を圍むの由、高良山の宗麟の本陣へ早打<sup>しきやう</sup>敷並なりしかば、宗麟驚き、肥前に在陣したる三老共の方へ、早速龍造寺と和平をなし、其許<sup>もと</sup>の陣を拂ひて急ぎ立花表へ罷向ひ、中國勢を追拂ふべき由、申送られけり。茲に因つて豊後の三老、急ぎ龍造寺の質人秀島四郎左衛門を具して肥前を引拂ひ、彼の秀島をば高良山の本陣へ引渡し、五月初三老は五萬六千餘騎を引率して、敵高橋が城下寶満・岩屋の麓を駈け通り、臼井崎に著陣し、夫より杉山に一兩日野陣し、爰にて人數を兩手に分け、藝州陣と谷一つを相隔て、陣を取向ひ、數度の迫合之ありしかども、更に勝劣なかりけり。斯くて五月六日、戸次伯耆守引立にて、筑後衆と同じく長尾といふ敵陣へ取懸けたり。されども敵の陣構へ稠しくして事ならず。然れども切岸に於て合戦し、伯耆守自身槍を執りて、敵悉く仕付け陣屋へ追籠め、其儘異議なく引取りぬ。此時、筑後衆の内田尻中務大輔鑑種軍功を抽でて相戦ひ、家人等八人疵を被る。仍りて宗麟より鑑種へ感狀を與へらる。



一、同月十八日、豊後衆・筑後衆、同陣を以て重ねて藝州陣に取懸け、切岸に於て合戦す。此時も田尻勢の内、金栗織部助手火・楠原勘解由左衛門同・三嶺兵部左衛門同・森出雲守同・中島刑部左衛門同・中間の彌太郎同。合せて六人疵を蒙り、東三郎太郎・原口善助討死しけり。

一、さても今度筑前国立花表には、中國藝州衆吉川駿河守元春・小早川左衛門佐隆景兩大將にて、宍戸安藝守隆家・吉見三河守正頼を副將とし、其外桂新五左衛門・熊谷小次郎・浦兵部少輔・赤川能登守を初め、福原・川野・小笠原・高瀬・三澤・米原以下、山陽・山陰・南海十餘州の軍兵都合五萬餘騎を以て渡海し、總大將毛利右馬頭輝元は、長府まで出張ありて諸軍を下知せられ、先づ大友持の立花山の城を取圍み、其外山野に陣取りて豊後勢と陣を對し、數日相戦ふと雖も、未だ勝負はなかりけり。斯くて五月も過ぎ閏五月初め頃、宗像大宮司氏貞より藝州陣へ通用し、其往返之ある由相聞えしに依りて、豊府三老の下知を以て其通用を斷つべき爲め、肥後衆其外人數を率し、藝州陣の前を打通りて宗像表へ相働き、人畜等牽

筑前立花  
合戦

捕り、本陣の如く繰取りける處に、同三日、立花城を藝州勢攻め破りて、豊府よりの城番田北民部少輔・同名刑部少輔・鶴原兵部少輔此三人を虜にし、船より姪の濱に差送りけり。藝州衆の仕様、情ありとぞ聞えし。然るに高橋三河守・秋月長門守兩勢を並べて水木に城を構へ、大友勢の豊後・肥後・筑後等の通路を差塞ぎけり。茲に因つて立花に陣したる豊後衆、夫より往來たやす輒からざるに迷惑し、長陣といひ彼是に付き窮しければ、斯くては叶ふべからずと、同閏五月下旬、戸次・臼杵・吉弘の三老相談を以て、高良山の本陣宗麟より下知せられ、南郡衆に筑後衆を差加へ、博多表氣古といふ野山に中陣を構へ、通路を差搦めて、其後彌、雙方立花に對陣し、既に十月に及びけり。されば去る五月より今十月に及び、都合十八度の合戦なりしかども、互に勝劣あらず。然る處に宗麟入道調議にて、舍弟大内太郎左衛門輝弘に軍兵を相付け中國へ差渡し、藝州衆の跡を撃たむとす。斯かりし程に、其由、中國より立花に於て藝州陣へ急ぎ注進ありしかば、吉川・小早川を初め、先づ行に及ばずして、立花城には浦兵部少輔・桂新五右左衛門能登守平の教經子孫、代々精兵なり。・赤河能脱



〔カ〕登守、此三人を殘置き、總勢は十月十五日の夜中に、立花表を悉く忍引しのびひきに繰取りけり。豊後衆勝に乗り、許斐表まで付慕ひしかども、さしたる敵も討取らず。然るに宗像大宮司氏貞、中國方として居城葛岳しかに睨と楯籠りけり。されども是も臼杵越中守鑑速が調達にて頓て降參す。斯くて豊後衆、夫より西郷といふ所に陣を直し、立花の城へ中國より残り居たる浦・桂・赤河此三人を虜にし、筑後衆一人づつを副へ、關口まで打送りけり。是は去る閏五月に、立花城にて田北・鶴原を藝州衆虜いけぞりしかども、結句懇志を加へて、姪の濱まで差送りたる返禮とぞ聞えし。扱中國に軍ありて、大内輝弘討死せしとなり。然るに今度、中國より大勢渡海の根元は、一つは龍造寺以下の味方を援はむ爲と聞えしかども、専らには高橋が勸にて、九州を手に入るべしとの事なりけり。然るに豊後の諸軍、夫より三笠郡へ陣を返し寶滿へ取懸け、高橋を攻めて日を累ね、今年は宰府に越年す。大友入道宗麟は、年内高良山を立つて府内へ馬を納られけり。

藝州勢九  
州渡海の  
原因

### 高橋鑑種以下大友へ降參の事

翌くれば永祿十三年元龜と改元す庚午、豊府の三老戸次・臼杵・吉弘を初め、肥・筑・豊の諸勢共、早青陽の霞とともに太宰府の陣を打立つて、高橋三河守鑑種が岩屋の城を攻めて相戦ふ。中にも筑後國草野中務大輔鑑貞・蒲池志摩守鑑廣・田尻中務大輔鑑種、進んで岩屋層手裏カへ打登り城中に矢入す。然るに城主高橋鑑種、數日の防戦に退屈してやありけむ。さしたる行に及ばず、先非を悔いて懇望しければ、吉弘左近大夫のあつかひ愀を以て終に降參の上、下城に及びけり。此鑑種、大友に背き近年籠城せし事、當年まで既に七八箇年なり。斯くて宗麟入道、高橋が降參を聞き、首をも切るべきなれども、其罪を宥免すべしと、則ち高橋が家督には、吉弘左近大夫が弟主膳兵衛鑑盛を居るられ、寶滿の城へ差籠めて勤番せしめ、又三河守鑑種には、豊前國にて規矩一郡を宛行はれ、頓て鑑種は豊前へ打越し、岩借城に隱居しけり。斯かりし程に、古所山の秋月長門守種實・高祖の原田越前入道了榮・五ヶ山の筑紫右馬入道良薫

高橋鑑種  
大友に降  
參す

高橋鑑種以下大友へ降參の事



秋月原田  
等大友に  
降参す

も、皆大友へ降参す。されども其内に、筑後國妙見の城主草野親忠は、猶籠城して打戦ひ、更に大友へ随はず。

### 龍造寺隆信重ねて籠城の事

大友宗麟  
龍造寺退治の爲め  
重れて出陣

肥前國佐嘉の城主龍造寺山城守隆信は、去年の夏、大友と和平あり。既に質人を出されしかども、唯、一旦の計略なるに依りて、彼の質人秀島四郎左衛門家周、今年元龜元の春、府内より忍んで佐嘉に歸る。之に依りて大友宗麟、重ねて龍造寺退治の爲め自ら大軍を率ゐ、府内を發足あり。三月十日先づ日田へ著陣し、夫より筑後へ打入り、去年の如く高良山を本陣として、例の三老戸次伯耆守鑑連・白杵越中守鑑速・吉弘左近大夫鑑理に、豊後・筑後・筑前の士卒を差副へて肥前の佐嘉へ向けらる。斯くて此勢、三月廿七日、各、肥前へ打入り、戸次鑑連は龍造寺の大手東の口阿禰境原へ差寄せ、白杵鑑速・吉弘鑑理は、北の口春日原・河上表へ押廻し、下筑後の輩は南の舟手を承りて、榎木津に在陣し、兵船を用意す。檢使は雄城播磨守・上野兵

部少輔なり。高來の有馬左衛門佐義純も、大友へ力を合せ、高來・藤津・杵島其外領分の士卒を相催し、西の口砥川・丹坂・牛尾まで出勢す。山内の神代刑部大輔長良も、先立ちて河窪へ出張し、去年の如く同名兵庫頭を頭人にて、古河佐渡入道眞清を軍奉行とし、三瀬内藏助・杠左馬大輔・國分和泉守・小副川藏人・藤原善四郎・中村壹岐守・田中安藝〔守脱カ〕・秀島惣兵衛・陣内九郎左衛門等を差出し、河上に陣を取る。此外國中の輩には、高木肥前守・江上左馬太郎・犬塚彈正忠・横岳中務大輔・馬場肥前守・筑紫越後守・綾部備前守・藤崎筑前守・本告左馬允・姉川中務少輔を初めとし、東肥前の侍は皆大友方となりて、千布金立春日表へ出張しけり。爰に蓮池の舊主小田彈正少弼鎮光は、近年隆信の壻になりて、多久の梶峯城にありけるが、去年豊後衆來陣の時より、志を大友方に通じ、今度は彌、多久の居城を打つて出で、水上山に陣を取る。されば此度大友の從軍都べて八萬餘騎と聞え、山野民屋に群り日々夜々に國中を横行し、去年焼残したる神社・佛閣・森林に至るまで悉く焼拂ひ、此時に及び古跡の伽藍・神寶・佛經残らず灰燼とぞなりにける。斯くて龍造寺の城中には、隆信同



名の一族鍋島の一類、其外譜代の家人僅に五千餘騎なり。隆信、是等と評定あつて、皆々死を一途に極め、持口の手分を定めらる。先づ東の大手をば鍋島豊前守信房・同左衛門大夫信生・小川武藏守信友を初め、末々の龍造寺差固む。南の船手をば蓮池の城にありける龍造寺兵庫頭長信に下知し、同名下總守信種を差副へらる。西の口砥川・丹坂・牛尾は、龍造寺左馬頭信周・同名左衛門佐鑑兼を以て守らせらる。北の河上口をば龍造寺右衛門大夫家就・納富但馬守信景・廣橋一祐軒信了固めて各之を守る。

一、此時、大友より下筑後榎木津の渡、わた其外諸浦船留奉行として、夏足三河入道・齋藤民部少輔、四月廿日に來陣す。

### 巨勢軍の事

斯くて寄手も卒忽に取詰めず、駈と城中を圍んで四月下旬に及びぬ。然るに同月廿三日、城中詮議ありて、倡いざなや不意に打つて出で一戰を勵し、敵の分際を量るべし

と、先陣は鍋島左衛門大夫・小川武藏守、二陣は納富但馬守、しんがり殿は隆信の旗本にて、東の口戸次伯耆守鑑連が陣に切懸けらる。鑑連は物馴れたる大將にて、備を亂さず其勢二千計りと見え、中田町へ繰出し、城方の先手鍋島と相懸りに雙方鬨の聲を作り、矢を射違へ入亂れて合戦す。其半ば鑑連兵を引分け、自身は千住村の堂の前に廻り、隆信の旗本へ切つて懸り散々に駆け立つ。時に隆信の旗本、打負けて既に難儀に及ぶ。此時鍋島信生の陣へ、注進櫛の齒を曳きしかば、信生則ち我が陣の軍をば納富に渡し、其身は手勢を引揚げ、倉町大隅守信吉に談合し、鬨の聲を揚げて、戸次が陣へ切懸り火を散らして相戦ふ。此時城兵に、百武志摩守・高岸主水・宮崎伊勢守・北島河内守・池田式部少輔・西村新右衛門・長福寺雲叔以下、進み戦つて分捕し、中島三郎四郎は、信生の眼前にて敵三人切つて臥せ、其身も疵を蒙り、水町彌太右衛門生年十五歳、大に打戦ふ。爰に於て隆信の旗本、忽ち備を立直し、數刻戸次と相戦ふ。鑑連も千變萬化し闘ひしかども、竟に打負け敗走し、僅に五百計りにて明屋敷のありしに取籠る。隆信、勝に乗り猶戦はむとありしかども、俄に大雨降出し、



其上日暮になりしかば、急に御歸城候へと、鍋島頼りに申されしに依り、則ち歸城ありけり。此時城兵に、久富兵庫助、阿彌・境原まで相働き、軍功を抽んで討死す。戸次伯耆守は明くる廿四日、横大路の茶白山へ陣を移す。

所々軍の事

一、五月中旬、大友の軍士、東の口高峯まで押詰めたり、城兵是を追拂はむと討つて出で散々相戦ふ。寄手には下筑後の田尻伯耆守親種、一陣にありて深手を負ひ、合戦利を失うて引退く。時に城兵石井孫三郎討死しけり。田尻は本國に歸り、六月廿三日居城鷹尾に於て死す。

一、同月下旬、南の船手を攻むべき由、依りて兵船第一の條、下筑後の輩に於ては急ぎ歸陣せしめ、榎木津に到つて、睨と在陣すべき由、宗麟入道、高良山の本陣より肥前の口の在陣中へ下知せられし狀に云く、

水貝表之行、兵船第一之儀候條、早々有歸宅船數以馳走到榎木津、睨與在陣

專一候。聊不可有緩之儀候。猶戸次伯耆守可申候。恐々謹言。

五月五日

宗麟列

田尻中務大輔殿

南無道具  
留利合戦

一、六月十三日、北の口長瀬村の南無道具留利に於て、城兵と神代長良の手の者討ち戦ひ、城方打負けて數多討死す。時に宗麟より長良への狀に云く、

(前文闕ク)

以行敵數輩被討捕被得勝利之由感悅無極候。今度御心掛之次第取鎮仕様可顯其志候。雖無申迄候可被勵懇忠事可爲祝著候。委細尙白杵越中守可申候。恐々謹言。

六月廿日

宗麟列

神代刑部大輔殿

一、七月六日、下筑後の大友・田尻を初め、豊府よりの兩檢使雄城播磨守・上野兵部少輔同心を以て、兵船數十艘、龍造寺の南の船手端津村へ發向し、與賀川副の城兵北村清兵衛・縮江村の無量寺以下と相戦ひ、利あらずして引退く。此時、筑後勢に

船津合戦

所々軍の事



討死多し。其名略す。

一、同月十八日、肥後國城越前守親冬、隈部式部大輔親永も、宗麟の下知を得、肥前へ來陣して川上口に陣を張る。扱龍造寺の城攻、來る八月廿日と決定なり。此時、宗麟より隈部への狀に云く、

先書如申候。佐嘉表一働、來廿日に議定候。就中親永事、親冬同前河上江可有馳走之段申出候。親冬事、今日如彼表越山之條、繼夜於日出張肝要候。雖無申迄候、人數等別而可被申遣事可爲祝著候。爲存知候。恐々謹言。

七月十八日

宗麟判

隈部式部大輔殿

浮盃口合戰

一、同月廿七日、廿八日、下筑後の大友方、浮盃口に於て重ねて合戦し、疵を蒙る者多し。其名之を略す。

此時、鍋島左衛門大夫の下知に依りて、池田一黨打出で、大に軍忠を抽んづ。

一、八月六日、下筑後の輩、重ねて浮盃口へ押渡り合戦す。此時、田尻が手の者松本

彈正忠、徳永又次郎疵を蒙る。

一、同月七日、龍造寺の城中に各評定あり。斯様に數日を送り、大敵に圍まれて闇闇と暮さむ事、日に増味方の弱よわりなれば、倡いざや隆信公を初め、何れも東の口へ切つて出で、戸次伯耆守と懸合せ、十死一生の軍を勵ますべしと、先勢は鍋島左衛門大夫、二陣は小川武藏守、殿は隆信の旗本にて、高峯口へ打つて出で、戸次と合戦あり。初度の軍は城兵打負けしかども、二度目の槍に戸次利を失ひ、巨勢野へ引退く。時に龍造寺の軍士の中より堤治部允、高岸主水允分捕す。隆信申されけるは、いで、此勢に續いて巨勢野へ取懸け、戸次を駈け散らし、夫より高良山宗麟が本陣へ押寄せ、一戦の中に討ち崩すべしと申されしかども、鍋島を初め衆軍同意せずして、皆城中へ引入らむとしける處に、山内の神代衆に八戸宗陽の手の者相加はり、大勢の敵繰り來り半途を遮り切懸る。城兵已に終日の軍に戦ひ勞つかれて、合戦難儀に見えしかども、隆信の旗本より納富越中守、百武志摩守、安住安藝守以下、鍋島信生と一つになり、敵を高峯江の南方へ追退け、仔細なく城中

隆信の兵大友勢を破りて城中に入る



に入りけり。

北肥戦誌 卷之十八終

北肥戦誌 卷之十九

今山夜軍大友八郎親秀討たる事

斯くて佐嘉の合戦に、大友衆打負くる由、高良山の宗麟の陣へ聞えしかば、さあらば軍兵を差加へよと、舍弟大友八郎親秀を大將にて、玖珠越前守・森藏人大夫・惠良左京允・同兵庫助・同右京大夫・同中務少輔・平井宮内大輔・同隼人介・豊饒彈正少弼・山下右近大夫・小田左馬助・田籠大藏允・森式部大輔・同子息中務大輔・吉弘大藏允を肥前へ差向けらる。此内、豊饒・林・吉弘三人は、兼ねて隆信より豊府への申次なり。此勢、千年川を打渡り肥前國に入りて、三根郡中津隈の干飯原に相集まり、西の河原に手勢を揃へ、夫より田手の東妙寺に入りて勞を休め、横大路を西へ打通り、金立山へ取登りて暫く休息す。爰に於て神代長良よりの案内者、白水讚岐守・篠木薩摩守出合ひて、此等を先立て同八月十六

大友宗麟  
弟親秀を  
して肥前  
に出陣せ  
しむ

今山夜軍大友八郎親秀討たる事



日、都渡岐の渡を打越えて、諸勢大願寺野に陣を取る。同十七日、大將大友八郎は、主従三百餘騎にて、今山の北の嶺に陣を移す。都べて北の手の大友勢三萬餘騎と聞え、春日・河上・真手・今山・大願寺の山野に陣を取り、先手の勢は於保村の黒土原に押出し、其旗旌天を掠めて行粧夥しき事いふ計りなし。城攻は彌、來る廿日に相決しけり。

一、同十七日、下筑後の大友方田尻以下、檢使雄城薩摩守・上野兵部少輔と同じく兵船を以て、又々北端津へ取懸け、太田美濃入道源舜以下と相戦ひ、利を失ひて引退く。此時、筑後衆に討死・手負多し。其名之を略す。

一、同月十九日、納富但馬守信景、家人與力を引率して、於保の黒土原に取懸けて大友衆と相戦ふ。此陣の寄手は、豊後の先勢豊饒彈正少弼・吉弘大藏林式部大輔・城越前守隈部式部大輔にて、但馬守と駈合せ火を散らし防戦す。暫し戦ふと見えたりしが、但馬守打負けて引退く處に、新庄の伊東兵部少輔家秀、納富に代りて相戦ふ。但馬守力を得、備を返して伊東と一つになり、又豊後衆と亂れ合ふ。

大友勢黒土原に敗軍

時に大友勢利を失ひ、討死・手負類を知らず、士卒東西に散亂す。伊東・納富二度目の軍に切勝つて黒土原を引退く。

或はいふ、此時廣橋一祐軒も、納富と相備にて合戦すとも。

又いふ、此合戦は十八日の事なりとも。

一、同十九日の早旦、鍋島左衛門大夫信生、敵陣の體を見るべき爲め、手廻計りを召具して、城北中野村へ乗出し、北山の方を見られしに、先づ東は神崎・茶臼隈・火隈山より、西は川上・真手・小城の今山まで、其行程五六里が間、山野谷嶺森林に至るまで、皆家々の旗見えて敵陣ならずといふ事なし。信生、馬廻の者共へ申されけるは、敵勢日々に増り、さても夥しき大軍かな。當家の浮沈此時なり。然れども又軍の勝負は、必ずしも勢の多少に依らず、時の運と不運との二つにあり。汝等も更に氣を屈する事あるべからずと、又此時信生、心中に思はれるは、明日の廿日、敵諸口より押詰め、城を乗取るべきに已に決定する由風聞す。されば城中愁に戦ひなば、千に一つも利を得まじ。所詮我等が一手を以て、今夜大友八郎が今山

鍋島信生今山の夜す  
鍋島を決意



の陣を夜討にして、死を一擧に定むべし。其上にて自然勝利を得なば、目出度き事なり。又打負けて屍を敵陣に曝しなば、本よりの事なるべしと、心底に早一決あつて、城中へ歸られしが、半途にて屹と思出し、路より使を小城へ差遣し、鴨打・徳島・持永以下の郷士共へ、今夜鍋島左衛門大夫、今山の太友八郎が陣に夜討申すなり。各、今夜彼の表へ出合はされ、加勢あつて給はるべしといひ遣し、扱龍造寺へ歸られけり。斯くて城中には、隆信の前に宿老其外相集まり、様々評定ありけるは、已に四方の敵、明日當城へ取懸け、一同に時を定めて打崩すべき由相聞え、敵は其勢十萬餘騎と風聞す。味方、僅の小勢にて是を防がむ事、九牛が一毛なれば中々叶ふべからず。然れば龍造寺鑑兼は、豊後へ親しき者なる間、彼の一子を質人に出して、先づ一旦降参し、其後、行を廻すべきか。又當城を枕にして、一向討死に極むべきかと、詮議區々なりける處に、鍋島つと來り、隆信に向つて申されるは、某今朝、敵陣の體を見量り候に、北山谷峯に至るまで皆人ならずといふ事なく、計りもなき大軍なり。然るに明日は、四方の寄手一同に當城へ取

懸る由其聞候。城中、此小勢にては千萬に一つも利を得る事、御座あるまじ。あはれ某に御免候へ。今夜今山の太友八郎が陣を夜討にして、十死一生の勝負を決し候べし。其勝劣の變に随つて御合戦あれと、頻りに望み申されけり。されども隆信を初め同意の輩なかりし處に、隆信の母公慶間尼とて、其頃六十に餘られしが、軍評定の席に推参し、牙を噛みて申されるは、唯今左衛門大夫の申す處、圖に丁つて餘儀もなし。我等、扱城中の體を見るに、皆敵の猛勢に氣を呑まれ、猫に遇うたる鼠の如くなり。唯今信生の申すに任せ、今夜有無敵陣へ切懸つて、夜討然るべきにぞ極まりける。鍋島大に悦んで、八月十九日の夜、佐嘉の城を打出づ。俄の事なりしかば、主従十七人には過ぎざりけり。道祖元を打過ぎける時、百武志摩守貞兼十人計りにて追著きぬ。新庄村に到り勝樂寺に入り、暫し味方を待合す。信生、堤治部左衛門に下知をなし、彼の寺の竹を伐らせ新く旗竿を拵へらる。時に當所の伊東兵部少輔家秀、信生の陣へ駄餉を相贈る。鍋



島士卒と共に是を用ひ、既に新庄を打立たれしに、納富越中守信安・成松刑部大輔・信勝・秀島淡路守信純・諸岡尾張守信良・成富甲斐守信種・安住安藝守家能・西村伊豫守家秀・倉町大隅守信吉・同近江守信光・圓城寺美濃守以下、追々馳せ付きて、信生其勢早三百計りになりぬ。扱新庄の西の川を打渡り、今山の方へ向はれし時、後より伊東兵部少輔・前山新左衛門・同名長門守、其外江頭村の者共二百餘人、鐵炮百餘挺にて駆付けたり。時に信生、其勢凡そ七百計りになりて、藤折村に著陣ありし時、西の山に添ひて人數百計り旗一流指させ、曳や聲して押來る者あり。信生是を怪み、永松相五郎とて歳十九になりける若者を差遣し、見られし處に、蘆刈の鳴打陸奥守忠胤なり。忠胤、相五郎に向つて申しけるは、今日鍋島左衛門大夫殿より御役を給はり、今夜今山の太友の陣へ召懸らるゝの間、御加勢申せとの仰せに付いて、無勢なれども先づ駆付け申すと言遣す。信生打領き、扱面を聲なせそ。竊に懸れと下知を加へ、靜に太友八郎が本陣へ取懸けらる。爰に鍋島の近臣に、七島一之允といふ者あり。兼ねて小城郡の案内者にて、先達小城

一揆共に觸廻し、自身は來つて案内す。斯かる處に、牛尾別當琳信、一山の衆徒を引具し來り、鍋島勢に加はる。山伏の出立・甲冑の行粧いかめし。信生大に機を得、權現の方を伏し拜み、自ら眞先に進み槍を杖に突き、今山の半腹に攀ち登らる。士卒ともに皆歩立なり。爰に深谷あり。上下行掛りて如何すべきと、何れも案じて居たるを、信生斯様の時は難所なりとて、遅々せぬものぞと下知を加へ、槍を突立て一番に飛込まれしかば、七八百の軍兵共飛込み、悉く向の高みに駆け上り、已に八郎が本陣へ打臨む。此時、鍋島の馬廻石井又次郎、敵の案内を見るべき爲め、味方に抽んで先に進み、太友衆に行合ひ討死す。扱信生、八郎が陣へ忍寄り、事の體を窺ひ見らるゝに、大將かと覺しくて、歳の程三十計りと打見え、大肥滿の男の色白きが牀机に腰を掛け、敵の寄すべきとはつゆ思寄らず、士卒に酒を勧め、明けなば疾く打立たむ體に見えて、馬物具引側めたり。

或はいふ、此時信生、宵より今山の八郎が陣へ斥候を遣しけるに、走り歸りて告げけるは、豊後衆、明日は城乗とて、大將も士卒も首途の祝、上下酒宴し、夜



討などの事は、努々思寄らす候。彌、御勢を急がるべしと申す。依りて信生彌、力を得られしとなり。

此斥候の士、成松刑部大輔とも、又秀島源兵衛が與力合満某といふ者なりとも。

鍋島、よくく八郎が陣を窺ひ見らるゝに、帷幕の紋茗荷の丸にて、燭の光に輝き其形鮮なり。信生、是を見、後に續きし百武志摩守・諸岡尾張守へ囁かれけるは、各、あの幕の紋を見よ。美はしき紋なり。唯今、此陣を一戦の中に切崩し、是を吉例に用ひて、則ち我が紋にすべきぞ。勇めや方々と関を唾と揚げさせ、中山掃部助を以て、是は神代長良なり。裏切するぞと呼ばはらせ、同じく八郎が本陣へ猪鳴きて切懸けらる。敵陣動搖する事限なし。然れども八郎の馬廻は相騒がず、其兵三百計り一所に圓め、暫し恠へて切合ひたり。大將八郎も、長刀を水車に廻し、自身手を碎き討ち戦ふ。此時、龍造寺の軍士に、犬塚伊豆守・古館掃部允以下討死しけり。斯くて戦半なりし時、鴨打陸奥守續く手の者、追々三百餘騎に

今山夜軍

なりて鯨波を發し、西の山より大友の陣へ切懸る。又相圖の時を待合せて、今市今に知る人なし。深川の北に昔宿あり。に陣して居たりし小城一揆、徳島・粟飯原・空閑・大塚・桃崎・彌頭・司以下凡そ一千餘人、中にも持永治部少輔盛秀が謀に、大勢の體に見すべき爲め、火繩を多く切つて火を付け、竹に挟みて今市の東西に立竝べ、扱今山へ押寄せ、是も関を發し、大友の陣へ打つて懸る。斯かりしかば豊後勢、終に戦負け討たる者數を知らず。大將八郎は主従十人計りにて、良の方へ遁れし處を、龍造寺の家人成松刑部大輔主従七人、早先に廻つてとある境の後の茨の蔭に伏し竄れ、八郎を待懸けて、家人成松大膳・柄長左馬允と二人にて取籠め、互ひに名を稱し渡り合ふ。八郎も長刀を以て大に働きしかども、竟に討たれ首を成松刑部大輔に取られにけり。生年三十三となり。八郎の家人松原兵庫助・速見・西島以下、皆成松が手の者に討取られけり。

或はいふ、成松刑部大輔、今夜龍造寺の城を打出でけるに、此度信勝、大友の大將を討取らば生きて二度歸り候まじと廣言吐き、城門の柱を二刀誓つて出

大友親秀討たる



でけるが、果して大將を討ちけりと。  
或説には、此時小城郡に堤善左衛門といふ者あり。成松が實の弟なり。此者  
最前、今山の八郎が陣所を能く窺ひ見、其案内を成松に告知らせける故、右の  
如しとなり。

己に十九日の夜も、天明と明けけるに、八郎旗本の士卒は、皆散々に成り、大願寺  
野に陣取りたる豊後の諸勢も、八郎殿討たれたりといふ聲に色めき立ちて見え  
ける處に、納富但馬守、宵よより河を越え、鍋島左衛門大夫の相圖の関の聲待受け、  
其勢五百餘騎、於保の黒土原に陣したる大友の先勢に切懸り相戦ふ。最初は納  
富打負けて二度まで追立てられしが三度目に切崩し、逃ぐる敵を追駆けて大願  
寺野へ攻め來る。斯かる處に鍋島も、今山の敵を悉く追散らして凱歌を揚げ、大  
願寺の西の尾崎より競ひ來られ、鴨打陸奥守・徳久治部大輔・持永治部大輔・矢作  
左近將監陣内藏人・大塚左京允以下の小城一揆、山伏には牛尾別當琳信・西持院  
宥秀・圓實坊叡秀を先とし、皆大願寺野へ押來り、諸手一同に関を作つて、爰に陣

大友勢敗  
北

したる豊後勢に瞳と切懸りしかば、何かは怵ふべき。豊後衆足立もなくなりて、  
東西南北に敗走し、田の畔川岸に蹶倒し、はかしく弓をも射ず、太刀をも  
合せず逃迷ふ。斯かる處に、廣橋一祐軒信了・副島式部大輔光家・倉町新太郎信俊・  
堀江新五左衛門信久・鹿江宮内大輔信明・石井和泉守忠清が一族追々來りて、納富  
但馬守と一つになる。其外、牛島下野守・於保賢守・大塚内藏允・秀島主計允・木下  
四郎兵衛・七島一之允以下、我れ先きにと馳せ加はりて、豊後勢の敗走脱するを  
選討に追伏せ切倒して、首を得ること數を知らず。中にも前田伊豫守家定は、  
納富が一行にありけるが、手の者五十人を引分け、逃ぐる敵を追詰め自身の槍下  
に、首五つ取りて但馬守に見する。同じく納富が與力辻左馬允は、豊後の侍田原  
大隅守を討つて首を取る。同國林中務大輔を荒木勘介之を討つ。此荒木は、元  
來備後國の浪人希代の劔術人にて、近年肥前に來り、宗徒の輩を弟子に取りて居  
たりし者なり。又三城尾張守・同源助を、北島河内守討取りたり。同豊後の侍森  
大膳允は、味方の退く中より取つて返し戦ひけるを、副島式部少輔太刀を合せ、



竟に大膳を討ち首を取る。牛津の山伏善戒坊證人なり。鴨打陸奥守・同子息左馬大輔・同右衛門・同太郎九郎は父子四人、手の者數百人にて、逃ぐる敵を慕うて河上へ押詰め、大友宗徒の侍林式部大輔を、鴨打家人菰原大膳組伏せて首を取る。此外豊饒彈正も討たれぬ。吉弘大藏は、最前於保原の軍に齋藤木工左衛門討取りけり。此三人は龍造寺の兼ねて申次なり。肥後國城越前守親冬と隈部式部大輔親永は、兩人一所に切据り、隆信へ懇望を以て降參しけるを、成松が家人成松大膳・柄長左馬允虜にす。又筑後國矢野の住人菅五條鎮定も同じく生捕となる。

此五條は、先祖京極の公家なり。此等は皆大友方にて、一城の主なりしかども、時の運に引かれておめく、或は生捕られ、或は首を取られけることを無念なれ。されば十九日の夜より明くる廿日の早朝まで、今山大願寺野に於て、大友の士卒討死二千餘人なり。其外國侍には、神代長良の家人・軍奉行の古川佐渡入道眞清を初め、執行内藏助・名尾平左衛門・川浪三郎右衛門以下討死す。同家人三瀬内藏助は、一段高き所にありけるを、小城の持永治部允つと駆け寄り、低き所より見上げざま槍を合

大友の士  
卒討死二  
千餘人

せ、終に突伏せ首を取る。同小城鯖岡の犬塚左京允盛家も、大願寺野に於て爽なる母衣掛武者に駆け合せ、二尺七寸の太刀を以て馬上にて切合ひ、敵の太股を切付け、彼の武者切られて馬より落つ。左京續いて飛下り、押へて首を搔落す。其名字を知らざりけり。又神代の家人杠左馬大輔重満は、手の者殘なく討たせ、自身も疵を蒙りて唯、一人馬を早め、川上の奥井手の原まで落ちたりしが、慕ふ敵に返し合せ、其場にて討たれにけり。八戸下野守宗陽も、神代長良といひ合せ、此度大友に一味し、大願寺野に陣を取り、神代衆と同じく戦ひしが、味方早敗軍に及び、みだれあし亂足になりて、軍是までと見えしかば、主従四五人にて山内の方へ引きけるを、川原忠右衛門追駆け、上帶のはうれ迦を切付く。宗陽は無雙の勇將にて、切られながら取つて返し川原と切結ぶ。川原も左の手を切られ、叶はずして引退く。宗陽は痛手を負ひしかども、杠山まで退いて、同月廿四日、其手に痛み竟に死にけり。大供和尚の引導にて、杠の清流寺に葬りぬ。此宗陽、初名は於保宮内大輔と號す。佐嘉郡數百町を領して八戸の城に住し、隆信の妹婿なり。されども人



の下風に立つ事一生嫌ひし男にて、終に龍造寺に従はず、天文の末の頃より山内へ引入り、神代を頼みて居たりし者なり。又此時、上松浦の草野中務大輔鎮永も、大友に加勢として留主何某を差遣し、大願寺にありけるが、諸勢と共に彼の留主も敗軍し、上松浦へ歸りし處を、山内の溺者共あぶれもの、落人あるぞ。物具剣いで所帯にせよと觸廻し、數十人出合せ鷹取越にて討留めけり。小田彈正少弼鎮光は、水上に陣して居たりしが、味方敗軍と聞きしかば、陣所より逐電し、居城多久へも歸入らず、忍びて舊領蓮池へ赴き、船より筑後に落行きけり。斯かりし程に、西の口丹坂へ陣取りたる有馬勢も引退く。

一、今度龍造寺の軍士に、討死鹿江左京亮石井又次郎・納富孫九郎・犬塚伊豆守・古館織部允・牟田兵部左衛門中島三郎四郎。生年十九。

一、鍋島左衛門大夫信生は、今夜一戦の功に、大軍の敵を切崩し、其勢、堂々と勝鬨を二度執行し、討取る處の敵の首を、今山原大願寺野に悉く埋めて、則ち首塚と名づけらる。

一、納富但馬守信景も、同じく戦功を抽んで、是も討取る首を於保原に埋めて首塚と號す。

一、隆信は龍造寺の城中にありて、信生以下の今夜の軍、餘りに心許なしとて、小川武藏守信俊時に未だ大炊助信貫といふを先陣にて、西高木の邊まで馬を出されしかども、早今山の敵陣敗れ、大友八郎も討たれし由、追々相聞えしに依りて、則ち歸城ありけり。

此時、色々興ある事共多しとなり。隆信今夜城を出でられ、愛敬島村の北へ道押ありし時、馬廻の者甲著けるに、此者極めて臆病にやありけむ。大に手振ひ竿に甲の綴あたりて、がた／＼と鳴りしを、隆信、殊の外に訶いかり疎早そまさの奴かな。甲を能く仕れとありしに、此者取敢へず、何とて左様に腹を立たるぞ。今度の軍は決定御利運たるべし。其故は、今度の御甲かつたり／＼と申すと答ふ。隆信一笑あつて、汝は出馬の首途に吉事を申す者なり。軍必ず利運を得ば、此近邊にて知行を取らすべしと約束ありけり。果して合戦勝利ありしかば、



約束の如く愛敬島村の邊にて少地を與へられけり。其田を今にかつたり免といふなり。

此時又、斥候を追々遣されけるに、ある斥候走り來りて大息をつき、さても豊後の者は、皆切志丹と聞えしが、眞言に魔法を遣ふにや。大根に火を付け燈すか。さてく能く煽る物かなと申す。此者、蠟燭を知らざるにや。

### 多久城軍の事

斯くて八月廿日、鍋島信生を初め納富但馬守以下、今度軍功ありし輩、皆纒をゆるりて佐嘉へ歸陣す。寔に由々しくぞ見えたりける。城中の老若男女、數日の間大敵に圍まれ、膽を冷してありしに、偏に信生の武力を以て、先づ北山の大军を追拂ひ、悦ぶ事大方ならず。されども隆信は悦ばれず。其故は今度敵に與せし小田鎮光の妻室は、繼子なれども息女なり。又彼の養子鶴仁王と申すは、隆信實の三男未だ幼稚の兒なり。此人々、鎮光の居城多久にありける間、其存亡の程如何にと、心許な

鍋島納富  
佐嘉に歸陣

鍋島信生  
て多久赴く

く思はれし故なり。然るに信生、早其色を推量あつて、某唯今多久へ馳せ向ひ、彼の兩人を則ち受取り參るべしとて、宵の儘未だ甲冑をも脱がずして、城にて兵糧仕ひ、日既に西の山の端に見えしより佐嘉を打出でらる。是を見て舍弟小川武藏守信貫・龍造寺上總介家晴時に未だ孫九郎信重といふ・鴨打陸奥守胤忠・同嫡子左馬大輔胤泰・牛尾別當琳信以下都合六百餘人、皆宿所へも歸らずして、道々兵糧仕ひ、信生に相續く。中にも琳信、先陣を請ひて眞先にぞ進みける。時に納富但馬守信景は、搦手に廻り南の方横邊田口より押寄す。此手の先陣は佐留志の前田伊豫守家定なり。斯くて信生、先づ別府へ陣を寄せられ、彼所の地侍相浦右衛門允を味方に語らはれけるに、相浦仔細に及ばず、此以前信生の情、今更忘るべきにあらずと、頓て伯父甥物具固め、家人等を催して參陣しけり。信生悦び、則ち是を案内者とし、廿一日の未明多久の城へ取懸けられ、程なく著陣せらる。爰に於て信生、鍋島淡路守に公文相模守を副へて使者とし、城番致したる鎮光の老臣江口右馬助・内田治部少輔が方へ申されけるは、鶴仁王丸母子を受取るべき爲め、唯今鍋島左衛門大夫當城へ罷向うたり。

信生多久  
城を攻む



早速相渡され候へとなり。されども兩人の者承引せず異議を申す。依りて、さらば大城戸を打破つて攻入るべしと下知ありしかば、案内者の相浦右衛門允を初め、同名河内守・同佐渡守・同右近允を先として、龍造寺伊豫守・同上總介・小川武藏守・牛尾別當の同宿共、城戸口へ犇々と付きて打破らむとす。城中には江口・内田を初め、横山・吉島・山田・井手・大隈以下の輩、城門を持つて破られず。中にも江口右馬助は、櫓に登り、寄手を屹と見、相浦右衛門允が真先に進みしを打見て申しけるは、近年當家、此所を領知せしより、彼の相浦が一族共皆祿を食ますといふ事なし。然るに唯今、あの右衛門允、佐嘉勢の案内として、真先に進むこそ面悪けれ。いでく彼等が質人の妻女を城戸口へ引出し、眼前に殺して見すべしと申しけれども、鎮光の妻室あはれみを加へられ、頻に留め申されけり。斯くて城兵共、城戸を破られじと防ぎ戦ふ。時に鍋島信生采配を揚げて下知ありしかば、寄手の士卒悉く城戸口に押詰め相戦ふ。此時佐嘉勢に増田善次郎討死し、松田治郎左衛門深手を負ひて命を落し、副島孫兵衛も矢に中りて死し、七島一之允手柄を現し疵を蒙る。其外瀧造

多  
久  
城  
合  
戦

寺の軍兵込重りて、終に大城戸を打破り、暫時に本城を攻め落さむとす。爰に又鴨打陸奥守は、父子主従五十餘人にて城の後に廻り、龜甲といふ難所より、木の根や葛に取付きて息をもつかず攻め登る。城兵是を上げ立てじと防ぎし程に、嫡子左馬大輔石手を負ひて半死半生なり。されども鴨打、終に此口より攻め入りて、已に本城に入らむとす。斯くて鍋島信生は、水の手の堀口に付いて、一番に城兵を突崩し、城へ追登られけるに、城方より信生の旗を石にて谷へ打落す。於保賢守、是を見て續いて谷へ飛下り、彼の旗を取りて差上げたり。扱信生、七曲の上より三番目に木蔭のありしを楯に取りて、諸勢を下知し居られし處に、城兵多く打つて出で、信生に切懸る。爰に龍造寺和泉守長信の侍に、成富與六左衛門といふ者あり。最前より進み戦ひ、大城戸を打破つて、信生と一所の堀に付いて居たりしが、つと駈け合せ、信生に懸りし敵二人、足下に突いて伏す。信生是を見て、天晴早業かな。汝は何者ぞと尋ね問ふ。彼の者答へて、某は龍造寺長信の家人成富與六左衛門と申す。信生重ねて、軍神の血祭に能く仕りたりと甚賞美ありけり。斯くて與六左衛



門は、猶塀に付き塀越に突合ひしが、城兵より槍を切折られ力及ばず、信生に向つて持合の内を給はれと乞ふ。仍りて鍋島、彼等が働きを感賞あり。則ち手槍を得させけり。成富大に悦んで、脇指を以て塀を破り城中へ乗入る。又倉町大隅守、於保賢守も城中へ乗入る。時に信生、士卒を下知して悉く城に乘入り大に打戦はる。城兵も爰を最期の合戦なりと勵み、討りて防ぎしかども、主の鎮光出陣の跡にて、無下に無勢なりかば、防戦叶ひ難くして、宗と頼みたる内田治部少輔は、木下四郎兵衛昌直に討取られけり。對馬守名字知らすといふ者は、北島河内守に討取られぬ。其外の城兵、或は落失せ或は討死して早殘なくなりけり。斯くて鍋島信生は、鶴仁王丸母子の人を捕るべしと、城中を走り廻りて、死人の中を押分けく尋ねられし處に、傍より江口右馬助ふと斗出でて、信生を只、一太刀にと飛懸る。彼の右馬助は無雙の剛の者、其上不意の事なりしかば危く見えたりしを、辻左馬允、得たりと聲を懸け、右馬助をぞ切伏せける。然る處に、鶴仁王丸を江島左近が女房搔抱き逃行きけるを、鴨打が家人菰原大膳追駈け、彼の女房を一刀に切つて、鶴仁王の血に觸れ

しを捕へたり。此女は水町丹後守が妹、隆信より附屬せられし乳人なり。鶴仁王丸今年八歳とぞ聞えし。扱鎮光の妻室も、恙なくおはせしを、信生是を守り、彼の母子を具して龍造寺へ歸陣ありけり。其時、隆信安堵にて、今度信生の軍功甚だ莫大なりとぞ感せられける。斯くを搦手へ廻りたる納富但馬守も、龍造寺へ歸陣す。此時、但馬守が先鋒前田伊豫守は、先頃己が佐留志の居城を、有馬方より攻め取られしを今度取返しけり。

或はいふ、此時江口右馬助は、成富與六左衛門討捕りしとも、又いふ、右馬助は、最前城戸口にて討死すとも。兩説非なり。

一、今度今山夜軍に、軍功多き中にも、成松刑部大輔信勝は、敵の大將大友八郎親秀を討取るに依りて、隆信、感狀を與へらる。其狀にいはいはく、

去廿日於今山豊州陣切崩砌、抽粉骨入體大友八郎方被討捕之段、高名無比類、付、弓矢靜謐之刻可加扶助候。別而辛勞之趣、向後不可忘却之狀如件。

元龜元年八月廿六日

隆 信判

多久城軍の事

壹

隆信感狀  
を成松に  
與ふ



成松刑部大輔殿

共

一、今度於保原の軍に、齋藤木工左衛門、豊後の吉弘大藏を討取り、其首を縄に包み、則ち大藏が帶したる金の熨斗付の一尺五寸の脇差に副へて、隆信の實檢に入る。其賞として木工左衛門を佐渡守になされ、米田原に於て領知を與へられけり。此外、今度軍功賞多し。説々詳ならざるに依りて之を略す。

一、今度豊後衆、今山敗軍并に大友八郎討死の事を、田尻中務大輔鑑種筑後榎木津の陣所より、同廿二日に高良山の太友宗麟の本陣に注進す。時に宗麟よりの返書にいはく、

小城表立柄示給候被副心候案中候。合戦之慣不珍候條、更不及仰天候。其表無油斷可被申談候條、毛頭無氣遣候。宗麟事も千栗迄急度可差寄之條、必以面可申候。委細尙浦上左京入道可申候。恐々謹言。

八月廿二日

宗麟判

田尻中務大輔殿

右狀の文談に、更に不及仰天と書載之あり。然れども何様仰天しけるにや。宗麟の右筆兩人あり。葛西長門守吉良新五郎といふ。宗麟平生に、此兩筆の外更に他筆を用ひられず。然るに此狀の正書を見るに、兩人が手蹟にあらず。疎筆にして其體早晚に相違す。されば今山の敗軍を聞いて、高良山の本陣も周章けるにや。

高峯口軍の事

去る廿日の未明、大友八郎親秀、今山にて討たれ、其從軍は悉く敗走し、北一方の豊後衆は退きしかども、東の口阿稱境原に陣取りたる豊後の諸勢は、更に退かず。然る處に高峰口へ差寄せたる臼杵式部大輔が一勢、凡そ五千餘騎かと思けるに、次第に減じ二千に足らざる由、城中へ聞えしかば、倡や彼等を打散らすべしと評定あり。八月廿三日、隆信も自身馬を出され、納富但馬守を先手にて、高峰口に於て臼杵と合戦あり。此時龍造寺の軍士三ヶ島又右衛門、西村新左衛門進んで分捕し、三

高峯口合戦

高峯口軍の事

七



ヶ島は脇の下に矢疵を蒙り、池田式部少輔軍功あり。斯くて軍半なりけるに、鍋島信生と龍造寺上總介家晴、牛島より敵の後に廻り、鐵炮を烈しく打掛けしかば、臼杵が軍兵四途路になりて、東の方へ引退き、山邊・高山以下宗徒の者共、數多討死す。龍造寺の侍に、秀島源兵衛は真先に進み、敵三騎切つて落し、其馬に打乗り猶駈け入りて打戦ふ。斯かりし程に、臼杵式部大輔は、一本松の南の方にて、納富が與力辻左馬允に討取られ、其手の殘兵悉く東をさして散亂し、境原の味方と一つになりけり。

大友方  
臼杵式部  
大輔討死

ある記にいふ、臼杵式部大輔、此時自殺すと。非なり。又いふ、今の一本松は、臼杵が舊跡なりと。未だ詳ならず。

一、爰に神埼下郡蒲田の城へ、犬塚彈正少弼鎮家、大友方にて楯籠り、未だ怵へて控へたり。之に依りて今月廿四日、宗麟入道、高良山の陣所より下筑後の輩へ下知ありし狀にいはく、

於其表別而軍忠感悅候。然者蒲田要害無心許存候條、無盡期辛勞雖察存

候、急度以乘船被差籠、彌可被屬馳走事肝要候。如此之砌、口能之儀候而

者不可然候條、輕々與可被遂其節事專一候。委細眞光寺壽元法印可有演

說候。恐々謹言。

八月廿四日

宗麟列

田尻中務大輔殿

巨勢若宮軍の事

既に高峯口の寄手は退散すと雖も、阿稱境原の豊後衆は猶退かず。斯くて九月に入りて城中僉議あり、一軍あるべしと、今度も隆信馬を出され、巨勢若宮へ差寄せたる豊後陣へ取懸る。時に豊後の者共、一支も支へずして、阿稱の味方と一つになる。隆信士卒を下知し、是を追うて敵陣近く押詰め、今日は早日暮れぬ。明朝早旦に取懸るべしと申されしを、倉町大隅守信吉制して申しけるは、御誼にて候へども、阿稱境原に在陣の敵の分限を量り候に、未だ味方には十倍の大勢なり。然るに

巨勢若宮  
合戦

巨勢若宮軍の事

六



卒忽の合戦悪しかるべし。唯、晝の勝利を十分に於て、今夜御歸城候はむか。但し若し敵、是を知りて慕ひ候はゞ大事にて候べし。所詮此方より今夜、関の聲を揚げて引上ぐべし。敵陣、先度の今山夜討に懲り、決定動搖申すべし、然らば其變に應じて、御引取然るべきか。これ軍の一法に候はずやと、申しけるに依りて、隆信も尤もと同意あり。其夜の夜半計りに、先づ鯨波を揚げけり。案の如く敵陣大に騒ぎ、大半崩れ立ちしかば、其騒動の紛に、隆信軍士を引揚げられ、佐嘉へ歸城ありけり。

隆信歸城

### 大友龍造寺和平の事

斯様に寄手、毎度の軍に利を失ひしかども、元より目に餘る大軍なれば、阿稱境原の寄手猶雲霞の如し。斯かる處に、豊後の軍將戸次伯耆守鑑連・白杵越中守鑑速が陣より、筑後の田尻中務大輔鑑種まで色々申す旨ありけり。之に依りて鑑種より佐嘉へ到り、其趣、隆信を初め鍋島信生の方へ申試みける處に、過半請付ありしか

大友龍造  
寺和平

ば、同九月下旬、戸次鑑連・白杵鑑速・吉岡越前入道宗觀、阿禰境原より船にて、田尻が領地下筑後高崎村へ渡海し、則ち鑑種陣所にて毎日談合之ありし上、其使者として、鑑種自身佐嘉へ赴き、右三老の意分こころわけを様々相談しけるに、隆信承引あり。宗麟入道も納得せられ、雙方既に和平一著しけり。斯かりし程に、佐嘉よりは祝儀として岩部相模守平常久を差出され、則ち高崎陣所に到りて、戸次・白杵・吉弘此三老に面謁し、又大友よりは、古庄左京允を龍造寺へ差遣し、互の祝禮ありけり。夫より十月朔日、吉岡入道宗觀は、高良山宗麟の本陣へ赴き、戸次・白杵兩人は、又肥前阿禰の陣所へ打越えけり。時に佐嘉より龍造寺備前守鎮家・小河大炊助信實武藏守のことなり。秀島四郎左衛門家周參陣して、彼の兩將に見參す。斯くて其儘豊後衆、肥前の陣所を立つて、皆々高良山に打集まり、筑後衆も残らず宗麟の本陣へ出仕し、同月三日、宗麟は高良山を打立たれ、府内へ馬を返され、諸勢も皆々歸陣しけり。其中に田尻中務大輔鑑種は、軍忠を抽んで、殊に龍造寺へ大事の使節を勤め、首尾能く調へたりと、宗麟大に其感をなし、鑑種所望に依りて幕の紋を免し、太刀一腰を與へられけり。



り。大友の本紋桐塔、又茗荷の丸なり。右和平調ひ、佐嘉よりの祝儀の使者岩部相模守は、田尻是を引廻す。又大友よりの使者古庄左京允は、成富甲斐守之を取次ぐ。右和平の時、神代長良よりも、家人中島三郎兵衛が召仕の不世といふ遁世者を、高良山と府内へ差遣し、宗麟父子へ和平然るべき由、談合ありしとなり。

ある記にいふ、此時織田信長公、義昭公の命を含み、九州へ上使を下し、大友・龍造寺を和平さすと。非なり。

一、去る八月廿日、今山の軍に龍造寺へ囚へ置きたる三人、肥後の城隈部・筑後の五條の馬鞍等相調へ、懇志を加へて各、本國へ歸さる。

一、今度龍造寺の城中に籠りし輩の老母・妻子・稚子共、過ぎし三月より其縁々に随つて、爰彼所に忍んでありしが、國中平均の由を傳聞き、急ぎ龍造寺へ馳せ集る。その外、老法師農人工商の類まで、所々より來り集まり、妻子一つに寄合ひて悦びたる有様、偏に狙上の魚の江海に歸り、籠中の鳥の林藪に放されし風情なり。扱昨日まで大友一味の輩、今日はいつしか腰をかため、膝を折りて門前に市を

なす。

北肥戦誌 卷之十九 終



# 北肥戰誌 卷之二十

## 龍造寺隆信所々征伐の事

元龜元年十月、大友勢退散の後、龍造寺隆信、此度敵に與せし輩を誅伐すべしと下知せられ、先づ蒲田江の犬塚彈正忠鎮家を攻められけるに、鎮家、城を去つて筑後國へ落ち退きけり。夫より隆信、東高木肥前守胤秀を攻めむとありける處に、早落失せて養父郡に赴き、筑紫越後守鎮恒を憑むに依りて、隆信頓て筑紫へ通られける間、鎮恒則ち高木兄弟を計策りて、朝日山の麓に之を討ち、其死證を佐嘉へ差贈りけり。斯くて隆信、夫より有馬方の者共、杵島郡にありけるを征討すべしと、舍弟龍造寺左馬頭信周を差遣され。先鋒は納富但馬守にて、鴨打・徳島・前田・井元以下、信周に相従ひ小田大町に陣を取る。時に有馬衆、悉く當郡を去り、皆藤津に到つ

隆信所々  
征伐

て、大方は横造の城に取籠りけり。扱隆信、舍弟和泉守長信に、同名石見守家秀・石井大隅守周信兄弟・福地藏人助信盈・南里隼人介・木下刑部允・村山常陸介・蒲原相模守・江副備中守・吉岡玄蕃允、其外侍百廿騎を附けて、小田鎮光の明城多久城に差籠め、西の口松浦後藤を押へられ、同左馬頭信周を杵島郡小田に差置きて、有馬・平井を押へ、又從弟同名上總介家晴を、蓮池の城に移して、東の口筑後の境を守らせらる。

## 小田鎮光切害の事

翌くれば元龜二年辛未、小田彈正少弼鎮光は、去年の軍に大友方となり、水上に陣して居たりしが、八月廿日の敗軍に引かれ、陣所より直に筑後へ落行き由縁を求めて居たり。隆信思はれけるは、彼の鎮光、我等と縁を結び親くなると雖も、元來心解けず。故に去年も翻りて敵に與す。所詮方便寄せて誅伐すべしとぞ思はれける。扱隆信、四月初頃、鎮光の妻室の去秋多久の城より來りて、一所に居られしに、

龍造寺隆信所々征伐の事

小田鎮光切害の事



歎きし顔に申されけるは、扱も御身が夫の鎮光、去年多久を退きし後は爰彼所に浪流し、頃日は筑後の邊にありと聞く。されば鎮光、我等に對し一旦怨を結ぶと雖も、一度塔に取り、親となり子となる上は、そのみは争か凶いかでかるべき。唯今にても鎮光心を翻し、爰に來りて罪を謝しなば、早速本領蓮池を返し與へて、御身と一所に置くべし。是を嬉しく思ひなば、急ぎ鎮光が居所へ文を送りて、其旨をいひ遣すべしとぞ申されける。婦人は父の方便とは夢にも知らず、限なく悦んで、乳母の女房に語られけるは、さても父上の志の嬉しさよ。自らは龍造寺の總領胤榮の一人子にて、今の父上には繼子なり。男に生れなば家を繼ぐべき者なれども、女の身なれば所知の望は更になく、唯、明暮の悔しさは、去年の秋より鎮光の他國に居られし事ぞかし。然るに父上、今には宥免あつて、夫婦一所に置くべしとの仰こそ嬉しけれ。急ぎ文を認め、筑後へ遣すべしとて、委しき事を書き黒め、鎮光へぞ送られける。鎮光披いて見るに、疑もなき妻女の手跡なりしかば、大に悦び舍弟中務大輔朝光并に久池井三郎左衛門・山崎主水允以下主從僅に十二三人、四月九日、筑後の假屋

隆信鎮光  
を殺害せしむ

を出で肥前の佐嘉へぞ赴きける。されば彼の鎮光が命の墓なさは、寔に微水の魚の消行く泡を頼み、屠所の羊の歩ちのみの近づくを慶ぶに異ならず。翌くれば十日、鎮光は先づ納富但馬守が館へ入り、舍弟朝光は鍋島豊前守が宅へぞ入りにける。斯くて隆信是を聞かれ、謀り得たりと悦び、則ち但馬守を招かれ、今夜鎮光を汝が館にて討果すべしと下知せらる。納富領掌申し、急ぎ歸宅して、一族共を閑所に集め談合しけるは、彼の鎮光は尋常の者ならず、坐まがに心得て討洩しては叶ふまじ。詮ずる處、某引組み刺違へて殺すべし。若し仕損じてあるならば、各、心得給へと申す。時に但馬守の伯父石見守信門申しけるは、御邊の申さるゝ處至極なり。さりながら御事は家の總領なり。幸に此信門、御邊年若き故、其後見として爰にあり。我等鎮光と刺違ふべし。敵も流石に歴々なり。家人などの手に懸けては、士の本意にあらずと、但馬守を制して竊に其用意をぞ仕たりける。斯かる處に水田左京允・同彌太右衛門入り來る。是は隆信の命を含み、助太刀の爲なり。斯くて納富石見守、時刻を量りて座敷へ出で、鎮光に暫し會釋して抜きざまに斬りけるを、鎮光得たりと、石



見守を口口す切伏せ、續く者共四人、矢庭に切倒す。後に控へたる水町左京、すは仕損じけると思ひしかば、さしつたりと聲を掛け、槍を以て突懸る。鎮光餘りに勵み、刀を打折りて、後に立てたる長刀押取り渡り合ふ。此鎮光は父政光の師範を受け、劍術の妙を得しかば、さしもの水町既に危く見えける處に、子息彌太右衛門、生年十六歳駈け寄りて、竟に鎮光を切伏せけり。扱鎮光の家人久池井三郎左衛門、山崎主水允以下、座敷に犇々と切籠りしを、久池井は彌太右衛門に討たれ、山崎は彌太右衛門に目を懸け、主の敵遁すまじと切懸り、暫し切合ひて、彌太右衛門に手負はせし處を、左京允駈寄りて山崎をぞ討留めける。斯くて鎮光の弟中務大輔朝光は、鍋島豊前守信房の館へ入り、夜更けて寢所に臥してありけるを、信生、信房兄弟差寄りて、是を切害ありけり。

一、さて鎮光最期の詞に、妻女の事をぞ恨みける。此事妻室傳聞き、胸闕り膽消えて、涙も更に落ちやらず、恨めしの父上や。安々と方便りて自らに文書かせ、夫鎮光を呼寄せて殺させ給ふ事やある。無き人の恨の數、何れの世にかは晴すべ

き。よしやたゞ偽の我が身にあらぬ心底を、死してあの世に語らんと、守刀を抜いて早自害せむとせられし處を、母上を初め女房達、是は如何にと周章て刀にすがり、様々教訓ありしかども、深き歎きに臥し沈み、更に枕も立てられず。斯かりし程に、隆信大に迷惑あり。嫡子政家の其頃は、未だ太郎四郎と申し、を日夜附置かれ、自害などのなき様に能く守らせけり、されば夜の猿は傾く月に叫び、秋の蟲は枯行く野邊を悲むとかや。況はんや偕老同穴の別に於てをや。此姫は故龍造寺豊前守胤榮の一子にて、隆信には繼子なりし故、彌、恨み思はれけり。

### 城原軍隆信江上武種と再び和平の事

神崎の庄城原勢福寺の城主江上左馬大輔武種も、兼ねて龍造寺への約を變じて、今度大友へ與せし故、隆信是を征伐すべしと、鍋島左衛門大夫信生を先鋒として、龍造寺下總守信種同名左衛門大輔家就以下二千餘騎を、城原へ差向けらる。武種、元より思ひ設けし事なれば、長臣執行越前守種兼に下知し、枝吉長門守種次、直塚治部



少輔純英・服部但馬守種家・米倉因幡守種益・石橋治部大輔・光安刑部允・古賀・小柳・島久良木・手塚・西青柳以下究竟の者共を引勝つて、南の大手横大路口の大門を差固む。中にも執行越前守は與力の手者六七百人を引率し、大門より南へ押出し、川土手を蔭に取りて相備へたり。斯くて龍造寺の先鋒鍋島左衛門大夫の一行押寄せ、関の聲を揚げて切懸る。時に執行、采配を揚げて下知をなすに、其手の者、川土手の蔭より瞳と突いて出で佐嘉勢と相戦ふ。少時しばし入り亂れて見えたりしが、寄手一戦に利を失ひ、南の方へ引退く。後陣に控へたる龍造寺右衛門大夫・同名下總守、敗軍の味方を援けて、蛇貫土井相支へ散々に打戦ふ。されども城原の軍兵、江上速種を先とし、追々來つて執行が士卒と一つになり、火を出し戦ひしかば、寄手終に打負けて龍造寺へ引退く。城原勢、勝に乗り阿禰村まで追懸け、矢を少々射懸けて勝関を揚げ、城原へ歸陣しけり。

佐嘉勢敗軍

一、隆信は、此度城原の軍に鍋島以下の者共、打負けしに依つて、大に腹を立てられ、甚儀ならば自身向つて討ち崩すべしと、大勢を率して城原へ取懸けらる。先

隆信城原に出陣

手は今度も信生なり。斯くて江上が城中には皆集まりて評定す。其中に枝吉いひけるは、先度の合戦に鍋島打負けて、今度は負腹まけばらをかき、隆信自身向ふ由頗る大事の軍なるべしと申す。又執行がいひけるは、いやとよ。さにあらず。先度の軍に佐嘉衆、城原武者の手並は能く見つらむものを、今度の先手も定めて鍋島なるべし。一戦の中に切り崩して、隆信の旗本に討つて懸り、十死一生の軍を勵むべし。勇めや方々と、當然に味方の機を進めて、士卒二千餘人を引率し、今度も越前守、城より南の横大路へ押出し、佐嘉勢の近づくを待懸けたり。斯くて龍造寺の先鋒鍋島信生、城原の大手南の口へ押寄せ、弓鐵炮を射懸け、越前守と相戦ふ。勝負未だ見えざりしに、信生兼ねてや計りけむ、軍兵を引分け西の方へ差廻し、藪蔭より執行が陣へ、横合に鐵炮數十挺稠つしく累つべ懸る。時に越前守が軍兵共、大に動搖し合戦叶ひ難かりしかば、悉く敗走して城中へぞ引入りける。信生、勝に乗り籠を叩いて追駈け、町小路に火を懸く。此時佐嘉勢に、齋藤佐渡守、敵の首二つ取る。斯くて越前守、城中に入りて主の武種を諫めて申しけるは、先

城原勢敗軍

城原軍隆信江上武種と再び和平の事



度の合戦に佐嘉勢を追崩し、早心底は晴れて候間、今度は龍造寺と和議を求め然るべく候はむや。其儀ならば、某唯今、鍋島の陣所へ参りて談合申すべきにて候と、様々に諫めしかば、武種も同意あり、兎も角もと申されけり。然る間、越前守急ぎ信生の陣所へ赴き、和平ありたき由談合しければ、信生、穩便を以て隆信へ調達し、仔細に及ばず和興に決定あつて、合戦を止められけり。扱先年の約束違變すべきにあらずと、隆信の二男を武種の養子とし、江上又四郎家種と改め、城原勢福寺の城へぞ送られける。時に佐嘉よりのめのと諸岡安藝守并に高木伯耆守家康、鍋島丹波守種房以下を相附けらる。斯くて又四郎家種、中頃左馬頭と號し、其後權兵衛と改め、江上家の所領二千五百町に、重代の名劔小胸切を讓受け、勢福寺の城に居住ありけり。扱養父武種は、田手の日吉城へ隠居しけり。彼の家臣の内執行越前守・枝吉長門守・服部伊賀守は、後に龍造寺より食祿を受けて、彌家種にぞ仕へける。

龍造寺江  
上和平

光安刑部允化異に遇ふ事

其頃江上の家人に、光安刑部允といふ者、城原に居住しけり。天性不敵の剛の者にて、未だ忠三郎とて年若くありし時、勢福寺の城番しけるに、ある夜、敵三百計りの人數にて不意に攻め入らむとす。時に忠三郎、僅十人計りを以て是を防ぎ、難なく追拂ひ、比類なき高名したる者なり。然るに此刑部、平生に山狩を好み、猪猿の類を捕る事得方なり。ある時、月冷に風清げなる夜、逸物の犬を連れて、勢福寺大明神の上、菩提寺山の頂土器割かはらけりといふ高山に、猪を捕りに登りけり。抑、此山と申すは、九州に取りて豊前には彦岳、豊後には右田岳、日向には法華岳、肥後には阿蘇岳、肥前には此土器割とて、隠なき天狗の住所なり。然るに伴の犬、事々しく吠え騒ぐ。刑部見て、不思議や何ならむと窺ひ寄りて見けるに、鹿猪の類にあらず、月の光に能く見ければ、黒めなる石の柑子を割りたる程に、路脇にぞありける。刑部允、不思議やな。如何なる石ならむ。今宵は仕合もなし。是を取りて歸り、明

光安刑部  
允化異に  
遇ふ



けなば、能く見るべしと思ひ、やをらよとら懐に入れて、峯筋の細道を下りし程に、半腹にて懐少し大になりて重く覺ゆ。探りて見るに、件の石、天目程てんもくに太りて重くなりぬ。刑部怪み思ひながら、猶坂中を下りしに、四五町過ぎて、此石、早鞠程になりて、重きこと限なし。されども刑部、少しも騒がず、己れ知者しものかな。よし何にてもあれ。争か汝に負けぬぞと、猶怖へて下りし程に、大磐石の如くになりて動き得ず。光安も今はすべき様なく、脇なる谷へ抛落しければ、其音雷の如く鳴響きて、夥しきともいふ計りなし。暫くありて、向の尾崎に人ならば、數千人の聲にて、山も崩れよとぞ笑ひける。刑部は刀の柄を碎くる計りに握りて、四方を白眼びらみ居たりしも、眼に遮るものなし。刑部允、力及ばず我が家に歸りて、此事、主の武種に語りしかば、武種聞きて、夫を怖へて持歸り、家土産いへつとにせば、唯、太りて希代の珍物なるべきに、あたら魔なりとぞ笑はれける。

### 隆信神代長良と重ねて和平の事

同元龜二年の夏、隆信、江上を従へられし後、少貳大友の餘類を退治あるべしと、東肥前へ打出でられし時、執行越前守種兼、江上勢を引具し、城原より出でて先陣す。此時三根郡の輩、土肥出雲守家實、坊所尾張守以下、荒々あらく出向ひて龍造寺に屬從す。斯かる處に、神代長良、山内より上佐嘉千布へ出張して、隆信の留守を計るの由、佐嘉より注進ありし間、隆信先づ歸城せられけり。然るに其頃納富但馬守信景は、有馬平井を押へて杵島郡に居たりしが、神代出張の由を聞き、杵島口をば龍造寺左馬頭へ打渡し、佐嘉へ歸り先陣を乞うて、上佐嘉に發向し、千布に於て神代と相戦ふ。然る處に、雙方和議の談合あり。今年終に隆信と長良と和平ありけり。是より佐嘉と山内、通用心安くなりて上下往來す。

### 隆信東肥前へ出馬兩筑紫降參の事

元龜三年壬申三月下旬、隆信重ねて、東肥前の與黨等退治として、嫡子民部大輔鎮賢と同じく先づ神崎まで出張あり。此時馳せ集まる輩には、神代長良の陣代同名

隆信神代  
と重ねて  
和平



隆信東肥  
前に出陣

彈正忠江上武種の陣代執行越前守、其外本告左馬允頼景・藤崎筑前守盛義・姉川中務大輔信安・犬塚三郎右衛門家廣・重松中務大輔頼幸・綾部備前守鎮幸等、是れ皆新參の餘客なり。此外なま氾々は數知らず。されば隆信の武威漸く輝きて、其勢雲霞の如くにて、神崎を打通り養父郡に著陣あり。爰に於て隆信、先づ筑紫越後守貞治が朝日山の城を攻むべしと評定せられ、所の案内者たるに依りて、執行越前守を大將にて朝日山へ取懸けらる。城中の士卒、持口を差固め大に防ぎ戦ふ。時に越前守、一手の者に囁きけるは、各、能く聞くべし。去年我等が城原の城を、鍋島信成の武力に碎かれ、既に攻干して龍造寺に和を乞ひ、唯今彼の從軍にあつて、其下知を受くる事口惜しき次第なり。然ればせめて此朝日山の城を城原一手にて攻め落し、去年の恥辱を雪がむと思ふぞや。此事構へて佐嘉勢に知らするなど、先づ續松を數百用意しけり。然るに越前守、兼ねて此邊の案内を能く知りしかば、四月朔日の夜、彼の續松を人足數百人に燃させ、朝日山の麓三方へ分け遣し、平生に獵師・樵夫の行き通ふ細道より登らせけり。斯かる程に、城より是を見下し、さては寄手夜討

執行越前  
守城原一  
手を以て  
朝日城を  
陥る

にして三方より攻登るぞ。急ぎ口々に人數を配りて差固めよと、城兵悉く三方へぞ分れける。斯くて越前守、城中の體を推量し、時分を能く量りて、城原勢三百餘騎、一方の攻口より取懸けたり。計略の如く此構は、中々無勢なりしかば、越前守仕澄したりと悦び、大音聲を揚げて、倡や方々、此城戸打破れ。彼の堀引破つて城中に攻め入ると、頻に下知を加ふ。時に城原衆江上左近允・枝吉周防守・生野佐渡入道執行四郎兵衛・同名式部大輔・直塚左馬允・光安刑部允・同彦四郎・島治部大輔・手塚主計允・西刑部允・青柳九郎左衛門・小柳清右衛門・古賀右衛門允以下、轟々と打寄せ堀を悉く打破り、我れ先にと入込み、爰彼所に火を懸け、関の聲を揚げたりしかば、三方へ分れし城兵共、こは如何に忻たはらかなるはと動轉し、城へ入りて戦ふ者一人もなく、皆落去つて勝尾へぞ逃げ籠りける。斯かりし程に、僅に残る城中の輩、煙に咽びて防ぎ得ず、或は切殺され或は落失せて、城は則ち落去せり。斯くて執行越前守は、一時の謀に、城原一手を以て輒く當城を攻め落し、一片の煙と焼立て凱歌を揚ぐる事、四月二日の辰の上刻なり。隆信、本陣より遙に其行粧を遠見あり、鍋

隆信東肥前へ出馬兩筑紫降参の事



島飛驒守初右衛門大夫を招かれ、あれ見られよ飛驒守。城原の執行が他勢を交へずして、當城を攻干し勇む風情の面白さよ。されば世にいふ如く、敵に強き者は味方にも強しとは、此者の事なるべしと、大に賞美ありけり。斯くて隆信、筑紫廣門が勝尾城を攻めむと議せらる。

此時、朝日山の城に、城主貞治は居ざると見ゆ。子息榮門と一所に綾部の本城にありけるか。貞治或は鎮恒とも。

### 神崎櫛田宮の由來附執行本告の事

神崎櫛田宮の由來

彼の執行越前守伴朝臣種兼が先祖は、元來下口〔本關ク〕にて神崎櫛田宮の執行職なり。抑、櫛田と申すは、忝くも聖主の勅願に、異國の賊船退散の爲め、往古より三社の大明神を、肥前國神崎郡に崇め奉らせらる。所謂櫛田・白角折・高志社、是れ則ち稻田姫を祭る處、最も九州の大社なり。其神領、北は山内・藤原を限り、南は海際うみさへ崎村まで、東は米田原、西は尾崎村まで分量數千町、是を名づけて神崎の御庄といふ。然るに年中

執行本告  
兩家の由來

の神事、古は十二度なりしを、中頃鎮西大に亂れ、山城・海賊充ちくして、祭禮の勅使下向せらるゝ事叶ひ難し。是に依りて之を略せられ、年中三ヶ度になす。されば今の執行越前守が先祖は、天忍日命の苗裔伴國道十二世の孫伴兼資と號し、人皇八十四代順德院の御治世、建曆年中當社の執行別當職に補せられ、始めて下向し、同建曆三癸酉年十二月十九日乙卯の日午の刻、修造上棟の時、則ち彼の職を勤む。其子息伴太郎兼篤朝臣、かはらず父の職を受けて、肥前に在國し彌、當社の司職たり。然るに人皇九十代後宇多院の御宇、弘安の頃、蒙古の數千艘筑前國博多へ襲來し、天下の騒なりしより、公家・武家の御執成にて、櫛田より東田手村に、蒙古御祈禱所として、七堂伽藍を御建立あり。彼號東妙寺南西大寺唯圓上人俗姓佐々木氏なりを以て、彼の寺に居住せられしより、東妙寺を又櫛田宮の修理別當と定めらる。又其後、東山殿義政將軍の御時、康正三丁丑年七月廿九日、修造上棟の時、本告彈正忠資景を以て宮柱とせらる。然るに彼の御社、其後は公家・武家の御崇敬も白地になりて、神領も減少し、三度の神事すら、絶えけるこそうたてけれ。斯くて近代執行は江上に招



かれ、竹原に在城し、本告は牟田に居城を取構へたり。されば今の越前守が祖父伴治部大輔兼貞が時、始めて名字を稱し、則ち執行と號す。其子執行攝津守直明、其子越前守にてぞありける。

一、斯くて龍造寺隆信、四月二日、朝日山の城を攻め落し、勝尾の城下へ陣を進めて、當城主筑紫進士兵衛廣門の許へ、使者を立て申送られけるは、隆信此度、三根養父の輩退治の爲め發向し、早朝日山の城は攻め落しつ。扱唯今、其許へ取懸けむとす。然れども御邊、無事を思ひて和を乞ひ給はば、軍を止め申すべしといひ送らる。時に廣門、親類家人を集め談合の上、和平然るべきに一決して、其印しるしに同名兵部少輔榮門がありける綾部城を初め、其左右の持分三ヶ城を明けて、龍造寺にぞ渡しける。斯かりし程に、隆信、廣門と軍に及ばず、養父の陣を拂つて三根郡に打入られ、横岳中務大輔鎮貞が西島の城を攻められしかども、利あらずして先手の龍造寺上總介家晴、同名越前守家就初右衛門大夫、同名伊賀守以下引退く。仍りて隆信、先づ當城をさしお閣きて歸陣あるべしと、犬塚三郎右衛門家廣を、崎村より中津隈

筑紫廣門  
隆信に降  
參

に移し、姉川中務大輔信安を、姉川より米田に移し、横岳が知行の内を米田村にて百町押取り、信安に給はり、土肥出雲守家實を加へ、右三人を以て、三根、養父兩郡を守らせらる。執行越前守が今度の軍功を感賞あつて、二百町を加恩せられ。隆信は則ち佐嘉へ歸城ありけり。此時筑後國貝津城主安武山城守鎮數も、坊所尾張守が申す旨に任せて、隆信へ和を乞ひ、神文をこそ送りけれ。後に此安武、改名して式部大輔家教と號す。山城守は隆信同名を辭しける。

### 隆信上松浦へ出馬草野落城の事

元龜四年癸酉、天正と改元す。當今は人皇百七代正親町院方仁。武將は足利十六世權大納言源義昭將軍なり。されば當時に當りて、五畿七道悉く亂れ、公家には朝權廢れて其政を爲さず。武家には大樹の威軽くして其令を用ひず、諸國の大名、皆己れわだかまが分國に蟠り、朝には領知を論じ、一夕には境を諍ふ事、偏に犬獸かまびすの喧しくするに異ならず。然るに今年の冬、上松浦草野の鏡の城主草野中務大輔鎮永、手の

隆信上松浦へ出馬草野落城の事



者を小城へ差越して、千葉介胤誠が舊臣共を相語らひ、龍造寺に對し一揆を企てけり。此事、持永治部丞・陣内藏人并に佐嘉より兼ねて小城へ附置かれたる宮崎伊豫守が方より、早速龍造寺へ注進す。之に依りて隆信、則ち小城へ出馬あり。彼の一揆を追拂はれ、猶其警衛の爲め、松尾山に陣營を構へられけり。斯くて隆信、彼の草野を其儘差置きては叶ふべからず。急ぎ征伐を加ふべし。神代は其手寄たよなれば、是を語らひて加勢を乞ふべしと評定せらる。同十二月下旬、山内に於て神代長良の方へ、秀島四郎左衛門家周時に九郎右衛門と號すを使者として、隆信追付、草野退治として上松浦へ來陣申すなり。御邊も出馬せられ、加勢あつて給はるべしといひ遣されけり。折節、大雪降り溪嶺一般に積もりて、秀島、山路の旅行自由ならず、杠の清流寺に宿を借り、漸く明るる正月元日、三瀬の城に著き長良に對面して、右の趣を申達す。長良異議に及ばず、さらば先づ軍兵を差出し、自身は後より打立つべしと、則ち同名對馬守周利・三瀬大藏・畑瀬右馬助・合瀬掃部助・杠右衛門大夫・栗並治部大輔・篠木右衛門佐等に人數を副へて差遣す。隆信又此時、上松浦鬼子嶽の城主波多三

隆信上松浦に出陣

河守鎮へも、先達田原一運を使にて、頼み思ふの由申遣されしに、鎮も仔細に及ばず、長臣八並武藏守を草野の案内者とし、半途へ差出し置きけり。斯くて草野は、波多が龍造寺の導すと聞いて、さらば鎮を攻めよとて、鬼子嶽へ取懸り相戦ふ。頃は十二月下旬なりしに、鎮、早速佐嘉へ急使を馳せて援兵をぞ乞ひける。斯くて隆信、鎮が使に彌、參陣を急がれ、明くれば天正二年壬戌正月二日、未だ鷄鳴ならざるに佐嘉を出馬あり。小城岩藏より石臺越に掛り、市の川を過ぎて上松浦の内池原へ出で瀧川に著陣せらる。爰に於て八並武藏守出向うて案内す。扱隆信、草野の五段田に著かれし時、神代長良も摩耶子より瀧川を歴て、同じく五段田に著陣あり。隆信大悅せられ、則ち其日平原まで押詰めらる。先陣は鍋島信生、二陣は小川武藏守信貫、内田紀伊守信堅、三陣は神代の山内勢、江上の城原勢なり。旗本には納富能登守家理時に未だ七郎兵衛信理と。副島長門守家光・百武志摩守守賢・成松遠江守信勝、其外安住・石井・圓城寺以下、都合一萬餘人なり。斯くて城中より草野が家人草野元幸・青木良珍・吉井右近允を初め究竟の者共、平井峠へ討つて出で、龍造寺の先陣鍋島信生



隆信の陣早野と戦つて敗る

の陣へ突いて懸る。時に鍋島勢の中より江副兵部左衛門、一番に槍を合せ敵味方入り亂れて大に打戦ふ。少時しばしありて、鍋島終に利を失ひ、久納平兵衛副島内記允以下廿餘人討死して悉く敗走し、味方の二陣に崩れ掛る。二陣に續きたる内田紀伊守、是を見て與力の副島式部に向つて申しけるは、既に先陣敗れたり。大將の御陣むげに近し。斯くては悪かりなむ。倡や一槍して敵を追返さむと、一度に噓と斬懸り競ひ來り敵を突崩す。中にも副島式部大輔真先に進み、岡口が持ちたる構に押詰め、防ぐ者を突退け、構を取つて暫し息をつき居たるに、原口平次兵衛憲秀續いて構を刎越え、城戸を開くに、副島式部成松内藏允則ち攻め入りて相戦ふ。此時式部は、日の中二三度の槍合に、三度ながら分捕しけり。斯くて日も暮れしかば敵も引入り、雙軍を止めて居たり。時に隆信、一首の狂歌を詠まれたり。

正月の一日二日の事なれば草野を燒きて鏡餅かな

明くれば正月三日、鍋島信生、彌、先陣に進まれ、先手千葉家より來る輩、仁戸田、鎗尼野邊田、金原、小出、巨勢、堀江、平田、田中、陣内、井手、濱野此十二人、鍋島の家人に相

草野鎮永遂に敗走

隆信長良に對面す

加はり、城戸口へ押詰め、即時に打破らむと相戦ふ。是を見て龍造寺和泉守、舍弟左馬頭、勝屋勝一、軒田代因幡守以下、鍋島に續いて押詰めたり。時に城中より矢石を飛ばせ、鐵炮を放し懸くること雨の如くなり。然れども寄手大に勵み戦ひ、城戸を打破つて早二の丸へ火を懸く。此時草野が家人進藤將監を、西の大手にて佐嘉勢の中より北島河内守討取りたり。其外秀島主計、高岸主水、木下四郎兵衛、相浦河内守進みて相戦ひ、秀島圖書助分捕す。斯くて城主草野中務大輔鎮永、防ぐに力盡きしかば、竟に城を去つて二重嶽へ落行き、夫より筑前怡土郡へ原田入道了榮の居城高祖にぞ入りにける。此鎮永、實は了榮の三男にて、草野永久の養子なり。扱隆信は草野を追落し、則ち陣中にて神代長良に對面あり。參會は是が初なり。雙刀牀机に掛り一禮あり。用心と見えて長良は、山伏阿含坊と杠太郎右衛門といふ大刀の剛の者に大長刀を持たせ、左右に召遣く。又隆信の身邊にも、百武志摩守、成松遠江守を初め、究竟の輩を二行に置かれたり。時に長良申されけるは、先達御約束に候條、鎮永領の内草野七山馬の丹生川、梨尾、荒川、藤川、變木川の儀は、便たよりに候條我等知行申すべし

隆信上松浦へ出馬草野落城の事



となり。隆信返答には、仰の通り仔細に及ばず候。但し其内、丹生川の儀はさる仔細あつて、鴨打陸奥守へ約束申し、間、其代地は何様佐嘉郡にて進すべしと會釋ありけり。斯くて長良は三瀬に歸城し、隆信は夫より筑前の内へ打入られ、怡土郡に到りて高祖の大島井まで放火せらる。此所は草野が實父原田了榮入道が領知に依つてなり。時に佐嘉勢の内、鍋島信生の手の者に、小城の櫻木三郎左衛門相働く。爰に於て原田入道、孫子の冠者を召連れ隆信の陣へ來り、則ち和を乞ひて對面す。隆信大悅あり。彼の冠者に加冠せられ、原田三郎信種と號せられけり。此冠者實は草野鎮永の子にて、了榮には孫子なりしを、了榮の家督五郎右衛門親種、先年死去に付いて其家を繼がせむとぞ聞えし。此後彼の信種、佐嘉より鴨打左馬太夫の女を、隆信養子にして婿に取られけり。又了榮、草野鎮永が事をも様々歎き申すに依りて、隆信和平せられ、鎮永本領に歸入り、後には佐嘉の倉町左衛門大夫信俊が二男太郎三郎を養子しけり。此松浦の草野といふも、元は筑後の草野なり。扱隆信、原田と和順ありしかば、飯場の曲淵河内守も降參し、小田部入道も音通す。隆

原田了榮  
隆信に降參

信、夫より又上松浦へ馬を向けられしに、波多三河守親初の名下野守鎮早速長臣八竝武藏守・福井山城守を差出し、龍造寺の先鋒鍋島信生を天河に迎へ、自身も案内の爲め打出でて私領法師良に陣を取る。斯くて隆信、鳥巢に著陣ありけるに、大河野の鶴田因幡守勝・嚴木の同名越前守進・河原豊前守以下松浦の輩の者共、已に旗頭の波多三河守和を乞ふ上はと、皆龍造寺へ降參しけり。然るに隆信、松浦草野を一圓に従へられ、さらば先づ歸陣すべしとて、從軍の内より龍造寺石見守家秀・高木兵部少輔・胤清・石井長門守忠家・神代彈正忠・武藤左近將監等を、鏡・天河・大河野の城々に殘し置き、其身は先づ多久の城まで馬を入れられけり。

北肥戦誌 卷之二十 終



# 北肥戰誌 卷之廿一

## 隆信西肥前出馬の事

龍造寺隆信、天正二年正月、上松浦を征し、同二月、多久の城に入りて少時逗留あり。女山一揆の棟梁鶴崎源太左衛門が殘黨殘らず退治せられ、同夏の頃、杵島郡へ出張して、塚崎の後藤と須古の平井が先年和平すと雖も、猶異心あるに依りて、是を征伐すべしと、既に天正二年七月廿七日、佐嘉・小城の士卒大勢を以て白仁田山に陣を居ゑられけり。平井經治是を聞いて、さらば不意を撃つて、隆信の陣を打崩すべしと、八月二日、弟左近大夫直秀・河津左馬助經忠以下多勢を引牽し、隆信の陣近く取懸けたり。然るに龍造寺の陣場は、岩石高く峙ち急に下る事叶はずして、其働自由ならざる所なり。平井兄弟是を見量り、軍は案の中ぞ。佐嘉勢一人も洩さず

隆信西肥前に出陣

隆信の軍と平井經治と合戦

平井勢敗北

討取るべしと勇み悦んで、所々に備を設け、既に其體切懸らむと見えしかども、日夕陽に傾く故、軍を進めず暫し見繕ひて控へたり。時に龍造寺の先勢鍋島飛騨守信生、敵の機を察し、軍使を旗本に遣して隆信へ申されけるは、敵間近く押寄せ申すと雖も、日暮に及ぶ故、明日の軍を待つと見えて候。所詮此方より早速軍兵を進めて、一戦を始め申すべし。此儀御同意に候はゞ、急ぎ御用意あつて、相圖の貝を立てらるべしといひ送られしに、軍使未だ歸らざるに、貝の音聞えしかば、信生則ち采配を揚げて士卒を下知し、十丈計りの岩石を一同に颯と押下し、平井が陣へ切懸からる。時に平井も軍兵を勵し、火を出して戦ひしかども、後陣の佐嘉勢相續き、北島河内守・高岸主水・副島式部以下大に打戦ひ、平井忽ち打負けて、河津左馬助討死し、總勢悉く須古をさして引退く。されども茲に其殘兵一列、久津句の山上にありて退かず。鍋島信生其體を見て、此敵を拂はざれば始終の勝利あるべからずと、同月八日久津句島へ押寄せ、関の聲を揚げて切懸けられしに、平井勢又打負けて立つ足もなく敗走しけり。斯くて龍造寺の軍士、敵の北ぐるを慕うて小塚口まで追

隆信西肥前出馬の事



詰む。爰にて平井勢取つて返し、烈しく相戦ふ。時に龍造寺上總介進みて敵に懸り、其中より副島式部・成富左近軍功を顯し、高木主水・成富甲斐守・木下四郎兵衛・北島河内守等挑み戦つて分捕す。爰に於て平井が兵、竟に又打負けて皆城中へ引籠りけり。斯くて隆信は、軍勝利を得られ、少時陣を甘げ久津句に到りて屯せらる。此時馳せ集る輩數を知らず、兵氣天を掠めたり。其勢に恐れ猪熊にありける後藤方の者共、皆塚崎へ引入りぬ。斯かりし間、隆信其翌日、陣を小通に移し、須古の平井が居城高岳を攻めんと評定あり。

### 平井直秀兄に背く事

斯くて隆信、彌、平井を攻むべしと申されけるを、宿老中諫めて申しけるは、永々の御陣に付いて士卒皆疲れ、土民悉く勞して候間、先づ御馬を龍造寺へ返され候へかし。平井御征伐の儀は、頗る今度に限り申すまじとありける處に、鍋島信生進みて申されけるは、いや〜此弊に乗じて西一通の敵を悉く退治せらるべし。國家靜

平井直秀  
兄經治に  
背く

謚の爲なれば、豈士卒の疲れ農人の妨を厭はれ口と申されしかば、隆信、鍋島が申す處圖に當れりと大に悦ばれ、彌、横邊田に陣を居ゑられけり。斯くて平井を攻むべき由にて、色々評議ありしかども、彼の居城高岳といふは、分内狭しと雖も無雙の要害にて、其上城主經治、聞ゆる勇將なりしかば、容易くは叶ひ難かるべし。然るに鍋島信生、様々工夫を廻し、經治の弟左近大夫直秀を、竊に陣所へ招き囁き申されけるは、御邊は眼前經治の兄弟なりしかども、先年一度和平の砌、龍造寺の塔となられ、既に一子出生ある上は、正しき龍造寺の親屬なり。所詮兄經治を殺されよ。然るに於ては須古領残らず進せて、高岳に安堵させ申すべし。唯今の如く隆信を背かれ、弓箭を執給ひなば、御邊が命を亡し家をも滅し給ふべし。穴賢。此飛驒守が申すに隨ひ給へとぞ賺されける。直秀、鍋島に方便かれ一議にも及ばず承引して、急ぎ己が居館男島高岳の向に歸り、忍び〜に平井の家人を招き、件の隱謀をいひ聞かせ、皆々加恩すべき由の判形を與へしかば、大半直秀に同意しけり。斯くて直秀、神文を信生へ送り、彌、別心あらざる旨、龍造寺へ通じ、扱一味の者を催して、

平井直秀兄に背く事



兄經治を討たむとす。斯かりし間、經治無念に思ひしかども力及ばず、河津近江守・新宗吟入道以下男女百八十餘人を具し、居城高岳を去つて藤津の吉田へ退きけり。然るに隆信は信生の計略に依りて、一戦にも及ばず經治を退け、大悦ありて則ち須古・高岳の城を直秀に與へられ、納富但馬守を横邊田へ殘し置き、其身は頓て龍造寺へ歸陣ありけり。

### 直秀經治の爲に討たる井須古落城の事

平井武藏守經治は、弟直秀が逆意に依りて須古の城を退き、頃日は吉田にありけるが、如何にもして舊地に歸入るべしと時分を見量り、伯父新刑部入道宗吟と談合し、同年十月、須古・白石の地下人共を相催し、其勢數百人にて吉田を打立ち鹽田越に掛り須古へ出で、直秀がありし高岳の城を取圍む。直秀天の理に背きし故にや。防戦するに利あらず、打敗れて横邊田の方へ退かむとしけるに、經治是を察し、小通の橋を焼きしかば、直秀其煙を見、經治、佐嘉と引合せ我を討たむと相圖の火を

平井直秀  
兄經治の  
爲に討た  
る

隆信須古  
城を攻む

立つるよと大に懼れ、寶藏寺に入りて楯籠る。經治が軍兵、是を圍みて相戦ふに、直秀叶ひ難く竟に自害して失せにけり。斯かりしかば、聽て本城高岳に入替る。扱此事、白石の上野讚岐守此時福富が方より、早速佐嘉へ注進しければ、隆信、さらば經治を退治あるべしと、十一月廿日過に、其勢一萬餘騎を以て、佐嘉の城を打立たれ、横邊田に著陣あり、福母山に本陣を居ゑらる。爰に隆信の舍弟左馬頭信周は、其頃下松浦征伐の爲め、西肥前に在陣しけるが、隆信、此度須古を攻らるゝの由聞えしに依りて、早速松浦勢を差語らひ、横邊田へ馳せ來りて佐嘉勢に相加はる。斯くて龍造寺の總勢、一同に横邊田の陣を打立つて須古に押寄す。此時、福母大町は、龍造寺上總介家晴の領知に依りて、其手寄たよたるの由にて、家晴先手を蒙り、小通より發して相進む。其餘旗本以下は、皆大渡わたを越しけり。時に白石の郷士上野讚岐守一族四十七人、大串十兵衛等、馬田・神野江に出向ひ、案内して先手に加はる。さて諸口の手分を定めて、先づ鍋島飛驒守信生并に廣橋一祐軒信等、小川武藏守信貫合せて二千三百餘騎に、旗本より成松遠江守・百武志摩守・下村生運・横尾内藏允・田中源



右衛門加はりて、城の北一間堀口へ向ふ。此一勢の先手は一祐軒なり。又龍造寺左馬頭信周に、下松浦の軍士加はりて二千餘騎、前田伊豫守家定・井元上野介を案内者とし、城の東白河口より男島の方へ押寄す。其次に納富但馬守信景に、田代因幡守・同子息治部少輔・同左馬助以下相加はり一千八百餘騎、城の南へ押廻し、湯崎・川津口に向ふ。其外納富能登守信理に、副島式部少輔・木下四郎兵衛・杉町藤右衛門・木下左近允・石井大隅守以下加はりて小塚口へ差寄り、龍造寺和泉守長信は搦手の方へ向はれけり。然るに彼の平井が居城高岳と申すは、僅の小城と雖も、北の大手は岩石峨々と峙ち、一騎打の細道なり。西は百町牟田とて、深泥隈を知らず、東は男島に稠しく砦を構へたり。南は堀を二重に深くほり、塀を高く塗りて、所々に櫓を搔並べ、其構へ事々し。斯くて城中には、佐嘉勢の大軍にて寄すると聞いて、先づ北の一間堀口には、川津近江守を頭人にて、湯川・長池以下の者共を差出し、多勢にて固めたり。又東男島の持口は、平井兵庫助・同名刑部少輔・多久上野守・宗利・草場民部大輔・簀具遠江守・今村木工之允是を固め、南の口は新入道宗吟下知を加へ、

西一方は深泥を頼みたり。斯くて城主經治、士卒を下知し龍造寺勢の寄するを待つ。

一、既に十一月廿六日、龍造寺の軍士相圖を定め城を攻む。中にも一間堀の攻口、軍烈うして佐嘉勢の先手廣橋一祐軒追立てられて引退く。時に鍋島入替りて相戦ふ。此時江副兵部左衛門、一番に鐵炮を打懸け、軍功を現はす。廣橋機を勵まし押返して攻め入らむとするに、其從士大に挑み戦ふ。中にも田中源右衛門進みて、城兵と槍を合せ痛手を負ひて危く見えしを、下村生運馳け寄りて、白柄の槍を以て彼の敵を突伏す。然る處にまた青鎧著たる武者一人馳け來り、生運が甲の鉢を切割りたり。生運、大事の手なれば眼暗みて漂ひけるを、小川武藏守懸け合せ、其敵を討ち取り下村を助けにけり。斯くて敵味方討死手負數を知らず、日已に暮れむとす。時に鍋島、軍使を廣橋に遣し、御邊眞先に懸けらるゝと雖も、槍先鈍きに依りて、飛驒守が陣差支へ進む事を得ず候間、速に懸けらるべしといひ送られしかば、一祐軒大に腹を立て、案内知らぬ攻口といひ、其上日黄昏に及



ぶ處に、無理の合戦を急ぐ軍の法やある。よし／＼此一祐に、討死せよとの使なるべし。心得たり。唯今骸を此攻口に曝さむと、頻に士卒を下知し、自身眞先に進んで無二無三に攻め入りしを、川津近江守見て、必ず敵の一將とや思ひけむ。押並べて引組み、一祐が首を搔く。時に廣橋が家人二騎駈寄り、主の敵遁すまじと近江守を討取りたり。此時佐嘉勢に、堀江請太郎も一祐と一所に討死す。斯くて寄手の一將一祐軒命を殞し、城兵にも宗と頼みたる川津近江守討たれにければ、日も既に暮れ、又軍は先づ是までなりと、互に陣をくつろげり。斯かりし程に、隆信は妻山に陣を居るられ、諸勢は田中寶藏寺其外所々に陣を取る。

或はいふ、一祐軒、此時鐵炮に中りて死すとも。非なり。又いふ、鍋島此時一祐に使を立て合戦を急ぎしは仔細ある事なりと。

一、十二月廿日、龍造寺の諸勢、時を定めて一同に口々より兵を進め高城を攻む。中にも鍋島信生は、白石の郷長秀伊勢守といふ者を賺して、味方に引付け是を案内者とし、一間堀口に押寄せらる。城兵城戸を差固め、今度も合戦烈しくして、

川浪河内守を初め、鍋島の軍士多く討死す。されども於保賢守・松田權助・櫻木三郎左衛門・高岸主水・右近刑部允・中島次兵衛以下の者共、粉骨を抽んで大に勵み戦ひ、城兵岩永喜左衛門等若干討たれ、攻口終に破れしかば、信生則ち秀が導にて、此口より攻め入られ、深泥の方、城兵の油斷せしより城中へ攻め寄らる。斯かりし程に、龍造寺信周并に案内者前田伊豫守・井元上野介、男島口より攻め入りて、多久上野守・草場民部大輔・蓑貝遠江守・今村木工之允を討取る。扱男島の砦を打崩し、平井刑部少輔をも討取りけり。又川津口に向ひたる納富但馬守も、湯崎山口まで攻め入り相戦ふ。時に田代左馬助主従、湯崎に於て討死しけり。斯くて龍造寺長信も、同じく城近く攻め入り、其手の侍村山甚右衛門は、平井甚十郎を討つて首を取り、相浦左衛門尉生年十七歳、草場治郎大輔と渡り合ひ、手を負ひて危き處に、成富與六左衛門駈け寄りて、治部大輔を討取りぬ。相浦も敵二人を切つて伏す。其外石井源左衛門、是も生年十七歳、續いて分捕る。但し一間堀に於ても未だ詳ならず。相浦佐渡守・同名左衛門尉進み戦ふ。又小塚口に於ても、寄手軍に切勝つ



て、石井大隅守・木下四郎兵衛・北島河内守分捕り、秀島源兵衛戰功あり。其外佐嘉勢に、水町左京亮・同彌太右新門・石丸藤太左衛門・同弟千右衛門・小宮左馬允進みて敵を討つ。城兵も大に防ぎ戦つて、寄手にも犬塚宮内少輔・福地内藏允・田中九郎兵衛・大塚半左衛門・峯左衛門尉以下、所々の攻口にて討たれにけり。斯くて龍造寺の總勢早口々を攻め破つて、高岳の本城へ押詰む。時に城中より新宗吟入道切つて出で、中島刑部少輔信運と太刀を合せ、やゝ暫し切り合ひしが、竟に刑部少輔に討たれにけり。中島も、十三ヶ所宗吟に切られて、半死半生と見えたり。されば此入道は、武勇普通に勝れ、又連歌を好みて艶なまめき者なり。頃日須古踊といふ遊あつて、様々に花車くわしやなる文句を謠ひしも、此入道の作ぞかし。斯くて龍造寺の諸勢、我れもくくと本城へ攻め登りし程に、城主經治防ぐ事を得ずして竟に腹を切らむとしけるを、同名兵庫頭、頻に是を制し、如何にもして此城を遁れ、有馬・後藤を頼まれよと諫めしに依りて、經治、自殺を止め、西の方の百町牟田を桶に乗りて打越え、山中へぞ忍び込みける。扱城中には、兵庫頭を初め既に大將

落ち去りし上は、いざ打破つて遁るべしと、南の口より皆打つて出で、岡川を渡り湯崎へ出でけり。納富但馬守是を見て、城中より落人あるぞ。一人も洩すな。討取るべしと下知をなす。納富が從兵共、追駈けくは是を討つ事數を知らず。平井兵庫頭も、爰にて討たれけるとぞ聞えし。斯くて鍋島信生は、本城に攻め登られしに、七曲ななまがりとて特に峻しき所あり。爰にて信生柴すゝれして難儀に見られるを、杉町刑部、先に立ち小脇差を土に押立て、是に取付き下り給へといふ處に、城兵一人刀を振つて走り懸る。刑部心得たりと太刀を合せ、彼の敵を切伏せけり。斯くて信生は、同名大膳以下と本丸の塀を飛越え、城中へ乗り入りて、殘黨を搜し悉く誅伐あり。納富但馬守は、經治必定落行きたりと推量しければ、手の者共を西の山へ差遣し、安福寺・觀音寺を初め、其邊の民家殘らす焼拂ひ、經治を搜しけれども知れざりけり。抑、此平井經治といふは、元來少貳の一族なり。武勇の聞きこえありしに依りて、有馬義貞入道仙岩、是を壻に取りて、杵島郡の内數千町を與へ、其境を守らせけり。されば龍造寺と數度の弓箭を取りしかども、竟に負



隆信首實  
檢

けたる事なし。然るに今度は、鍋島信生の計略にて、秀伊勢守が導きし故落城せしとぞ聞えし。此經治、後に後藤貴明を頼み、天正四年の冬、上戸城へ入り、又塚崎の城へも來りしとなり。斯くて隆信は、強敵の平井を退治あり、凱歌を揚げられ寶藏寺に於て首實檢あり。則ち龍造寺安房守信周初名は左馬頭。鍋島飛驒守信生を以て當郡を支配せられ、且つ殘黨を治め、平井直秀が妻子を尋出し、是を具せられ、十二月廿一日、佐嘉へ歸陣ありけり。此時、新宗吟を討つて痛手を蒙りし中島刑部少輔、横邊田まで歸陣しけるが、大町に於て遂に落命しけり。未だ存生の内、隆信、彼の戦功を賞せられ白石郷の内、日目ヶ里といふ所を加恩ありけり。又平井直秀が一子をも扶持を加へられ、家人に召仕はれ平井甚左衛門と號し、百武志摩守賢兼の婿となりけり。

或はいふ、城主經治、此時城中に於て切腹すとも。非なり。又いふ、城中を忍び出で、南の川津口より落行きしを、納富但馬守、前を取切り討取るとも。非なり。又いふ、七浦に到り岳崎まで落ちたりしを、佐嘉勢附幕ひ、散々に射ける矢に中りて死すとも。非なり。

既に經治、是より二年を過ぎて、天正四年の冬、上戸城へ入りし證文之あり。

或はいふ、經治の子の稚きを、鍋島信生憐を加へられ、佐嘉へ具して歸らる。後に野村と改むと。非なり。野村氏は、前田伊豫守仔細ありて切腹す。其子供高麗在陣の内、鍋島直茂の命に依りて、前田を改め野村と稱せしなり。又いふ、須古落城は、十二月廿六日より合戦始まり、翌廿七日の事なりとも。非なり。

### 後藤貴明父子軍の事

天正二年の夏、西肥前塚崎の城主後藤伯耆守貴明と、養子の左衛門大夫惟明不和の事ありて、既に軍に及び、惟明竟に浪人の身となりぬ。其濫觴を尋ね聞くに、貴明に男子ありしかども、未だ幼稚なりし故、近年平戸松浦肥前入道々可の三男を養ひて、惟明と號づけ是を總領とす。然るに彼の惟明、頃日父の貴明を色々恨むる仔細

後藤貴明  
父子不和

其原因

後藤貴明父子軍の事



あり。先づ一つには、貴明の家の子中村太郎次郎公明が家人と、惟明の手の者。去る頃喧嘩を仕出し、中村が家人頗る慮外を働きしかども、貴明、是を等閑の沙汰に附せらる。又二には過ぎし日、有馬の軍兵、塚崎へ亂れ入らむと、鹽田を越えて長島花島まで攻め來るの時、貴明は病惱にて出でられず、惟明早速馳せ向ひ、久間の城に入りて辻左近大夫に會し、自身手を碎き有馬勢を悉く追返し、其趣、後藤山城守貞明を以て貴明に注進ありけるに、貴明の返答には、武士の軍に勝つ事は珍しからずと、更に褒賞の詞なし。亦三には、後藤の家に傳はる太刀と鬚焼といふ尉の面ありしを、先祖代々總領に譲る重寶なりしかども、貴明是を惟明に譲らずして、實子彌次郎晴明が今年十二歳甫子丸といひしに渡されけり。右彼此に付いて、惟明大に恨み思ひ、如何にもして貴明を亡し、鬱胸を晴さむと思立られけるこそはかなけれ。斯くて頃は六月廿二日、惟明思慮を廻し、塚崎の二の丸へ、澁江豊後守公師・松尾豊前守茂明・八竝右衛門大夫・小楠兵部大輔・中野兵庫助・宮野三河守・上野彌三郎・下の忠助・上瀧權兵衛を饗應すべき由にて招かれけり。此等は皆惟明を兼ねて最

員の輩なり。扱酒飯過ぎて夜に入り、惟明席を近うし、兼ねて思ふ心底を残らず語り出し、貴明を討たむ事、頼み思ふ由をぞ申されける。一座の輩、是を聞いて其中に松尾豊前守・八竝右衛門大夫・上野彌三郎・宮野三河守は、様々惟明を諫言し宥め申すと雖も、中野兵庫助と小楠兵部大輔・下の忠助、一向惟明と同意にて、有無貴明を亡すべきに決定す。斯かりし間、松尾・八竝・上野・宮崎も力及ばず、皆一味して謀叛を企て其用意區々なり。時に惟明申されけるは、貴明を討つべき計略は勿論の事、爰に後藤山城守・久間薩摩守・辻左近大夫・中村太郎次郎は、貴明に至つて無二の忠臣の者なり。彼等又大勢の者にて、既に己が居城にあり。是を討取る事、先づ第一なりと申されけるに、小楠聞きもあへず、何條仔細や候べき。兎角今宵は早夜も深更になりぬ。又明晩こそ參會申すべしと、各、暇を乞ひて宿所に打歸りけり。爰に後藤山城守が弟に、富岡新九郎といふ者あり。折節所用ありし故、二の丸へ來りしが、彼の密談を物越にふと聞き、急ぎ歸りて兄に告ぐ。山城守大に驚き、早速久間薩摩守に告遣す。薩摩守、頓て弟の辻左近大夫を以て、貴明の方へ注進しけり。斯



かりし程に、貴明其夜、則ち妻子に武富志摩守を副へて、實子彌次郎晴明のありける宮野館住吉城とへ送り遣し、其身も翌くる六月廿三日の平旦、塚崎の本丸を立退き宮野の館へ赴かる。既に西山の水呑坂を越えられけるに、後藤山城守主從十四五人にて馳付け、又西谷坂にて久間薩摩守・辻左近大夫・永田河内守彼此三十餘人追々馳せ來りて、貴明上下八十餘人になり、宮野に著し、彌次郎晴明と一所に取籠らる。斯くて塚崎の二の丸には、惟明を初め叛逆の輩寄集まり、（叫さか）聞口申しけるは、此曉貴明、宮野新館に移徙とて、俄に引越さる。いと不審なる事なりと評定す。其中に中野兵庫助申しけるは、さればこそ過ぐる夜富岡新九郎、二の丸へ來り奥へも得通らずして、頓て歸りし由、某が下人の申すに承りぬ。彼の新九郎自然立聞して、貴明にや告げけむ。急ぎ彼等が館へ誰ぞ馳せ向ひ、事の體を見るべしと、中野監物・田中大藏允八並新助彼此四五人急に出立ち、富岡が天神崎の城に到りて窺ひ見けるに、山城守は今朝より早宮野へ赴き、新九郎は老母女童共を久間の城へ立忍ばせ、自身は疾く貴明に追付かむと、唯今打出づる砌なり、然る處に、城中より三人の者

共來りて、中にも中野監物門外より呼ばはりけるは、唯今惟明公より御邊へ尋ねらるゝ仔細あり。早々二の丸へ參らるべしとの事なりと申す。新九郎打聞きて、心得たり中野殿と、いふより早く主從四五人にて切つて出づ。中野の手の者七八人槍を揃へ新九郎に渡り合ひ、火を散らして突合ひけり。爰に惟明の家人に、中山十助とて精兵の手垂たれあり。よつ引いて射る矢、新九郎に中りて馬より落ち、矢庭やばに空しくなりけり。歳廿二なり。扱三人の者共、新九郎を討取り二の丸へ歸り、惟明に斯くと語る。斯かりし程に、惟明を初め與黨の輩、我々が企早露顯したり。此上は片時も急ぎ宮野へ打寄せ、勝負を一戦の中に決すべしと其用意したり。斯くて此事、世上に隠なくして、伊萬里兵部少輔治・中村太郎次郎公明を初めとし、有田の山中半兵衛、同所の三百人衆是等は、皆貴明方にて宮野へ馳せ集まる。其外上松浦の鶴田兵部少輔勝・同弟川原豊前守向も、軍兵を率して宮野へ差遣し、貴明に加勢しけり。貴明、頓て其勢を合せ、宮野住吉の要害に引籠らる。斯かりし間、塚崎惟明方よりも卒忽に取懸り得ずして、先づ塚崎城に楯籠る。其人數には松尾豊前守・田



同合戰

中大藏允・中野兵庫助・同名式部少輔・同監物・加々良讚岐守・富岡喜左衛門・小楠兵部大輔・同名新左衛門・同監物・宮野三河守・黒髮隼人允・八竝右衛門大夫・同名新助・馬庭隼人佐・武雄右馬太夫・上瀧權兵衛・上の彌三郎・下の忠助・田島忠五郎・川崎忠五郎・鹽見前城主・澁江豊後守・橋公師を先として、宗徒の者共五百人、二の丸詰城・新城鞆の尾口所々に楯籠り、各、其持口を相守りぬ。斯くて雙方より軍を出さず、日を送りと暫くありし處に、七月三日、惟明方より小楠兵部大輔・同監物軍勢を引率し、宮野へ取懸り、先づ鳥海三間坂を放火しけり。時に貴明より白水原へ出向ひ、小楠と打戦ふに、小楠兄弟利を失ひ長谷の邊へ引退き、土橋美濃守・野田又七郎が爲め、監物あへなく討死しければ、兵部大輔は塚崎へぞ引入りける。其後惟明、使を龍造寺隆信へ遣し、加勢ありて給はるべき由申送られぬ。貴明よりも原能登守・武富志摩守兩使にて、惟明同前に加勢をぞ乞はれける。其頃隆信は、平井と對陣あり。杵島郡に居られし處に、惟明の使と貴明の使同時に來り、障子を隔て、仔細を述べけり。時に隆信の近臣勝屋勝之軒、是を取次ぎ披露しけるに、隆信も分け難く良思案ありし

惟明遂に父貴明に降參

かども、衆議一決の上、貴明に加勢あるべき由、返答せられけり。扱塚崎へ人數を差越すべしと、小河武藏守・納富能登守・執行越前守に二千餘騎を副へて、宮野へ差遣し、貴明へ力を合せらる。其後惟明、宮野に於て一戦ありしかども、打負けて終に先非を悔ひ、貴明へ降參しけり。此時、宮野の軍中衆議あつて、不孝の者の見懲みこらしめにとて是を虜にし、誅戮すべきに極まりけるを、貴明打案じ一度父子の約をなせし者なり。努々殺すべからずとて、平戸領早岐へぞ送り遣されける。今度惟明に一味せし者の内、小楠兵部大輔・八竝右衛門大夫は、同じく早岐へ赴き惟明へ奉公す。加々良讚岐守・中野式部少輔・富岡喜左衛門は、龍造寺へ赴き鍋島信生を頼みて佐嘉に住し、其外黒髮隼人允・武雄右馬太夫・田島忠五郎・川崎忠五郎等は、皆心々にぞ浪人しける。斯くて貴明、隆信に對し今度加勢の謝禮あり。向後に於て別心あるべからざるの由、堅く約束ありけり。

或はいふ、惟明、今度軍に打負けて、然も大事に圍まれ、籠中の鳥の如くなりし由、小川・納富・執行三人の方より隆信へ注進す。時に隆信より、急ぎ父子の間中



和然るべき由下知せらる。之に依りて佐嘉勢の先手執行越前守より、塚崎の城中に於て中野監物・馬場隼人佐方まで、其趣いひ送りぬ。中野心得て惟明にいひ聞かす。仍りて惟明、兎も角もと肯ひ、則ち貴明へ降を乞ひけるとなり。

或はいふ、惟明、早岐へ浪人の後、伊萬里へ來り後藤左京進と號し、數年居住す。

此時隆信、哀憐を加へられ龍造寺左衛門大夫と名を改め、食祿の地を與へしとも、此子孫今平戸にあり。後藤と號す。

### 隆信後藤貴明と和平互に養子の事

後藤伯耆守貴明は、今年の夏、父子合戦に及びし時、龍造寺の加勢に依りて、已に利運を得しかば、此後隆信に對し異心あるまじき由、堅く申しかはされし處に、又如何なる仔細やありけむ。翌くる天正三年の春、貴明佐嘉に到りて重ねて害心を挾みけり。時に貴明、骨肉を分けたる一族後藤山城守貞明、聊か仔細あつて忽ち心を佐嘉へ通じ、龍造寺勢を差招く。斯かりし間、三月中旬、隆信出馬せられ、多久より

隆信貴明  
と再び和  
平

北方に出でられ、塚崎に取懸けて先手は鷲田巖彌三橋に押詰め相戦ふ。されども城中堅固にして事ともせず。隆信其體を量られ、田原伊勢守尙明を使とし、貴明と再び和平ありけり。扱兩家神文を取替し、隆信の三男善次郎家信鶴仁王の事なりを貴明養子として、息女樵市女に娶らせられ、又貴明の實子彌次郎晴明は、隆信の養子とせられ、貴明は頓て杵島郡蘆原に隱居し、天正十一年八月二日、行年五十二歳にして卒去ありけり。斯くて善次郎家信は、中頃後藤伯耆守と號し、後十左衛門に改め、彌、塚崎を領して唐船岳の城に居住せらる。彌次郎晴明は龍造寺生左衛門家均と改め、佐嘉の内太侯庄を知行して、中頃久保田に在館しけり。

### 後藤家由來の事

抑、彼の後藤といふは、元祖如何なる者ぞと尋ね聞くに、大織冠の御末左近將監兼武藏守藤原利仁將軍の子孫なり。利仁六代の孫を後藤内則經といふ。源賴信に仕へて、或時は越前の盜賊を征伐し、ある時は市原野の猿童を誅す。其子を後藤内章

後藤家由  
來

隆信後藤貴明と和平互に養子の事

後藤家由來の事



明と號す。北面にありて昇殿を免されし故、雲上後藤内と稱し、又河内國坂戸を知行するに依りて、坂戸判官ともいひけり。是も源賴義朝臣に仕へて、八幡殿の乳母子なり。義家一年、奥州の安部貞任を攻められ、七ヶ年の在陣に大に功を立て、義家朝臣僅七騎に成られし時も、別して軍勞あり。則ち七騎武者と稱す。其七騎といふは、鎌倉權五郎景政・三浦平太郎爲次・忍三郎季茂・加藤加賀介景通首藤權守助通後藤内章明に、大將義家を加へ七人なり。然るに章明が子後藤太資茂相續いで義家朝臣に仕へて、清原武衡追討の時、出羽國に於て戰功あり。其後又義家の子息六條判官爲義、天仁二年に伯父美濃守義綱を、江州甲賀に伐たるゝの時も相從ふ。斯くて此資茂が時、始めて肥前國杵島郡塚崎庄の領知へ下向しけり。夫より以來其子後藤資明、塚崎の城に居住して、人皇七十六代近衛院の御宇仁平年中に、八郎爲朝鎮西在國の中、黒髮山の太蛇を射られし時、専ら其評定の人數なり。彼の資明二十六代の孫を、後藤伯耆守純明と號す。此純明に男子なくして、大村丹後守純前の次男又八郎純を養ひ、一人女に娶せて、中頃は後藤左衛門尉と號し、後には伯

耆守と改めけり。今の貴明是なり。初の妻室早世ありしに依りて、其以後伊佐早の伊福氏の女を迎へらる。然るに此貴明、武勇飽くまで勝れ、近年は後藤領の外に他郡を多く切取り、門前に馬を繋ぐ血判の侍、既に四百餘人とぞ聞えし。

### 伊萬里圓通寺觀音由來の事

斯くて後藤左衛門大夫惟明浪人の後、松浦の早岐に暫し居住し、夫より伊萬里へ來り、左京進と改名す。然るに一人の娘あり。於吉の前とぞ申しける。此女、幼少より觀世音を信じ、平生に普門品を誦する事怠らず、漸く深閨に仁ひととなり、貌は春の風一片の花を吹殘すかと疑はれ、顔は秋の雲片江の月を吐出するに似たり。其上敷島の道に心を寄せ、満々たる雨の夜は明行く空をかこち、紛々たる雪の日は暮るる夕を悲み、既に三五の歳も過ぎ、二八の春の末にやありけむ。窓近く植ゑし櫻の散るを見、於吉前、

大方の花よりも猶ほものうきは身の春過ぐる夕なりけり

伊萬里圓  
通寺觀音  
由來



されば父母の寵愛は、袖の裏の珊瑚の珠、掌に置ける芙蓉の花に異ならず。其頃、此里に龍造寺右衛門督家繁といふ人あり。如何なる玉垂の隙にか見染めけむ。中達なかたちを求めて文を送る。千束の文も錦木の、朽つる計りになりしかば、於吉前も流石岩木にあらず、引く手に靡く豊竹の一夜の枕を川島の水の流の變らしと見えけるに、家繁暫く陳する事あり。離々かれぐにてある時又忍びて來り、於吉御前の聞近くかいまみえけるに、女は是を知らず、折柄秋の夕の哀しさに、西の廊の簾卷かせて浦の方を詠めやるに、室の八島にあらねども、海士の藻鹽やく煙の、思はず空に打靡くも又面白く、沖に漕行く船共の跡白浪に見えけるも、人間五十年の夢の如しと、憂世の假なるを思ひ續け、乳母して庭の千種を折らせけるに、白菊のうつろひて見えれば、於吉前、

ことわりや人の心の秋の色にうつろひ果つる庭のしら菊

又黒髮山の峯に、鹿の聲幽かすかに聞えしかば、乳母、

鳴かずとも秋の哀は知れぬるに悲しさ添ふる鹿の聲かな

吉御前の歌の様、乳母が誣かこし心中、家繁我ながら罪深く思ひ知りて、縁にさしのぞけば、女は見る人ありやと、やをら打下して引入りぬ。其後は家繁彌あま思に堪へ兼ね、人目の關守も、今はよしや。中々免せかすと打省みて、伊勢の海あま〔人脱〕の度重りしかば、惟明夫婦談合あり、吉御前十九と申す天正十四年丙戌の春、容儀刷ひ右衛門督の許へぞ送られける。されば梅檀の煙には釋尊免れ給はず、無常の風には萬乗の聖主も遁れ給はぬ世の習なれば、其明くる天正十五年二月八日、於吉前難産にてはかなくなりけり。惟明夫婦の歎き、家繁の思ひ大方ならず、なくく近き邊りの圓通寺に葬り、法名梅岩壽香大姉と號し、佛事經營懇なり。斯くて五七日に當りし前の夜、吉御前父母の夢に見えけるは、我は素より斯かる垢塵の家に生まるゝ身にあらず。然れどもさる因縁あつて、母の胎内を借り假に人界に生を受けたり。されば去る衣更きさら著八日、愛執の絆を切つて、本の如く上界に歸り去りぬ。今は一向父母ともに歎を止め給ふべし。唯願はくは自らの形を觀音の像に彫らせ、圓通寺の本尊に安置し給へ。さあらば此後、難産の女人を救ふべしと、正しく夢に見えた



り。惟明夫婦、夙に起き不思議なる夢なりと互に語り合ひける處に、夫の家繁來り、我も過ぎし夜見たりと、同じ夢をぞ語りける。人々彌、信を取りて、折節其頃筑前國博多の浦より感定軒といひける佛師の、伊萬里に來りありしを頼み、吉御前の影を觀音の像に彫らせ、金物細工玄智齋にて、同十月に佛體成就し、吉御前の舍利を二粒御ぐしに刻籠めて、則ち圓通寺に安置ありけり。されば難産を救ふ利益深くして、女人の佛詣絶ゆる事なし。今の本尊是なり。又三十五日に當る日、彼の寺にて佛事様々なしけるに、其半、吉御前かと覺しき氣高き尼、忽然と來りて住持鎮翁元宅に向ひ、彌陀の六字を冠に置き、六首の歌を詠じて搔消す如く失せけり。元宅不思議に思ながら、即座に其六首を書留め、深く祕して今に圓通寺にあり。誠に一百年の過ぐるは夢の如く、吉御前の印の松、寺中にありて苔むしたり。

右、於吉前の事、其外觀音安置の由來、其節の佛師感定軒自筆を以て、鳥の子紙を短く切り、年月日委しく書き、佛體の内に作籠め置きたり。是を其後知る人なし。然るに去る元祿の頃、彼の佛像損じけるに依りて、再興すべしと佛師を頼み

し時、右書付を佛體の内より見出しぬ。今に彼の寺にあるなり。

一、天正三年己亥、上松浦波多三河守親、龍造寺に彌、和を乞ひて隆信の塔となる。妻室は初の小田鎮光の室なり。

此室、後に親遠流せられし故、佐嘉へ歸り、尼になりて靜室妙安と號す。

北肥戦誌 卷之廿一 終



# 北肥戰誌 卷之廿二

## 龍造寺隆信須古城普請の事

天正三年乙亥、隆信歳四十七なり。然るに近年嫡子民部大輔鎮賢に家を譲らむと思立たれ、隱居所の爲め、須古の平井が舊城高岳の要害を普請すべき由下知せらる。茲に因りて今年七月より勝屋勝一軒・小林播磨守・成富甲斐守、須古に赴き彼の城地所々を見積り、或は堀を深うし、或は塀を修補して、同十二月に普請成就しけり。隆信、當城の普請を思立たれし事、強ひて隱居の爲のみにもあらず、且つは松浦彼杵・藤津・高來の輩、未だ龍造寺に隨はざるを征伐すべき爲とぞ聞えし。

隆信須古城普請

## 横岳鎮貞龍造寺へ降參の事

同年隆信、三根郡の横岳中務大輔鎮貞を攻めらるべしと、舍弟安房守信周・同名上總介家晴に軍兵を副へて、東肥前へ差向けらる。彼の鎮貞、少貳政興を取立つべしと、豊後の大友と談合し、此十餘箇年以來、己が西島の居城に楯籠り、竟に龍造寺に従はず。然る間、隆信、去る永祿七年の春、元龜二年の夏、其外にも度々大軍にて取懸け攻められしかども、城は無雙の要害なり。其上、大友宗麟より加勢として、鐵炮・玉藥・兵糧等に至るまで不足なく籠置きしかば、城中堅固にして、横岳家人宗兵部・古館將監・原左近・青木刑部左衛門・板部六郎・福島藤右衛門・島上野介・市武兵部以下の者共、其口々を相守り防ぎ戦ひける間、隆信、一度も勝利を得られずして、毎度馬を返されぬ。然れども今度は、豊後の加勢も乏しくなり、政興御曹子も出國ありて、鎮貞頼む方なくなり果て、其上同名の下野守頼續、先達隆信へ屬し、此度西島の城中に入り、一向家相續の爲め、龍造寺へ降參然るべき由、様々教訓申すに依りて、鎮貞も尤もと同じ、信周・家晴まで和を乞ひて、則ち西島の居城を彼の兩人へ去渡し、城中男女悉く財部村へ引入れけり。鎮貞其後、龍造寺に屬して、兵庫頭家實と

横岳鎮貞龍造寺に降參



ぞ改めける。

### 安武家教重ねて龍造寺へ降参の事

横岳が西島の城落去しければ、龍造寺の諸勢、筑後貝津の城主安武式部大輔家教を攻むべしと、夫より三根郡を立つて河を越え貝津に取懸る。此家教、先年佐嘉に向つて和を乞ひしかども、又翻りし故なり。先手は横岳下野守・坊所尾張守・赤司志摩守・秀島淡路守・横尾内藏允にて、都合二千餘騎鬨を作つて攻め入らむとす。不意の事なれば、城中大に騒動し防戦叶ひ難かりしかば、家教、先非を悔い懇望を以て再び降を乞ひ、妻子を具して城を開き、豊後の方へぞ赴きける。此事佐嘉に於て隆信に注進ありし處に、則ち貝津の城へは、横岳下野守に赤司・江口を副へて差籠めらる。扱此時、當郡の面々所替ありて、三根の中野の城主馬場肥前守鑑周を、杵島の小田へ移され、是を有馬の手當とせられぬ。綾部備前守鎮守をも、横邊田へ移されけり。次に此度戦功の者、横岳下野守家人廣木玄蕃允・長但馬守・桂新五郎・森土佐

安武家教  
再び龍造  
寺へ降参

守、其外高良山の座主鎮興の家人池尻和泉入道久元等へ、各、恩賞を給はりけり。又彼の安武は、其後筑後へ立歸り、再び龍造寺へ相従ひ、質人を出しけり。

### 隆信須古に移らる、并横造落城の事

同年十一月、須古城普請既に成就ありしかば、隆信頓て移られけり。然るに其頃有馬方の輩、藤津・彼杵兩郡の内に數人在城す。先づ藤津には松丘濱の事なりへ有馬左衛門佐義純、自ら渡海して在城す。鷺巢の城には同名修理大夫義直あり。其外横造・鳥附鹿島の事なり兩城へは、深町尾張守・岩永和泉守・原左近大夫以下在城しけり。斯くて翌くれば天正四年丙子正月に、隆信、宿老中を集め彼の藤津の敵城を一々攻むべしと評定せられしに、鍋島信生の申されけるは、案内知らぬ敵地へうか／＼と馬を向けられむ事如何候はむや。先づ先達ちて人數を差向けられ、敵と相對して其分限を見、其後大將は、御發向候うて然るべく候はむやとありしに依りて、隆信も同意せられ、されば誰をか差向くべき。爰に近年筑後へ浪人せし蒲田江の犬塚彈正と蘆

隆信須古  
城に移る

安武家教重ねて龍造寺へ降参の事 隆信須古に移らる并に横造落城の事一五



刈の徳島左馬助は、武勇の者共なり。此兩人を賺し寄せ、味方に引付け藤津へ差向けて、敵の強弱を試み、其後總勢は取懸るべきに衆議決し、犬塚がありける筑後國大休へは、勝屋勝一軒を使ひし、又徳島へも同じく使者を立てられ、彼の兩人を須古へ招かれけり。斯くて犬塚は、隆信の招を受け稍、打案じ、先年小舅の小田鎮光が隆信の謀計に陥り、うか／＼と佐嘉へ赴き、敢なき死を致せしを思ひ出して、少時返答せず。然れども勝屋入道、色々諫言を加へしに依りて、さらば參るべしとて、嫡子掃部助・二男平内・三男九郎次郎・同名美作守・同兵部少輔・家人栗山備後守・中田町石見守以下、究竟の者四十餘人・雜兵二百餘人召具して、肥前へ打越え直に須古城に著く。徳島左馬助も同じく來りぬ。然るに隆信、先づ犬塚に對面あり。年來の怨心を翻され、今度藤津への加勢を頼み思ふ由にて、備前鍛冶の太刀一振彈正に與へられ、同脇差を嫡子掃部助へ給はりけり。犬塚畏まり領掌して退出す。爰に彼等が家人栗山備後守は、大剛の者にて三尺五寸の太刀、三日月の如く彎り反りたるを鷗尻に横たへ、座敷の次まで押入りて、若し彈正に仔細もあらば、隆信を唯、

隆信藤津  
に出陣横  
造城を攻  
む

一太刀にと思ひし氣色なりしかども、別儀なくして退出しけり。扱徳島も、同じく領掌申して座を立ちぬ。斯くて犬塚彈正忠鎮家・徳島左馬助信盛、各、手勢を引牽し、藤津へ討ち入り、森といふ所に要害を設けて陣を取り、有馬方と相對す。斯くて隆信は、彼の兩人が時々の注進に任せ、さらば打出づべしとて、正月廿日、都合一萬餘騎にて須古を立たれ、鍋島信生は先陣に打つて、先づ高町に屯せり。夫より隆信、次第に旗を進められ、二月初旬既に龍王峠に著陣ありしに、犬塚・徳島出向ひ、隆信を迎へて爰よりは兩人案内し、眞先に鞭を揚げ、藤津へ相進む。斯くて隆信、同月六日陣を二つに分けられ、其身は旗本三千五百を以て濱付を押され、總軍六千五百は横造の城へ取懸る。先手は犬塚・徳島、二陣は鍋島豊前守信房・同信生、其次段々小川武藏守信貫・納富能登守信理・龍造寺下總守康房・鳴打陸奥守胤忠・徳島甲斐守長房・同左衛門大夫信安・千布因幡守家利、其外神代衆・千葉衆・多久衆・後藤衆・江上衆・佐留志の前田伊豫守・山口の井元上野介、城はいふ上總介。納所の田代因幡守・松浦の河原豊前守・鹽田辻左近大夫以下、各、三陣・四陣に作りて、皆、横造へ攻め近づく。然る



同合戦

に當城には、有馬家人深町尾張守・原左近大夫・同十郎・同五郎・岩永和泉守加はりて、城兵二千餘騎大手の江に支へたり。既に龍造寺の先陣犬塚・徳島、輕卒を進め弓鐵炮を打たせ、敵數十人矢庭に打倒し、城兵を追込めて柵を作る。時に原深町自身猪鳴きて切懸り、柵を打破つて犬塚・徳島と戦ふ。其軍烈くして、犬塚・徳島、利を失ひ手の者多く討たせ、眞先に進みし犬塚彈正、既に討たるよと見えしかば、二陣の鍋島、是を援けて相續く。原深町、大に勝に乗り勇み進みて馳せ立つ。鍋島も亦打負けたり。是を見て佐嘉勢の中より、北島兵庫助・同名河内守・水町彌太右衛門・犬塚勝右衛門・吉岡源次兵衛・小宮左馬允・江里口九郎右衛門・中橋平兵衛・執行與三右衛門以下、崩る味方を引立て、稠しく打戦ひ、各、敵を討つ。中にも杉町刑部は、一番に築地を駈け登り敵を拂ひ、味方を麾くに、井元茂七來りて城兵と引組み、顛びて堀に入りしを、成富十右衛門續いて堀に飛入り、其敵を討つて茂七を助く。成富今年十六歳にて初陣なり。爰に又秀島主計允は、敵と槍を合せ討たれし處を、弟圖書助駈け付け、兄の敵遁さじと追駈け切伏せたり。鍋島信生の眼前なりしかば、甚

嬉野直通等の變心

だ褒詞あり。則ち其場に於て、圖書を隼人に改められ、其上鞍置く馬を給はりけり。此外、高岸主水も首二つ取り、成富甲斐守信種首五つ取りて疵を蒙る。斯くて城兵、猶強うして烈しく防戦し、寄手の軍兵難儀なりしかば、石井肥後守定時・成富民部少輔・福地内藏允・犬塚左馬允・江口兵庫助・千布新九郎を先として、龍造寺の軍士敵中に駈け入り、引組んでは刺違へ、打違へては切死す。石井三郎左衛門は敵六人を討つて討死しけり。斯かりし程に、龍造寺の先陣二陣竟に敗するかと見えける處に、小川武藏守・百武志摩守・成松遠江守・鴨打陸奥守・井上上野介・加々良大學助・徳島甲斐守・同名左衛門大夫、我れ先にと相續く。鍋島兄弟、力を得、敵を左右に追散らし、少時息をつがれし處に、藤津日守の城主宇禮志野越後守直通今は嬉野といふ者、有馬方にて居たりしが、如何なる所存や出來りけむ。忽ち翻り脇備より引拂つて、龍造寺の陣へ馳せ加はる。是を見て宇禮志野が相備の原豊後守・永田備前守・吉田左衛門大夫も、味方の陣を引き別れて、越後守と一つになり、却つて城兵と相戦ふ。爰に於て原深町、大に動搖し、混崩ひたぐつれに崩れて、城中へ入らむとするを、永田吉

隆信須古に移らる并に横造落城の事



田嬉野後を遮り、龍造寺の總勢、亦左右に廻りて洩さじと討ち戦ふ。斯かりし程に、城兵猶立つ足もなくなりて、大將深町尾張守立所に討死し、原十郎は鍋島の手より江副土佐守に討たれ、同五郎は江副兵部左衛門に切られ、岩永和泉守も討死しけり。既に大將分の者共皆討たれしかば、其手の軍兵途を失ひ、宗徒の輩四十餘人、爰彼所にて討取られ、殘兵東西に敗走し、城戸口忽ち破れにけり。時に寄手の總軍、悉く込入る。中にも小川武藏守が一行、本丸の塀を打破り一番に乗入りしかば、是に續いて、鍋島信生・同名豊前守・納富能登守・徳島左馬助以下、皆乗り入る。斯くて其手の侍副島式部少輔・古賀新左衛門・井原隼人・木下四郎兵衛・立川新五左衛門、城内所々に走廻り、あそこ爰に火を懸け焼立てしに依りて、城中の者共、煙に咽びて防ぎ得ず。此時寄手の軍兵共、分捕高名様々なり。中にも鍋島信生の手より松田權助は、城兵原が役人を討取り、其身も疵を蒙る。辻小左衛門も敵を討つて首を取る。爰に城の土手際に敵ありて、筈ねくぶくなどを張り、其透間より長柄の槍を以て、鍋島信生所々働かれしを、狙ひ居たり。信生の手の者に野田與次郎是

横造落城

を見付け、忍寄りて彼の槍の鵜の首に取付き、敵を外へ引出さむとす。敵も頻に引合ひて、與次良をねくぶくの際に引付けたり。信生急ぎ走り寄り、竟に其槍を奪取りぬ。此時、敵ねくぶくの下より槍・長刀にて拂ひしかば、信生、足の踵かかに疵を蒙らる。時に鍋島大膳立寄りて流るゝ血を止め、櫻木三郎左衛門是を愴いたはる。扱當城に籠りし者共、殘なく討たれて城は則ち落去しけり。此合戦に討たれし處の有馬勢、凡そ三百餘人なり。斯かりし程に、鷲の巢島附の兩城も、攻めざる前に明退きしかば、隆信頼て島附鹿島の陣を移さる。爰に於て藤津郡の歴々嬉野越後守直通・同名陸奥守通益・同子息與右衛門尉・同名大和守・原豊後守直家・吉田左衛門大夫・永田左京允通清・久間薩摩守・上瀧志摩守盛貞を初とし、我れ先にと參陣して龍造寺に相従ふ。然る間、隆信の軍兵雲霞の如く成り、則ち濱の松岡の城を攻めむと議せらる。有馬義純・同義直、是を聞いて合戦をや除のぞにけむ。俄に松丘の陣を引いて高來へぞ打渡りける。斯くて隆信、少時鹿島に在陣あり。此所に於て今度始めて龍造寺に屬せし藤津郡の輩嬉野・永田・原・上瀧・吉田以下に、各、先本領を安堵させらる。



扱犬塚彈正忠鎮家を播磨守益家と改名あり、當郡に於て新恩の地二百町を給はり、則ち森岳に城を取構へ盛家を居ゑられ、徳島左馬助を筑後守になし、犬塚と同じく新恩の地を給はり、松丘の城を修補して、徳島に横岳兵庫頭家貫を副へられ、其上上瀧志摩守・辻甚七永田左京等の手寄衆を各番にして入置かれ、鶯巢には嬉野與右衛門尉を差籠められ、鹿島の城には鍋島豊前守信房を居ゑられ、各當境を能く相守り、有馬を押へ申すべき由下知ありて、隆信は頓て須古の城へ歸陣ありけり。

一、同年佐嘉龍造寺の城、四方の總構を築き、牛島敵練の土手の松を植う。其役成富甲斐守なり。

隆信下松浦出馬附大村高來軍の事

隆信下松浦出陣

天正五年丁丑或舊記にいふ、今年光永元年と唱ふ。東西に光り永く映く故と云々。六月、龍造寺隆信、下松浦へ馬を出さる。平戸松浦肥前守鎮信を初め、當郡の輩征伐の爲なり。既に龍造寺の大軍伊萬里へ著陣しけり。時に所の地主伊萬里兵部少輔治、一番に和を乞ひて下城す。平戸の

松浦以下降伏す

松浦鎮信も同じく和を乞ひ、大曲對馬守を差出し神文を送る。其詞にいふ、自今以〔頓カ〕後傾早以可罷立御前途上下之を略す。となり。仍りて隆信、平戸へ發向是なし。斯くて山代の城主山代虎玉丸も降參し、有田唐船の城主松浦丹後守松浦四十八黨の總領なり。も、家人池田武藏守を以て和議を求め、同所大木の庄山伊勢守高も軍門に降りて、下松浦の輩悉く平伏しければ、隆信容易く當郡を手に入れ、舍弟安房守信周を有田に居ゑ置き、其身は夫より彼杵郡へ討入り、大村丹後守純忠時に理事といふな。耶蘇にての名。を攻むべしと評定ありて、後藤貴明・平戸鎮信へも人數を出さるべき由いひ送られ、其外伊萬里以下を催して、既に下松浦を打立つ。

ある説にいふ、此時隆信、伊萬里表に於て平戸の松浦・唐津の波多・筑前の小田部・大津留と合戦しけるに、唐津の波多尾張守、俄に心を變じ龍造寺に一味する故、平戸以下力を失ひ、則ち隆信へ降參すとあり。跡形もなき事なり。元より波多尾張守といふ者なし。

一、既に隆信、大村征伐の爲め、彼杵郡へ發向あり。一陣は鍋島信生并に勝屋勝一軒、



二陣は納富左馬大輔・小川武藏守、三陣は執行越前守城原の江上衆・神代彈正忠山内の神代衆。四陣は鍋島豊前守藤津郡の軍士・龍造寺和泉守多久の軍士。その外小城の千葉衆以下なり。後陣は隆信の旗本にて、彼杵へ討入られけり。斯くて平戸・後藤も其催促に應じて、貴明の一勢は塚崎を立つて吉田を過ぎ、郡村を野兵に指して押出し、鎮信の軍兵は兵船を揃へ、平戸を出船して、大崎三越に大村へ著岸す。此時、鎮信自ら參陣か。然るに大村純忠、今度龍造寺の大軍攻め來る由聞きしかば、皆是河内或は貝瀬の要害に、郡何某を大將にて、逞兵數千人差籠めて此口を固め、扱本城を固く守りて佐嘉勢の寄するを待懸けたり。斯くて龍造寺の先陣鍋島信生・勝屋勝一軒、皆是河内へ著陣して、六月廿日、先づ軍の一法なりと足輕を懸け、城邊の青田を刈り取らす。城兵、是を追拂はむと打出でたり。寄手、案の内に敵を誘引出し、大勢一同に嘩と懸り、是を追立て付入にせむと、城戸口に押寄せたり。されども城兵入れじと支へて相戦ふ。時に鍋島の手より江副兵部左衛門一番に懸りて打戦ふに、鐵炮に中りて倒る。原口平次兵衛は、金の一本苜蒲の指物を差し、刎木戸を越えむとしけ

るを、城兵鐵炮を以て打倒す。是を見て勝屋勝一軒が一勢、頻に抽んで攻め入らむとす。されども城兵、城戸口を固く守りて烈しく防戦し、勝一軒が兵打負けて引退く。隆信、大に機を採まし、田原伊勢守を使にて、飛驒守急ぎ勝屋を援はるべしと下知せらる。鍋島は此時、聊か思慮ありて勝屋勝一軒が敗るゝを見物してありしかども、田原來りて隆信の使を述ぶるに依りて、さらば信生懸るべしと采配を揚げられ、總勢一つに圓めて早速攻め懸けらる。城兵是を見て、爰を破られては叶はじと、悉く一所に集まり防ぎ戦ふ事甚し。其時信生、敵の體を量りて人數を引分け、中にも究竟の者共は、坤の方の搦手へ差廻さる。信生の計りし如く、此口は城兵油斷して、防ぐ者無勢なりしかば、佐嘉勢の中より副島式部少輔、やすくと城戸を打破り、一番に攻め入りて城兵を討つて首を取る。是を見て成松遠江守・於保賢守も相續く。斯かりし程に、總勢此口へ廻りて、倉町眞清・木下四郎兵衛・大塚内藏允・高岸主水允・北島河内守・同名兵庫助・相浦河内守以下、續いて討戦ひ各、分捕す。中にも倉町眞清は、敵數多に渡り合ひ、突かれて深手を



負ひけるを、木下四郎兵衛駈け付け、其敵を切伏せて眞清を助く。されども眞清、重き手負にて終に相果てたり。又相浦河内守は、餘りに進み戦ひ、先年多久の城にて相働きし故、隆信より給はりたる信國が作りし太刀を打折りぬ。斯くて相集まり烈しく防戦し、弓鐵炮を打懸くること雨の如くにて、龍造寺の士卒討たる者數を知らず。斯かる處に、鍋島信生の家人杉町刑部、手負死人を顧みず、矢面に立つて塀を打破り、信生と同じく城中へ乗込み、大に勵み戦つて共に分捕す。又武藤丹後守眞清も、間道より城中へ忍入り、味方の諸勢を引入るゝに、水町彌太右衛門・秀島甚左衛門・牟田周防守・辻小左衛門・中島將監・中島次兵衛・井原隼人・香田孫兵衛、其外城原衆に諸岡安藝守・執行與三左衛門以下悉く攻め入りて、皆々分捕り高名す。味方に討死の侍小川但馬守・川浪源助・増田藤左衛門、其外雜兵數を知らず、中橋平兵衛疵を蒙りけり。斯かる半ばに、小川但馬守が子源右衛門、城の堀を遊ぎ越し、塀を乗越え城中に入りて火を懸く。又成富十右衛門信安も、同じく走り廻り、城の巽の方より火を懸けたり。斯かりし程に、城中の者共

大村勢敗軍

防ぐべき様あらず、悉く落失せて城兵則ち落去しけり。然るに彼の大村純忠と申すは、元來有馬仙岩の子なりし故、兼ねて高來の援兵を頼み、心強く思ひし處に、此度有馬、藤津の通路を龍造寺に取切られ、大村への加勢叶はず。然る間、純忠力を落し、長島の澁江豊後守公師が方へ書を送り、俵坂まで是を招き、色々談合の上、公師を彼杵の濱より小船に乗せ、松浦鎮信の陣所に差遣す。壻に取るべしと賺して、先づ隆信を平戸へ歸し、扱龍造寺と和議を調へ、同六月廿六日、神文を龍造寺の旅陣へ送り、同名右衛門大夫家秀を質人に出しけり。然るに依りて、隆信應諾せられ、彌、和與ありて純忠が居城を攻められず、其上純忠の息女を、隆信の二男江上權之允家種の室に契約ありけり。

隆信大村と和平

ある舊記にいふ、此本文の如く純忠、先づ平戸鎮信を歸して後、龍造寺に和を乞ひしとあり。詳ならず。今度貝瀬軍に、杉町刑部・武藤丹波守が軍忠を感せられ、杉町へは筑後國の内、木室阿彌陀寺分一所之を給はり、武藤へは鍋島信生より信國作の脇差を給はるとなり。但杉町へは是より後、筑後を龍造寺よ



り知行ありての事なるか。

一、斯くて隆信、大村純忠と和平あり。六月下旬、大村を打立たれ、伊佐早高城の城主西郷石見守純堯を攻めらるべしとて、伊佐早へ討入らる。先鋒は龍造寺下總守康房・小川武藏守信貫、二陣は鍋島信生・納富左馬大輔家景、三陣は倉町左衛門大夫信俊・龍造寺肥後守信時・高木左馬大輔盛房、四陣は内田紀伊守信堅・横岳兵庫頭家實・馬場肥前守鑑周、其次は旗本なり。この外大村左近大夫純忠の神代・松浦藏人父榮の神代を先とし、波多鶴田草野の出勢、深堀中務大輔純賢も來陣し、先づ手當てあたりに宇木の城を攻む。城兵防戦し難く、寄手當日の小先手成富甲斐守信種以下の佐嘉衆、大に進みて不日に攻め落し、城主西郷玄蕃允降參しけり。然るに伊佐早は高來へ甚だ近かりしかば、純堯兼ねて有馬と親くして、急ぎ船を飛ばせ加勢を乞ひて戦はむとす。然る處に、純堯が實弟深堀純賢、兩陣に入りて和平を談合しけるに、則ち一著して合戦に及ばず。爰に於て隆信と純堯始めて對面せられ、純堯の子次郎三郎純尙を、隆信の壻に契約あり。諱の一字を受けて信尙と改名し、

隆信伊佐早を攻む

伊佐早の城主西郷降參

隆信西郷と和平

父純堯は頓て隱居し、小野城へ引入りけり。斯くて同十月十四日、西郷一門廿六人連署の神文を、隆信へ差進す。其人數には西郷兵部大輔純安・同左近大夫行教・目新次郎堯繁・同次郎貞徳・同右京允幸信・同右衛門大夫幸長・同但馬入道宗浦・同右近大夫幸勝・同左衛門尉幸光・同彈正忠幸守・同越後守堯忠・同越中守幸勝・同常陸介幸明船越城主・南肥後守純清・北淡路守幸俊・同伊豫守尙秀・蘆塚伯耆守幸貞・近藤豊前守善明・井崎右衛門尉綱道・遠岳治部少輔堯増・金崎伊豫守種定・宇良右衛門尉尙保・原左京允純秀・矢上又三郎幸治・御崎彈正忠堯・市來加賀守忠末合せて廿六人なり。此時、龍造寺よりも神文を取替はせられ、其上秀島四郎左衛門家周を質として、伊佐早へ遣置き、天正六年までありけり。

一、隆信、伊佐早を治められ、同十一月、有馬領七浦へ討入られしに、當所の郷司小野兵右衛門を先として、五十六人味方へ馳せ參り導き申す。この時、藤津の嬉野・徳島・上瀧・吉田・永田等、先手にありて敵を追拂ひ、七浦悉く龍造寺に相從ふ。夫より隆信、有馬以下高來の輩を征伐あるべしとて、同十二月、島へ渡海せらる。

有馬領七

隆信下松浦出馬附大村高來軍の事



此勢二萬餘騎なり。先づ神代へ著船ありしに、此所の領主神代兵部大輔貴茂、隆信を請じて様々奔走す。又島原式部大輔純豊も、隆信の陣所に馳せ參る。然るに當郡の總地頭有馬左衛門佐鎮貴、前名義純佐嘉勢の大軍にて押寄すると聞きしかば、急ぎ安富安徳以下の味方を相催し、多比良三戸の湊へ出向ひ、龍造寺の軍士と散々討戦ふ。時に龍造寺の先勢打負けて、悉く崩れ立ちしを、大塚勝右衛門、與力の手の者三十餘人踏留まりて戦ひしかば、味方は力を得、返合せて又戦ひ、有馬勢を退けり。斯くて隆信、夫より千々岩の城主千々岩直員を攻めらる。此直員は元來有馬仙岩の末子、鎮貴には弟なりしかば、有馬より加勢を差遣し稠しく防ぎ戦ふ。斯かりし間、龍造寺の軍兵利を失ひ、隆信の旗本まで色めき立ちて崩れむとす。然るに此時、佐嘉の光照寺住持に、空圓とて元は旅僧なりけるが、兼ねて隆信の懇志を受けし故、此度當陣へ見舞の爲に來つてあり。此出家、唯今味方の崩るゝを見て、褊綴の長袖を結んで肩に投げ掛け、長刀押取り敵に向ひ、是は龍造寺與賀の寺僧に、空圓とて、實は松永彈正弟なるぞ。出家とて侮る

など、敵中へ切つて入り、四角八方へ追散らし切死にこそ死にけり。彼の空圓、近年肥前に來り、與賀の蜜藏寺へ假初に宿してありしに、殊勝の出家なりしかば、折々城内へ招かれ、隆信夫婦、其法談を聞かれしより甚だ歸依せられ、頻に城下へ留置かれ、内室の亡母光照尼菩提の爲め、則ち蜜藏寺を修造ありて、光照寺と改められ、彼の空圓を住職に居るられけり。然るに此出家、生國と俗姓を竟にいはざりしが、今度討死しける時、始めて斯くは名乗りけり。隆信、是を聞かれ彌、歎き思はれけり。斯くて隆信、今年は早月迫に及びし間、先づ歸陣あるべしと、諸勢と共に佐嘉に兵船を歸されけり。

### 隆信重ねて高來發向の事

天正六年戊寅正月龍造寺隆信、重ねて有馬征伐の爲め、大軍を催し高來の島へ押渡らる。時に當島の輩安富伯耆守純治、同子息下野守純泰、安徳上野總介純俊を初め、力武對馬守松蘭伊勢守等、龍造寺に屬して降參す。されば右人數の中、安富伯耆守



と申すは、元來當國の者にもあらず、先祖民部入道心空が時、正應五年十一月六日、鎌倉殿より下文を給はりて始めて當所へ下向し、有馬と縁を求め、既に九代に及び舊好の者なりしかども、聊かの恨ありて、今度島原純豊といひ合せ、有馬へ逆意をなし龍造寺へぞ隨ひける。然るに隆信、去冬降参したる當島の輩の内、神代貴茂は別心あらず。島原式部大輔純豊が質人を取るべしと、成松遠江守・成富甲斐守を遣さる。兩人則ち島原へ行向ひて其旨を述べしかども、純豊難澁して其返答に能はず。然る間、成松・成富力に及ばずして打歸りけり。時に鍋島信生、さらば某行向ひ、彼の質人を取るべしと、主従百餘人に水町丹後守信定を召具して、島原が城へ赴かる。其時純豊は大幕打たせ、一族家人等二三百人左右に召置き信生に對面す。信生は唯、一人幕の内へ入りて前後に目を懸けず、質人を出さるべき由申されけるに、純豊猶も領掌せず、面を荒らけて不興氣なり。斯かりし程に、其體既に危かりしを、水町は無雙の古兵にて早推量し、大幕を擱んで座敷へ押入り、眼を見出し拳を握り、其氣勃然として無手と坐す。其時、鍋島の家人も幕内へ入り、氣然を現し悉く

一面に列座しけり。時に純豊、忽ち面を和げ詞を出し、嫡男を質として鍋島に引渡しぬ。信生是を具し本陣へ歸られしかば、大に喜悅ありけり。

一、斯くて高來島中の城持共、數輩龍造寺へ相從ひ、今には有馬左衛門佐鎮貴、領知狭く無勢になりしかば、大に力を落して先非を改め、懇望の上隆信へ和を乞ひ、安富左兵衛純生を納富が陣所へ差出し一書を送る。其狀にいはく、

對隆信鎮賢改先非、向後得御指南度念望候條、内意之段申出候き。就夫然然爲可得御意、安富左兵衛尉差出候。就中故但州到此方、別而被添御心候段無忘却候。其續無相違、彌御入魂承仰候。一至存分者用口上候條、不能審候。恐々謹言。

三月廿三日

鎮 貴列

納富左馬大輔殿

御陣所

と申送りけり。彼の鎮貴、此前方も和を乞ひ、違變重々なりしかば、此度も亦眞

隆信重ねて高來發向の事

二五七

有馬鎮貴  
和を龍造  
寺に乞ふ



言しからず思はれしかば、斯く申す上はとて隆信宥免あり。則ち和平一著し、鎮貴へ初めて對面せられ、嫡子民部大輔鎮貫を、彼の妹婿に契約あり。其悦の使者は成富甲斐守信種なり。扱高來島一圓に靜謐しければ、隆信頓て佐嘉へ歸陣せられけり。此時、有馬鎮貴よりの質人には、一族島原大學士黒備中守なり。島原式部大輔純豐の質には、嫡子木工左衛門、さて又安富下野守泰の質人には、これも嫡男の助四郎なり。此質人共、後には皆々築河にあり。

### 北肥戦誌 卷之廿二終

### 北肥戦誌 卷之廿三

#### 龍造寺隆信筑前國出馬の事

天正六年戊寅三月下旬、隆信、高來より歸陣あり。國中は早東西ともに雌伏しければ、是よりは他國を隨ふべしと思立たれ、先づ筑前國を征せむと陣觸あつて、大軍を催され東肥前へ打出でらる。抑、筑前と申すは、元は少貳の分國にて、其後、中國大内家の支配となり、近年は又豊後の大友より知行して、西筑前の内五ヶ所の城に、豊府より歷々を差籠置き、中國の毛利を押へ、肥前の龍造寺を差搦めたり。其城々には、先づ立花城に戸次伯耆入道々雪、岩屋城に高橋主膳入道紹連、荒平城に小田部入道紹叱、鷲岳城に大津留山城入道宗周、柑子岳城に白杵新助鎮富なり。斯くて隆信、神崎へ著陣あり。先手は手寄なれば、城原の輩仕るべき由下知せられ、

隆信筑前  
に出陣



重松對馬  
守以下降

大將は江上權之允家種、軍奉行は執行越前守・諸岡安藝守・鍋島丹波守にて、背振山を越え筑前の内早良郡へ討つて入る。爰に於て脇山の住人重松對馬守・大教坊・圓信坊を初め六十三人、龍造寺へ降參して、江上衆の陣所へ來りぬ。斯かりし間、城原勢是に氣を得て、則ち彼の山の者共を案内者とし、所々を燒拂ひ相進む。斯くて隆信、敵地繋の爲に内野と云ふ所に要害の地を見量られ、執行越前守種兼・鍋島丹波守種房、其外江上家の輩に、各番にして在陣すべき由下知せられ、其身は先づ佐嘉へ歸陣ありけり。

### 大友と島津日州耳河合戦の事

爰に其頃、薩州の島津修理大夫義久と、日向の伊東大膳大夫義祐威を争ひ、去年天正五年の冬、野尻・高原兩城の合戦に、島津、竟に伊東に切勝つて、舍弟中務大輔家久、其外宗徒の輩を、土持彈正少弼親成が高城竹隈城へ差籠めて、日州を相守らす。斯かりし間、伊東義祐、在所へ溜り得ず豊府へ赴き、大友宗麟を頼みて居たり。此

時義祐、宗麟へ申しけるは、あはれ加勢を給はれかし。島津と合戦を遂げ本意を達して、我が日州の本領を取返して候は、其内半分は加勢の御禮に貴公へ進すべしと申す。仍りて宗麟、是を應諾あり。今年天正六年の夏、島津と戦はむと議す。此事隱なし。島津義久、老臣と共に評定ありけるは、若し大友より龍造寺を語らひ、兩家の勢を併せて當家と戦ひなば、由々しき大事なるべし。所詮、此方より龍造寺を語らふべしと、彼の家臣三人の方より、連署を以て佐嘉へ申送りし狀にいはいく、先年一翰啓入之刻、御懇禮畏悦至極候。爲其辻今度賀雲齋被差上之處、通用依難成、從中途歸宅候様、日州之事義久雖分置候、累歲逆心故、舊冬被屬案利候。然者自豊後到當郡防戦之企候哉、萬一實に候は、彌向後甚深可申談段所存候。仍而乍微色絹布四端令進之候。聊補空書計候。期來信候、恐々謹言。

六月十九日

經 定判

光 宗判

意 鈞判

大友と島津日州耳河合戦の事



納富殿

大友宗麟  
日州に出陣

斯くて大友宗麟は、伊東が申す處に彌、同心あり。日州へ軍兵を差向け、薩摩の輩并に土持彈正を誅伐し、伊東を舊地へ安堵させ、其領内をも分取るべしと思はれしかば、同六月下旬、嫡子左兵衛督義統を大將にて、志賀・佐伯・田北・田原・朽網・吉岡以下の歴々、其勢三萬を日向へ差向けらる。此時日州には、縣の城に島津兵庫頭忠平あり。財部城山崎とに島津中務大輔家久あり。土持彈正少弼親成は、元より居城の高城を守りてありけり。然るに豊後の大軍攻め來る由日州へ聞え、急ぎ土持親成、己が手勢計りにて高城を打出で、豊後勢を待懸く。斯くて大友の軍士三萬餘騎、豊府を立つて梓越屋崎海陸より日向へ入りしかば、土持臈て橋峯といふ所に出合ひ、大友勢と相戦ふ。されども豊後の先陣志賀安房入道道輝、火を散らし討戦ふに、土持が頼切つたる綱田孫左衛門以下八十三人立所に討たれ、土持竟に戦負け、己が高城に引籠る。大友勢三萬を以て、續いて押寄せ是を攻めけるに、城中、此大勢を防兼ね、詰の城松尾に皆取籠りけり。大友の軍士、勝に乗り松尾へ押詰め火を懸く。爰

に於て土持親成、終に遁れ難くして生捕となりけり。斯かりし間、大友義統、則ち彼の親成を誅し、薩州の者共を大半退け、七月に入りて府内へ歸陣ありけり。此時、肥前の横岳が方へ、大友宗麟の狀に云く。

土持表悉屬案中、義統令歸陣候處、爲祝儀太刀一腰、織筋一端送給候。祝著候。猶田原近江入道可申候。恐々謹言。

七月六日

三非齋印判

横岳中務大輔殿

此時、此横岳、龍造寺に屬し兵庫頭と改む。然れども又豊後へも通じけるにや。中務大輔とは大友一味の時の名なり。西國太平記鎮西記等には、此時宗麟日州へ出馬とあり。非なり。

舊記にいふ、義統今度の出馬、五月上旬とも、又ある書に、伊東義祐、今度日州の舊地へ安堵すとも。

一、今度大友義統日州參陣の時、筑後衆も日向の中小邦まで打出でしかども、彼の



島津義久  
宗麟の日  
州に居住  
するを怒  
り出陣す

表早一著せしに依りて、皆小邦より引返しけり。斯くて日州大半、大友の支配と相成りしかば、同年九月より宗麟入道、内室を具して日州へ出張あり、牟志賀といふ所に在宅せらる。斯かりし程に、此事薩州へ聞えて、島津義久大に立腹あり。先度土持を大友に切らせし事、先づは當家の瑕瑾なり。其上日州過半、敵地となりて、已に宗麟、牟志賀に移り其儘在宅するの由、是非なき次第なり。急ぎ人数を差越し、悉く退治すべしと下知ありしかば、島津右馬頭以久、同圖書助忠長、伊集院右衛門大夫忠棟、急ぎ日州へ發向し、先づ佐土原の城に入りて、島津中務大輔が財部の城に居たりしと會して軍評定す。時に土持が舊城の高城へは、山田新助在番しけり。又薩摩より追々に伊集院肥前守久將も來りて、穗北城に入り、是も味方と會す。

或はいふ、此時島津以久、伊集院以下日州へ來りしは、去る八月にて、宗麟、牟志賀へ移られし前よりとも。

一、斯くて大友宗麟は、頃日牟志賀にあり。さらば一戦を勵まし、彼の島衆を討散

らすべしと、近國の旗本共を催されけり。然るに依りて筑後の諸將は、十月二日打立つて、同廿四日に日州へ著陣す。此時、築河の蒲池武藏入道宗雪、同嫡子民部大輔鎮竝、手勢三千にて打出でしが、子息鎮竝は落馬して氣色悪しとて、半途より引返す。時に宗雪、涙を流して申しけるには、如何に鎮竝、年來大友の重恩を請け、斯かる専度を見届けず、其上六十に餘る親の戰場へ赴くを見捨て、己れ一人家に歸るといふ法やある。必ず汝、天の罰を蒙るべしとぞ恨みける。寔に宗雪が申し、如く、鎮竝三年の内に家名を失ひけり。是は鎮竝先達て島津より内意を得て、龍造寺と同じく大友に到り、逆意ありける故とぞ聞えし。

一、大友の總勢四萬餘騎と聞え、先づ山田新助が籠りたる高城を攻むべしと、同十月十日、名貫川を駈渡し、明くる十一日高城に取懸け攻め戦ふ。城主山田新助、固く城を持つて防戦するに、無雙の要害なれば事ともせず。然れども此城、高山の頂に依りて水乏くして、始終籠城叶ひ難くぞ見えける。斯かりし程に、財部城にありける島津中務が方より薩州へ注進し、大守義久へ加勢を乞ひけり。之に



因つて義久、さらば自身發向すべしと、舍弟祁谷院左衛門尉歳久を初め、本田、猿豆、平田、謙田、伊勢、疑靖、新納、肝付、坂尾、竹内、本郷の一族以下都合三萬八千大聖寺日記には二萬餘兵と有を率ゐて、十月廿五日、西國記には十月一日とあり鹿兒島を打立たれ、日州に到りて佐土原戸部に著陣あり。扱大友の諸勢、彌高城と財部の兩城を取圍み、十一月十一日には、西は耳川を境して陣を取る。島津の總勢は、耳川の西の山麓に陣を張る。斯くて十一月一日の午の刻、島津方より軍兵を進め、大友方の筑後陣に切懸る。時に筑後の輩無勢に依りて戦ひ負け、其陣場をも切取られ、悉く崩れて豊後の田原近江入道紹忍が陣と一つになる。然るに大友方の諸勢、當陣の行粧を見て、今度の合戦勝利を得しと思ひけるにや。皆々必死になりて、故郷へ形見を送り、妻子へ遺詞の文を残しけり。其中に齋藤兵部少輔鎮實は、既に陣屋を打ち立ちし時、明日の命を待たぬ身の今朝は甚だ寒しとて、下人に申付け秘藏して持たせける乗替の鞍を割らせ、酒を温め飲みけり。是を限と思定めて打立ちけり。斯くて明くれば十一月十二日の朝巳の刻、大友方より軍を進め、耳川を駈渡し島

津陣へ切懸り、鬨の聲を揚げ弓矢鐵炮を打懸けて亂れ合ふ。兩陣の兵、十萬に及びしかば、其聲天地に響いて夥し。初度の軍は、島津方の先勢本郷の一族と、大友の先手佐伯紀伊入道宗夫左備、田北相模守鎮周右備と暫く戦ひけるが、島津勢打負けて、本郷内藏助、本田因幡守以下、田北相模守が手に討取られぬ。島津兵庫頭忠平、後陣より其體を見て、手の者を引具し駈け來り、自身三間柄の大槍を以て、大友勢を追立て叩き倒し突伏す。其業更に凡夫にあらず。是を見て島津右馬頭、同圖書助も馳せ加はり、同名中務大輔、山田新助は、財部高城の兩城より討つて出で、大將島津義久も、本陣より來つて一つになり、東西南北に輪立ち相戦ひし程に、大友勢竟に打負けて、先陣の田北相模守、味方の敗るゝを助けむ爲め、一番に討死し、其一系列残なく、同名三郎兵衛、同下人忠三郎、善助腹搔切つて空しくなる。斯かりし程に、田北が相備佐伯入道宗夫も、敵中へ駈入り討死しけり。爰に於て大友の總勢、ひたぐれ混崩に崩れて敗軍す。島津中務、山田新助勝に乗り士卒を下知して、追伏せし首を取る。淺猿かりし有様なり。爰に横三丈に餘り、深さ二丈に足



大友勢の  
戦死者

らざる深淵あり。僅の流れなれども、其水の速き事恰も龍門三汲の如くにて、昔より此淵を越すものなし。殊更頃日の雪消に水増し、白波岸を混ひたして冷すさまじ。然るに豊後の敗軍共、後の敵を遁れむ爲め、我れ先にと來り、此淵に行掛りて爲方せんかたなさの餘りに、案内は知らず飛込みしける程に、一人も助かるはなく、數千人の者共、皆水屑とぞなりにける。扱此度大友勢の討死には、先づ彼の老臣に吉岡越前入道宗觀、同嫡子掃部助鎮興、佐伯紀伊入道宗夫、田北相模守鎮周、同名三郎兵衛、其外臼杵鎮次、萩野鎮信、小佐井鎮正を初とし、齋藤兵部少輔鎮實もいひし言葉に違はず討死す。中にも角隅越前入道宗岩は、薩摩の侍本郷忠左衛門と討死す。首實檢の時、大將義久、此入道は年來の知音なりしとて、涙をぞ流されける。(軍法の師なりけり)爰に築河の蒲池武藏入道は、手勢三千を引分け戦ひけるが、味方悉く討たるを見て、今は早是までなりと、從弟の同名和泉守鎮秀と同じく敵中へ駆け入り、切死にこそ死にける。此等を宗徒の者として、大友方の討死三千餘人、途々みちにて討たる者千餘人、手負數を知らず。島津方にも討死本郷内

將軍義昭の御教書に  
島津大友と  
和平

藏助、本田因幡守、海田主膳助、眞方大炊助以下雜兵二千餘人なり。斯くて明くれば十一月十三日、島津義久、其家臣河田駿河守に下知せられ、凱歌を執行はる。時に大友入道、鬱憤に堪へず、重ねて島津と合戦すべしと聞えし處に、其頃は公方義照公、中國に御下向あり。小早川左衛門佐隆景を御頼ありて、備後國に坐ましけるが、此大亂を聞召し、急ぎ伊勢駿河守員順を上使にて、大友、島津兩陣へ御教書をなされ、雙方私の宿意を堪忍して、合戦を止め申すべき由仰下されしかば、上意の趣背き難く、兩陣弓矢を納め、無事の化をなして、兩陣より色々の土産物を調へ、員順を頼みて進上す。扱義久は、同月廿日鹿兒島へ歸陣あり。宗麟も無念ながら府内へ歸陣ありけり。是よりして大友の武威、大に衰微せしとぞ聞えし。斯くて伊東義祐は、豊府の老若惡みし故、豊後への逗留叶はずして、四國へ渡り伊豫國に到つて、河野の一族を頼み年月を送りぬ。

一、此度大友入道、島津と戦ひしを、其前廉角隅越前入道宗岩、五つの凶を擧げて之を制す。角隅は軍配者なり、一つには糧を他國へ荷うて師うしすること、二つには味方は長途の



嶮阻を越えて身を勞し、敵は自國にありて自由なる事、三つには宗麟今年四十九にして厄年の事、四つには宗麟今年寅の歲にて、十月は過害の事、五つには十一日滅門にて寒節の事、是を宗麟用ひずして、終に合戦し敗北ありとなり。

一、此耳河合戦の事、諸記同一ならず。此書は舊記を以て之を書す。或は、いふ、此合戦、天正二年の事なりとも。

### 隆信筑後國出馬の事

龍造寺隆信は、當夏島津よりの内意を得られ、扱思はれけるは、鵝蚌相挾則鳥來其弊といふ事あり。幸ひ大友が日州にありて島津と相挑む。其留守を量つて近國へ出張し、彼の旗下の輩共を一々に切從へむと、築河の蒲池民部大輔鎮竝と心を合せ、同十一月十九日、先づ筑後國へ討出でらる。先陣は鍋島信生、二陣は納富左馬大夫家景、三陣は龍造寺上總介家晴、四陣は松浦衆、五陣は後藤伯耆守家信、六陣は龍造寺和泉守長信、七陣は江上權之允家種、八陣は馬場肥前守鑑周、九陣は神代長

隆信筑後に陣

良の陣代同名彈正忠と、千布因幡守家利しんかり、殿は隆信の旗本にて、都合二萬餘騎、筑後國三瀧郡酒見村に到つて陣を居ゑらる。爰に於て當國の住人等、荒々あらく參陣して龍造寺に相從ふ。中にも築河の蒲池は元より一味なり。其外久留米の豊鏡中務大輔鎮連、草野の草野中務大輔鑑員、下田の堤備前守貞之、西牟田の西牟田左近大夫鎮豊を初めとし、酒見城島の者共段々に來り從ふ。此等は皆兼ねて大友旗下の輩、筑後國の城持なり。隆信、今度當國出馬の初め、各、參陣申すに依りて大に悦ばれけり。其中に戸原河原城主戸原薩摩入道紹眞、山下の城主蒲池志摩守鑑廣此時、未だ勘解由次官とす。古賀の城主三池河内守鎮實等は、大友方にて隆信に雌伏せず、己々が居城へ引籠りけり。然る間隆信先づ戸原入道を攻むべしと、龍造寺勘解由左衛門信家、同右馬大輔信門、内田美作入道卜菴、姉川中務大輔信安、副島長門守光家、鹿江宮内大輔信明以下軍士を率ゐて、戸原河内へ差向けらる。斯かる處に伊駒野城主河崎出羽守鎮堯、大勢を以て戸原を援ふに依り、龍造寺の者共叶はずして引退く。斯くて十一月も下旬になりしかば、隆信先づ筑後を差置き、筑前に打入り敵地を巡見すべしと、

隆信筑後國出馬の事



隆信歸陣

十二月朔日、酒見の陣を拂はれ直に筑前國へ發向あり。時に秋月長門守種實・筑紫右馬頭廣門急ぎ參陣申しけり。其外早良郡の者共馳せ著きしかば、隆信是等を案内者とし、大友方の戸次高橋がありつる立花・岩屋・寶滿の城を攻めらるべきやと議せられしかども、何れも堅城にて、卒忽には叶ふまじき由、導の者共申すに依りて、さらば先づ馬を返すべしと、隆信頓て龍造寺へ歸陣ありけり。

此時、筑紫廣門より弟新助晴門が、今年十一歳になりして、鍋島信生の養子にして、佐嘉へ遣置くべき由申すに依りて、其通りに約束せられ、新助を則ち佐嘉へ同道あり。

一、今年秋月長門守種實、大友宗麟入道の暴惡十餘ヶ條を擧げて、筑前一國はいふに及ばず、隣國を觸廻すに、諸將是に同意し、宗麟を背く輩各々連判をなす。十ヶ條之を略す。  
一、大友宗麟、耳河合戦の後、負腹まげばらを立て、心彌かや、僕み國務猶正しからず。老臣田北大和入道紹徹を誅伐せらる。是は彼の紹徹が嫡子相模守鎮周、去る耳河の軍に一番に討死し、味方に弱みを付くると宗麟大に誹謗して、更に其功を立てられず。

茲に因つて紹徹恨を含みし故なり。又府内の侍古庄左京允兄弟・朽網市佑雄城右衛門大夫惟周故なく勘氣を蒙り出國す。仍りて大友の家人等主を恨むる者多くして、宗麟其威を失ふとなり。

一、今年龍造寺隆信、田原伊勢守尙明を備後國へ差遣し、小早川隆景まで、公方義照公へ御禮を遂げらる。

一、今年隆信、蒲池鎮並と談せられ、人質として秀嶋四郎左衛門家周、築河へ赴く。此秀島、去る頃より西郷への質として伊佐早に赴き、今年又築河に到る。

隆信重ねて筑後國出馬三池落城の事

天正七年己卯三月、龍造寺隆信大軍を引率し、重ねて筑後へ出張あり。是は去冬酒見に在陣の内、來り従ふ輩もあり。又従はざる族もあり。中にも三池鎮實・蒲池鑑廣籠城するに依りて、是を打崩さるべき爲なり。然るに此時、筑後國山門郡鷹尾の城主田尻中務大輔鑑種が伯父に、同名山城守鑑乘といふ者あり。入道して宗達と號す。此

隆信重ねて筑後國出馬三池落城の事

隆信重ねて筑後に

其目的



宗達、兼ねて龍造寺の内に岩楯といふ者と知音なり。仍りて隆信、彼の岩楯を使とし、宗達を賺かされしに、仔細なく承引し、既に大友と手切して、去冬十二月廿二日、隆信、鎮賢と神文を取替し、一向龍造寺に一味す。因つて茲に今年二月十日、鍋島信生よりも神文を送られ、同月廿六日、鎮賢よりも又々神文あり。是併同名の鑑種を味方に引付けらるべきなり。斯かりし間、鑑種も宗達に勧められ、又は甥の蒲池鎮竝申す旨もありしに依りて、頓て龍造寺に心を通じ、今度隆信、當<sup>カ</sup>國<sup>脱</sup>出馬の時、早速蒲池鎮竝と同じく龍造寺の陣に來り、隆信に聘禮しけり。隆信大に悦ばせられ、則ち鑑種、鎮竝を案内者とし、瀬高庄を打通り竹井村に著陣あり。爰に於て先づ三池河内守鎮實を攻めらるべしと、三月廿日、佐嘉勢、三池の古賀の城に向ひ、既に尾嶺に陣を寄せらるゝ處に、鎮實、則ち龍造寺へ降參すべき由懇望す。然るに田尻鑑種は、鎮實が爲には妻女の兄弟なりしに依りて、是を調達し、肥後の筒岳の城主小代伊勢入道宗禪は、又鑑種が舅なれば是へも談合して、三池鎮實、龍造寺へ降參の事彌、一著しけり。然る上にて、鎮實より龍造寺へ質人を差出すべきに、田尻鑑

種堅く申談じける處に、鎮實其節に至り是を違變しけり。斯かりし間、鑑種、隆信へ至つて不首尾を申したる由、大に迷惑して急ぎ小代に赴き宗禪に面談し、則ち此入道を同道して、鑑種、三池に到り、右約束の質人を有無出さるべき由、鎮實へ稠しく申すと雖も彌、難澁しけり。剩へ宗禪入道、三池と内談し、田尻は親子の縁といひながら龍造寺へ一味し、今には敵の事なれば、討果すべきかと内談す。之に依りて三池が隆信への降參、一著事成らずして、田尻は隆信の陣所に來り、又色々内畧しけれども、鑑種もすべき様こそ無かりけれ。斯かる處に小代入道の妻女、肥後より鑑種の陣所に來り、今度夫の宗禪、三池と同心し、龍造寺と弓箭を取りなば、忽ち數代の家を滅すべし。所詮子孫連續の爲と思ひて、宗禪へも聞かせず自ら質人となりて、隆信の陣へ出づべき爲のことを頼みて、唯今來る由申しければ、鑑種其意を得、急ぎ彼の女中を同道して、隆信の陣所へ參り、小代宗禪別心なきに依りて、則ち彼の妻女質となりて陣所へ出で申す由、隆信へ首尾能く調へ、扱彼の宗禪の妻女は、舅女の事なれば、鑑種が鷹尾の城へぞ預りける。斯くて三池鎮實が降參の事、



隆信の軍  
三池鎮實  
を攻む

田尻色々内畧に及びしかども、彌、質人を出さるるに依りて事調はず。さらば三池へ發向すべしと、佐嘉勢各、三池へ討入り、所々へ相働き、青麥悉く薙拂ふ。時に城主鎮實は本城へ取登りけり。斯かりし間、龍造寺の軍士、先づ引取るべき由評定しける處に、小代宗禪入道、妻女の質人に出でけるを怒つて、彌、龍造寺雌伏せず、人數少々芥田神といふ所へ差出し、佐嘉勢に矢を射懸けむとす。茲に因つて佐嘉勢の中より鍋島信生一手にて馳せ向ひ、皆追崩し、檜野まで焼き拂はる。斯くて鑑種打崩すべき由申すに依りて、佐嘉衆少々相加へられ、鑑種手の者中尾與三兵衛種次以下魁を以て、また鷄鳴に切入り、今山悉く仕崩し、三池衆を討取り、田尻勢にも中尾が弟彌三郎討死し、其外疵を蒙る者多かりけり。扱夫より三池の本城を攻めらるべしと、隆信、竹井に在陣ありて、人數を三池へ差向けらる。先陣は田尻中務大輔鑑種〔二陣〕蒲池民部大輔鎮竝、三陣は鍋島信生、四陣は神代長良の陣代同苗彈正忠・千布因幡守、五陣は横岳下野守頼續、其外筑紫上野介廣門〔前名〕安武民部大輔家教〔前名〕山城守。豊饒美作鎮連〔前名〕堤備前守貞之以下、各、肥・筑兩國の内、三瀦山門、

同合戦

三池落城

三根・養父・佐嘉・神崎等の軍兵を従へて三池へ討入り、鎮實が山の城へ取懸る。當日の大將は後藤伯耆守家信なり。斯くて城兵、城戸を持つて相戦ふ。時に寄手の先鋒田尻、蒲池が山門・三瀦の軍兵に、下田の堤が手の者加はつて、一の城戸を打破る。是を見て佐嘉勢の中より、鍋島信生、養父郡の軍士に手の者を加へ、神代の山内勢と一つになり、頻りに進みて城内へ攻入らむとす。されども城兵、烈しく是を防ぎ二の木戸に支へて相戦ふ。斯かりし程に、諸手の寄手疵を蒙り、討たる者數を知らず。其内に鍋島の家人加々良掃部助討死し、松田權助、則ち信生の側にて手柄を現す。然る處に、武藤善兵衛貞清〔前名〕丹後。火矢を以て城外の櫓を燒落しけり。然れども城中猶ほ差怵へ、今朝晨より日夕陽に没するまで、敵味方入亂れ、中々稠しく相戦ひ、いつ果つべき軍とも見えざりけり。斯かる處に、酉の刻に及んで、大雨降り出し、偏に篠を突くが如く、東西を辨せず、敵味方を知らざりしかば、矢を放ち太刀を打つべき様もなく、合戦叶ひ難くして、寄手悉く尾の嶺へ引取りけり。斯くて其夜城主河内守鎮實、風雨に紛れ城を落ちて行方知れずなりにけり。然る間、寄



手の諸勢勝鬨を揚げて引退きけり。

小代入道宗禪龍造寺へ降参の事

斯くて隆信、三池を攻め落され、夫より小代伊勢入道不二軒宗禪を攻めらるべしと、諸勢を率し、先づ芥田神へ差寄せ小代へ取懸けらる。先手は蒲池鎮竝にて、其一勢進んで小路口へ攻め入り、散々相戦ひ、中山藏人其外築河勢數多討死す。時に又米山に小代が長臣荒尾攝津守家經、其勢二千計りにて打つて出づ。之に依りて佐嘉勢の中より鍋島飛驒守信生、三千を以て米山へ取懸けらる。然るに荒尾如何思ひけむ、一戦に及ばず引退く。鍋島續いて追駆け、町小路に火を懸け、宗禪が梅尾の館を焼き破り、猪鳴叫んで討戦ふ。此時宗禪の一族小代越前守主從を、鍋島衆の内より木下四郎兵衛昌直討取りけり。其外鍋島衆に、伊東一慶入道・同名兵部少輔・大塚勝右衛門・川浪大藏・石丸藤左衛門・下村生運・小宮左馬允・小柳彌藤左衛門以下進戦ひ、城兵百餘人討取りぬ。斯かりし程に、宗禪入道并に嫡子左近將監親傳防ぐ事を

隆信小代を攻む

小代入道宗禪降参

得ずして、筒岳の本城へ取登り、木下四郎兵衛まで懇望を以て降参の由申しければ、鍋島是を免し、則ち合戦を止められけり。時に鍋島の家人江副兵部左衛門、城兵荒木彈正・同子進士允を虜り、信生の前に引居う。信生見て、彼の者共は弓箭の引廻をする曲者なり。早々誅すべしと申されしかば、彈正は兵部左衛門之を斬り、進士允は安本源太左衛門首を刎ねけり。

ある記にいふ、此時隆信、小代を攻めらるべしと、梅尾の城近く山上に陣を居ゑ、城を攻められしに、小代越前守・荒尾攝津守切つて出で、龍造寺の先手築河の蒲池鎮竝の一勢を切崩す。時に鍋島信生入替はりて相戦ひ、小代衆敗軍し、越前守は討死し、城主小代親忠下城、父の宗禪入道を質人に出すとあり。非なり。

一、此時、筑後國八院の鐘ヶ江長門守・菅原家續、龍造寺に相従ひ、神文を呈す。其文にいはいく、同名宮内大輔事罷失候儀、家續努々存知不仕候。上下之を略す。  
一、此時、肥後國隈本の城主城越前守親冬も、龍造寺に屬して質人を出す。



隆信山下の蒲池鑑廣を攻めらるゝ事

龍造寺隆信、小代宗禪入道を従へられ、諸勢筑後へ陣を返し、夫より山下の蒲池勘解由次官鑑廣が未だ従はざるを攻められるべしとて、四月八日、肥・筑兩國の軍兵凡そ二萬餘騎を以て、山下へ取懸けらる。抑、此蒲池鑑廣と申すは、築河の蒲池と一家にて、筑後國の内八千六百町を知行し、當國に於ては一二の大名なり。然るに此度、龍造寺の軍兵必定押寄すべしと思ひしかば、矢原・谷河・上妻・菖蒲尾木等所々の要害に、數千の健兵を差籠め置き、山下の大河を前に當て、亂杖・逆茂木を引竝べ、鐵炮百挺用意し、其外端城に至るまで堅固に持ち、殊に頃日、大友の軍士星野親忠を攻めて、生葉に在陣せしを後援に頼みて、佐嘉勢遲しと待懸けたり。斯くて隆信は、既に山下の城近く、層手に一夜陣せらる。案内者は田尻鑑種なり。爰に菖蒲尾の要害に、上妻・酒井田、其外當郡の輩取籠りて居たり。隆信、此敵を仕崩すべきの由、案内者たるに依りて、田尻鑑種に下知せらる。茲に因つて田尻、先勢として佐

隆信蒲池鑑廣を攻む

嘉衆相加はり彼の菖蒲尾に取懸けたり。時に敵烈しく防戦し、味方度々崩れ立ちしを、田尻手の者を初め、佐嘉勢より副島式部少輔・北島河内守・成富左近・同又次郎以下進んで相戦ひ、北島は敵を討つて首を取り、副島は混々ひたたくと構に付いて切破り、其内に入りて相働き、諸勢續いて合戦し、菖蒲尾を容易く攻め破り、翌日龍造寺の總軍、皆山下の城の麓へ相進み、所々を働いて先づ水田へ打入りぬ。此時、大友

義統宗麟嫡子より、木室次郎入道への狀に云く、  
前はなし、

龍造寺山城守其外惡黨申組、蒲池勘解由要害取掛候處、其方事、足城取誘數度之防戦難得勝利、依無勢不持支之由註進到來候。殊に親類被官、或分捕高名、疵或戦死之由、粉骨之次第感入候。必以判形可顯志候。恐々謹言。

卯月十七日

義統判

木室次郎入道殿

肥後國和仁大膳允龍造寺へ和を乞ふ事

隆信山下の蒲池鑑廣を攻めらるゝ事 へ和を乞ふ事

肥後國和仁大膳允龍造寺



扱隆信先づ山下を差置き、五月下旬に肥後へ討入られ、和仁の城主和仁大膳允を攻めらるべしと、鍋島信生・小川武藏守・田尻中務大輔を和仁城へ差向けらる。先手は案内者たるに依りて田尻なり。斯くて寄手の諸勢、和仁の里城へ取懸け、真前に田尻の手の者、城戸口に付いて関の聲を揚げ、打破らむと相戦ふ。是を見て、佐嘉勢の中より、中野式部少輔・鎗山孫右衛門・水町彌太右衛門・大塚勝右衛門・田代次郎助・北島河内守以下、田尻に續いて挑み戦ひ、上野三郎四郎歳十七、首三つ取り、中橋平兵衛も、一番構に入りて首一つ取り、秀島隼人手疵を蒙り、相浦河内守討死す。又鍋島の手より江副兵部左衛門、一番に北の口より乗込みけるに、同じく甥の江副傳兵衛・小森源右衛門、是に續いて攻め入り相戦ふ。されども城兵烈しく防ぎて、容易くは城落すべしとも見えざりけるに、武藤善兵衛・貞清、火矢を以て城内を射付け、其上田尻鑑種が計略にて、城主和仁大膳允降参すべき由申しければ、鍋島信生、是を宥免あり。則ち軍を止めて攻口を井くつろげらる。然る間、大膳允頓て城を明渡しけり。時に信生、田尻が數度の軍忠を賞せられ、當城を彼の一族田尻石見守鎮貞に預け給

和仁大膳允降参

はりけり。

或はいふ、相浦河内守は、天正十五年和仁の城滅亡の時、討死すとも。

或はいふ、和仁大膳允を丹波守とも。

### 同國永野紀伊守以下同じく和を乞ふ事

鍋島信生以下納富能登守家理等の諸將、夫より同國木山の城主永野紀伊守を攻むべしと彼の城へ取懸けらる。中にも納富が一列の軍士に、大隈兵部少輔・小宮善助・半島兵部允・伊東一慶入道・小柳彌藤左衛門進んで相戦ひ、其外堤左馬允軍忠を抽んで、田代次郎助疵を蒙る。斯くて永野紀伊守終に怵へずして降参しけり。斯かりし間、三船の城主甲斐民部大輔親直入道宗運或は鑑隆。同子息相模守親秀或は右京大夫鎮隆。を初め、木野山鹿の輩悉く降参す。其中に甲斐入道は、同名彌左衛門が申す旨あつて、最前より志を龍造寺へ通じけり。斯くて鍋島信生を初め隈府へ討入らる。時に地下人等、大勢にて出合ひ烈しく相戦ひ、龍造寺の先勢悉く敗走し、鍋島信生の陣に崩れ

永野紀伊守以下降参

同國永野紀伊守以下同じく和を乞ふ事



懸る。其内に副島式部少輔・中野監物・島原大學助・松田彌右衛門・大塚勝右衛門、唯四五人返合せ、敵を突立てく討戦ひ、杉町藤右衛門も進んで敵〔の首脱カ〕二つ取る。其勢ひに地下人皆引入りしかば、龍造寺の輩勝に乗り、一番構を打破りて少時息を休め、夫より八代の赤星を攻むべしと評定ありしかども、先づ歸陣すべきに衆議決し、龍造寺の諸勢、隈府より皆々筑後の本陣に引返しけり。

一、隆信、山下の蒲池を攻めらるべき爲め、又々水田へ在陣あり。時に高良山の祝部鏡山大明神武邊安實、龍造寺に相従ひ神文を贈る。

此祝部、俗ながら大明神と稱す。其謂之を略す。

一、隆信、此時田尻鑑種が軍忠を賞せられ、始めて領知を與へらる。其村付に云く、

村付

- 一、豊永貳拾町、
- 一、野々宇田六町、
- 一、岡塚八町、
- 一、楠田四拾五町、
- 一、新關四拾五町、
- 一、江の浦上下六拾六町、

此外、自今以後御忠義次第領地之儀可進置候。以上。

天正七年六月朔日

隆 信判

鎮 賢判

鑑 種參

北肥戦誌 卷之廿三終

同國永野紀伊守以下同じく和を乞ふ事